

密教綱要

11  
217

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

始



21-217

豊山大學長權田雷斧著

密

教

總

要

大正  
5. 12. 6  
丙交

東京 丙午出版社發行



權 田 大 僧 正 像

緒言

東京の帝國大學は、夙にその文科大学に、印度哲學の教課を設けて、僅かに佛敎研究の門を開きたれども、三十餘年來、未だ獨立の講座なく、課程備はず、各週の時數も亦極めて少くして、大小の教義は、その一隅すら窺ひ知るべからざるを歎くもの多く、適宜の方法を以て、補足せられんことを冀ふこと、益々切なりき。而して、法と人と時と並び得ること至て難く、多年學徒の望を空しくしたりしが、昨秋、東叡山寛永寺に、曼荼羅講傳會の開かるゝや、密敎は、今、權田僧正によりて、能く講じ能く傳へらるゝを信ずるもの多く、學内の議も、亦漸くこゝに動き、一はこれを以て、聊か從來の缺陷を充たし、一はこの機に臨んで、講義の公開を試みんと決し、高楠順次郎、松本亦太郎、姊崎正治、藤岡勝二を委員として實

行に當らしめ、佛教の教課を有する都下の諸學校に檄を傳へ、數を限りて、職員學生の聽講を容れ、こゝに師を請じ、拾回貳拾時に亘りて、密教要旨の講演を開くことゝはなれり。蓋しこれ、文科大學に於ける公開講義の嚆矢にして、講師を外に聘したるも、亦これを以て最初とす。しかも、講演月を越えて尙聽衆の大いに減ぜざりしは、事に當れるもの、頗る喜びしところにして、偏に講師の誨而不倦に由らずんばならず。餘寒料峭の時、師は實に、病を冒して老軀を講壇に運ばれしなり。講滿ちて半歲、今や師の手記印刷せらるべしと、此に於て、講演日録を最後を附し、卷頭に由來を記し、以て此書が『兩部曼荼羅通解』と共に、密教研究の鍵鑰たるべきを冀うて止まず。

大正五年十一月三日

藤岡勝二識

目次

第壹編 密教の流傳

第一章	印度の密教	一
第二章	支那の密教	三
第三章	日本の密教	六
第四章	弘法大師相承	七
第五章	血脈の等葉不等葉	九
第六章	立教開宗	一〇
第七章	立教開宗に關する八宗論	一三
第八章	十大弟子	一五
第九章	野澤十二流	一五
第十章	古義新義の分流	一六

### 第貳編 密教の教相

第一章	顯教と密教附顯密二教の起因	一七
第二章	教相と事相	二五
第三章	教相の二大學派	二七
第四章	兩部大經の大意	三〇
一、大日經大意		三〇
二、金剛頂經大意		三四
第五章	兩部大經の教主身土と野山根來分派の原因	三六
第六章	横豎の判教	四二
一、横の判教		四二
二、豎の判教		四四
<small>異生羶羊心、愚童持齋心、嬰童無畏心、唯蕘無我心、拔業因種心、他緣大乘心、覺心不生心、一遣無爲心、極無自性心、秘密莊嚴心</small>		

三十住心と諸宗	五〇
第七章 諸法緣起説の異同	六二
第八章 六大四曼三密	六七
<small>地、水、火、風、空、識——大、三、法、羯——身、口、意</small>	
第九章 一法界多法界	七三
第十章 心法色形	七五
第十一章 繪木法然	七六
第十二章 所化機類	七八
第十三章 即身成佛	八〇
第十四章 往生淨土	八二
第十五章 非情成佛	八三
第十六章 三句、八心、三劫、十地	八七
一、三句	八七

因、根、究竟

二、八心……………八八  
 種子心、牙種心、痘種心、葉種心、敷華心、成果心、愛用種子心、嬰童心  
 三、三劫……………九二  
 第一重 第二重 第三重  
 四、十地……………九八  
 歡喜地、離垢地、發光地、焰慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地  
 五、三劫と十地……………一〇〇  
 六、十六大菩薩生……………一〇〇  
 第十七章 過患斷と功德斷……………一〇三  
 第十八章 五智、四身……………一〇五  
 大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、法界體性智——自性身、受用身、變化身、  
 等流身  
 第十九章 教門と觀門……………一〇八  
 第二十章 實證と教道と即順常途……………一〇九

第參編 密教の事相

第一章 野澤十二流……………一一四  
 廣澤六流、小野三流、醍醐三流  
 第二章 十指異名……………一一八  
 右手——大指(空)頭指(風)中指(火)無名指(水)小指(地)——左手同上  
 第三章 十二合掌……………一二〇  
 堅實、虛心、未敷蓮、初刺蓮、顯露、持水、歸命、反叉、反背、互相著、橫拄指、覆手向下、覆手  
 第四章 四種拳……………一二二  
 蓮花、金剛、外縛、內縛

第五章 灌頂儀式……………一三二

第六章 灌頂種類……………一二六

第七章 四種法、五種法……………一二八  
息災、增益、降伏、敬愛、鉤召

第八章 護摩……………一三五

第九章 三種菩提心……………一三七  
勝義、行願、三摩地

第十章 孔字月輪觀……………一三九

第十一章 月輪觀の五種三昧……………一四四  
刹那心、流注心、甜美心、摧散心、明鏡心

第十二章 五相成身觀……………一四五  
通達菩提心、修菩提心、成金剛心、證金剛身、佛身圓滿

第十三章 五字嚴身觀……………一五〇  
阿、縛、羅、賀、法

第十四章 道場觀の廣中略……………一五二

第十五章 五種三味道……………一五三

第十六章 理供養、事供養……………一五四

第十七章 兩部曼荼羅……………一五六  
一、曼荼羅の語義……………一五六  
二、現圖曼荼羅の作者と現圖の語義……………一五八  
附、四面器等祕密道具の作者

三、兩部曼荼羅總體の上の差別……………一五九

四、胎藏界曼荼羅……………一六二

五、胎藏界現圖曼荼羅の建立……………一六七

六、金剛界曼荼羅……………一六八

七、金剛界現圖曼荼羅の建立……………一七三

第十八章 諸尊曼荼羅大例……………一七八  
一、阿彌陀曼荼羅……………一七九  
(イ) 趣釋經所説の圖……………一七九



(ロ)興教大師五輪九字祕釋の圖……………一八一

(ハ)惠雲法師請來九品曼荼羅……………一八二

(ニ)二十五菩薩來迎圖について……………一八三

(ホ)阿彌陀如來の形像……………一八三

  甲、經軌の異相……………一八三

  乙、印契の標幟……………一八五

二、不動明王曼荼羅……………一八八

  (イ)舊圖樣……………一八八

  (ロ)新圖樣……………一八九

# 密教綱要

權田雷斧著

## 第一編 密教の流傳

### 第一章 印度の密教

印度密教の相承は、摩訶毗盧遮那如來、法界宮に於て兩部の傳法灌頂を以て金剛薩埵に授けて、兩部の大經を受持せしむ。金剛薩埵は傳法の祕璽を相承し、又兩部の大經を受持し、結集して、兩部各各に十萬と爲し、南天の鐵塔に納めて時機の至るを待てり。

南天鐵塔の存否に就ては、古來議論あれども、其本據は金剛智三藏の金剛頂の義決にあり。又華嚴探玄記に出でたる日照三藏の説、及僧祥法師の法華傳は此れが准證なり。故に余は其實在を信するなり。

佛滅後八百年、龍猛即龍樹菩薩、佛の懸記に應じて出世し、南天の鐵塔を開き、親り金剛薩埵に面授して、兩部大經を附屬せらる。而して龍猛菩薩は之れを龍智菩薩に授け、龍智菩薩は之れを善無畏に授け、又金剛智（即ち）三藏に授けたり。何れも兩部一雙に相承して片々にあらず、然るに無畏三藏は、入密以前に那蘭陀寺に於て空宗を修め、金剛智三藏は、入密以前同寺に於て唯識瑜伽等の法相學を修めたり。兩三藏共に龍智に投じて兩部の大法を受け、其蘊奧を叩き、相承は渦瓶にして差異なしと雖も、傳道は其の對機を鑒みて之れに投ぜざる可からず。中印度は當時無著、天親等の教化を受け、瑜伽唯識等の法相の學盛に行はれ、庶民亦多く之れを信じき。然るに金剛智三藏は、中印度に傳道せるを以て、其入密以前に修めたる學解に由り、時機に應じて多法界を本として、密教を弘通せり。隨つて支那に來つて翻譯する所の本經、儀軌等多く法相の術語を用ゐたるなり。不空三藏も亦之に倣へり。南印度は龍樹、提婆等の教化に由つて空宗盛んに行はれ、人民亦多く之を信ぜり。而して無畏三藏は、南印度に傳道したるが故に、自ら先きに學する所に依り、機に投じて、一法界を本として教化を布けり。隨つて支那に於て翻譯する所の本

經儀軌は、多く中論、智度等の術語を用ゐたり。兩三藏敢へて異を好むにあらざれども、時機に對する教化の方便止むべからざるに出でたるものなり。以上は印度の相承なり。但し釋迦所說の雜部の密教に就いては、其相承を詳かにする事能はざるなり。

## 第二章 支那の密教

支那の流傳は、釋迦所說の雜部の密教は、西晋の永嘉年中に、印度の人帛尸梨密多羅來つて、大灌頂經を譯して之を行ひしを始めとして、東晋、佛陀跋陀羅、三秦鳩摩羅什、元魏、菩提留支、陳、闍那耶舍、隋、闍那崛多、唐の阿地嬰多等諸三藏、支那に來つて之を譯し、之を傳ふと雖も、其相承明了ならず。

傳教大師相承の雜曼荼羅相承師々血脉譜一首ありて、唐の菩提流支三藏より、草堂寺比丘太素に傳はり、太素より傳教大師に傳はりたる事、又唐の阿地嬰多三藏より國清寺惟象に傳はり、惟象より傳教大師に傳はりたる事は明なれども、嬰多、流支、兩三藏は、何れより相承せしや、未だ明了ならず也。大日所說の胎金兩部の密教

は、善無畏三藏、唐の玄宗帝開元四年に支那に來り、同五年に金剛頂虚空藏求聞持の法を譯し、同十三年に大日經の三千頌の略本を翻譯し、兩部灌頂の曼荼羅を開いて、一行阿闍梨に授く。之を兩部曼荼羅系統の密教が完全無闕に支那に傳來せし最初と爲す。然るに無畏三藏正嫡の資たる一行禪師は、嗣法の弟子なくして、開元十五年に、四十五歳を一期として早世せしを以て、法脈は支那に於て斷絶せり。

然るに傳教大師の胎藏曼荼羅の血脈譜に依れば、一行阿闍梨の法流は、靈巖寺の順曉阿闍梨に傳はり、順曉阿闍梨は、之を傳教大師に授けたり。果して然らば傳教大師胎藏灌頂の式作法及祕印祕明は、無畏、一行の法流なるべし。但し山門の諸師之を相承せりや否や詳ならず、金剛智三藏は、附法の弟子不空を伴うて、支那に入らんと欲し、風波の難に遇うて、海上に漂流すること三年餘、開元八年漸くにして支那に入ることを得たり。後遂に勅を奉じて、兩部の曼荼羅を建て、灌頂の壇を開きて、一行等をして五智の瓶水に浴せしめ、金剛頂略出經等を翻譯して、密教傳道に盡せり。此れ胎金兩部系統の密教が支那に傳來せられたる第二なり。無畏三藏は龍智に隨つて、兩部及一多法界、雙壁併承して餘す所なしと雖も、印度に於て多く一法

界を宣傳せし故に、支那に來つても亦大日經宗を表とし、觀行門に依つて、多く一法界を宣傳せり。菩提三藏も亦龍智に傳法して、兩部の祕訣、一多の印璽、相承底を盡すと雖も、印度に於て多く多法界を宣傳せる故に、支那に來りても亦金剛界を表として、宗義門に由つて多く多法界を宣傳せり。無畏、金智、教を布くと、一多法界互に相増するに由つて、支那に來つて末徒の偏見を遮せんが爲に、無畏は金智に隨つて其所傳を傳へ、金智は無畏を禮して其所傳を受けたり。兩師龍智の所に於て、曾て受けし祕訣と敢へて異なることあるにあらざるなり。是に於て、末徒の疑霧散じて相資相成せり。之を金善互授の大事と稱して、東密の相承する所なり。此相互授受は、無畏三藏大日經翻譯以前ならん歟。何となれば、大日經疏に菩提三藏の説を舉示せらるゝを以てなり。菩提三藏は資の不空に傳附し、不空三藏は青龍寺の惠果に授く。不空三藏授法資の中に法て、惠果は其正嫡なり。以上を以て支那の相承と爲す。

印度支那に於て、既に顯密二教の建立なきにあらずと雖も、密教は觀行の作法として傳播崇仰せられて、各宗の間に行はれたるを以て、法相三論、天台、華嚴等の如き、

折り目厳しき立教開宗の判教はなかりしならん、何となれば、印度支那の祖師に嚴格なる判教の沙汰は、未だ之なきを以てなり。

### 第三章 日本の密教

日本密教の傳來に就いては、役の小角は孔雀經の法を傳へ、大安寺の道慈律師は虚空藏求聞持の法を傳へたりと雖も、纔に一尊の念誦行軌を相承せしのみにして、未だ完全なる密教と云ふべからず、東大寺二月堂會式の作法も密教なるべしと雖も、同山に於て之を祕密にするが故に知ると能はざるなり。されば完全なる密教、兩部大法の相承は、平安朝以後にして、天台にては傳教慈覺智證の三師により、眞言にては、弘法大師、小栗栖寺常曉、靈巖寺圓行、禪林寺宗叡、安祥寺惠運の五師によれり。此を密教傳燈の入唐八家と稱す。台門にては覺大師の法流は、山門谷流に於て傳燈相承して、今に尙盛なり。智證の法流は、寺門に傳燈相承して、法燈今に輝けり。然るに傳教大師の法流に至つては、斷續疑問に屬す。比叡山下坂本の生源寺に相承する所の山家灌頂は、傳教大師の相承と云ふと雖も、余は之を信ずること能はざ

るなり。故花山元慶寺の亮雄阿闍梨も之を疑へり。そは彼の山家灌頂の式を讀まん人は、思半に過ぐべきなり。眞言五師の相承に於て、常曉以下四師の血脈は、纔に繼嗣を斷じて、法流渴盡せり。四師の血脈は既に已に斷絶せりと雖も、獨弘法大師の法流は、滔々として遠く現代に灑けり。

### 第四章 弘法大師相承

日本眞言密教傳燈の高祖弘法大師は、大和久米寺の塔中に於て、漢譯の大日經七軸を感得せしを起因として、桓武帝の延暦二十三年五月、命を銜んで入唐し、長安城青龍寺、惠果阿闍梨に従つて、延暦二十四年二月以後に當る、六月胎藏の學法灌頂に入壇し、七月金剛界の學法灌頂に入壇して、何れも大日如來を得たり。惠果阿闍梨普門の大機なることを知つて、不思議々々と讚歎し、兩部の大經、蘊奧を傾けて教授せり。學既に成つて、人天の大導師となるに堪へたるが故に、八月更に灌頂曼荼羅を開き、建て、傳法大阿闍梨の職位を授けたり。兩部の極秘、一多の玄奧、一器の水を一器に漏すが如く、授受決了し、相承の儀軌本經數卷を齎らして、大同元年十二

月歸朝し請來の本經儀軌等を上奏せり。其將來せる本經儀軌は、目下佛書刊行會が頒布する所の三十帖冊子にして、其眞筆の本は仁和寺に藏せり。眞に稀代の珍書と稱すべし。斯くて大師は高雄山寺に於て始めて灌頂開壇して、廣く人天を度し、東寺を以て根本道場として、眞言密教の立教開宗をなせり。故に傳燈の第八祖本朝密宗の高祖と仰がる傳教は大師より先きに密教を相承し來りて灌頂を行じ、密法を修すと雖も、天台を本とする故に密教の高祖と仰がるゝに至らざりしなり。空海は承和二年三月二十一日、六十二歳を一期の終結として、高野山に入寂せり。青龍寺、惠果阿闍梨に多くの授法の資ありと雖も、中に於て六人を附法の弟子となす。然れども河陵の辨弘と新羅の慧日とは、唯胎藏の一界を受け、劍南の惟上と、河北の義圓は、唯金剛界の一法を傳ふるのみ。義明供奉獨り兩部の灌頂を受けて、正嫡附法の弟子なりと雖も、惠果に先き立ちて早世せり。弘法大師は既に兩部一雙に惠果より受けたるを以て、即ち正嫡附法の弟子たることを言を俟たざる所なり。兩部に於て、片界の相承及び胎金を異なる師に受けたるは、密教に於ては正嫡を以て目するを許さずして、乃ち傍出傍流となすなり。又大師の祕藏記は惠果の御口

説を筆記せし書にして、事相教相網羅して餘まらず。大師の立教開宗は此書を以て根本とせり。密教を學習せんと欲する人は、祕藏記を學習せざるべからず。又入唐八家の中に於て、傳教大師は惠果の相弟子、順曉阿闍梨に傳法せりと雖も、慈覺智證及び常曉等は、惠果の資の法潤義操、及び孫資の義眞、法全等に受けたり。之を以て考ふれば、台東兩密の眞諦は、淺深なきにあらざるべきも、末學の論ずるが如き大差あるにはあらざるを知らん。

### 第五章 血脈の等葉不等葉

第五祖金剛智三藏、唐の開元二十九年八月十五日、東都薦福寺に於て示寂の後、不空三藏詔を奉じて再天し、龍智菩薩を禮して阿闍梨と爲して、重ねて兩部の大法祕密の印璽を相承せり。故に金剛智、不空の次第相承に依れば、大師に至つて兩部共に八代なるを以つて、兩部等葉の血脈と云ふ。若し龍智、不空の次第相承に依れば、大師に至つて七代なり。此亦兩部等葉なり。然るに大師の血脈に、金剛界は金剛智、不空の次第に由つて八代と爲し、胎藏界は龍智、不空の次第に由つて七代と爲せ

しあり。此れは是れ金剛界と胎藏界と代数不同なる故に、不等業の血脈と云ふ。不空再天の規模を示さんが爲に、金胎不等業になせしものなれども、其の實は前に演ぶるが如なり。

### 第六章 立教開宗

案ずるに兩部の大經及儀軌に、顯密對辨の説なきにあらざれども、印度支那にありては、鎮護國家の大法として崇敬せられ、觀練薰修の行軌として傳授せられたるも、印度支那の祖師に、嚴たる判教の著書なきより考ふれば、特に教相上の判教なかりしならん。然るに弘法大師は、正しく金剛頂五祕密經、金剛頂瑜祇經、分別聖位經、大日經、金剛頂經、楞伽經の六經と、菩提心論、智度論、釋摩訶衍論の三論とに依りて、横に顯密二教の判教を爲して、辨顯密二教論二卷を著し、以て天台華嚴の顯の一乗と雖ども、悉く顯教の分齊に屬せしめ、又大日經、菩提心論を依憑として、豎に十住心の判教を爲して、十住心論及び祕藏寶鑰を作して、前來所傳の三乘一乗の面を顧みず、嚴然と顯密二教の優劣差降を判ぜり。印度に於ては法華、華嚴等の經はあれども、

支那の如き一乗教あらざるが故に、密教の本經儀軌に顯教と説くは、皆三乗教を指して云ふ。随つて無畏三藏等の釋に、顯教と云ふも亦三乗教なり。支那に於ては、天台華嚴の一乗の立教開宗あれども、之を以て、顯教の分齊なりと斷定せし密教の祖師なく、又學者なし。然るに大師は天台華嚴の一乗教を以て、横の判教には淺近なる顯教に攝し、豎の判教には、天台を第八とし、華嚴を第九として、第十の祕密莊嚴心に入ること許さず。故に若し印度支那の密教に對望すれば、弘法大師所傳の密教は、日本に來つて、其面目を新にせりと謂はざるべからず。否大師が印度所傳の密教を因縁として、自己心中、内證の密教を開顯説示せしものなりと云ふに躊躇せざるなり。何となれば大日經の解釋に於て、無畏三藏と同じからざる所あると共に、法身三密觀に於ても、一行阿闍梨を非難せる所等あるを以てなり。大師著作を拜讀せん者、此意を得るにあらざれば、大師の眞意を知ること能はざるなり。

因に云ふ。台密の教相は、慈覺大師、金剛頂經の疏に依るに、大日經疏の面の如く、三乗教を以て顯教となせり。故に自ら一乗教は密教と判せざるを得ざるを以て、華嚴、法華等の一乗を悉く密教とせり。然るに此密の中に於て、唯理祕密の密教と、

事理俱密の密教との二種の別を立て、法華華嚴等の一乗教を以て、唯理祕密の密教と判し、大日所説の兩部大經等を以て、事理俱密の密教と判じて、其優劣を示せり。智證大師亦之に同じ。然れども智證大師には、法華を以て顯教と稱せしことあり。五大院安然阿闍梨は、教時義及菩提心義等に於て、法華華嚴等の一乗教は、佛の正説には大日經等の如く、事祕密の法門を説き給ふを以て、事理俱密にして、大日經等に對して勝劣あるに非ずと雖も、結集者之れを省きて結集せざる故に、經文になきなり。故に結集の經の上より論ずれば、唯理祕密のみなれども、佛正説は事理俱密なる故に勝劣なしと云へり。

後世に至つて、山門寶池坊證眞師、天台眞言二宗同異章を著して、天台眞言全同にして優劣なしと論じ、且眞言は鈍根の人の爲に、多く有相の方便を明すを以て、淺く法華は理觀を説くを以て深しとなせり。廬山の仁空闍梨、大日經義釋の搜訣鈔に之れを破して、證眞は、密教の有相の方便、即ち法身如來の三密なることを知らずして、淺近と貶するは、罪深しと爲せり。

上來演ぶる所の如く、台密は慈覺、智證等の時代は、理同事勝の故に、密教は法華よ

りも勝れたりとなし、五大院時代には、結集經の文相には勝劣あれども、佛の正説は、法華遮那共に事理俱密にして、勝劣なしと論じ、證眞は結集の經文の上に於て、法華、遮那同一にして、敢て異なることなしと雖も、法華は理觀を明し、大日經は有相の方便を説く。然るに、理觀は深き故に、若し淺深を論ずれば、法華深しと云ふ意なり。

### 第七章 立教開宗に關する八宗論

弘法大師の八宗論の事は、大師御著作の書にも、又實惠、眞雅等大弟子の著作書にも、正史にも見えざれども、法三宮眞寂親王、孔雀經音義の序に記し給ひ、又吾祖與教大師の五輪九字の祕釋にも記し給ふことなれば、事實は之ありしことなるべし。然れども、世間傳ふる所の或る傳記の説の如きは、如何はしと思はる。何となれば或る傳記の如きは、論議問答の如何に壯烈なりしやは之を記せずして、全く法術競争の有様のみを陳べたり、法相の護命僧正は、唯識觀に入りて、宮中に大波濤を漲らし、三論の玄叡師は、八不中道の觀に住して、大火を起し、天台の義眞阿闍梨は、一心三諦の觀に入つて、時ならざるに南殿の橋に華を咲かしめ、華嚴の普機和尚は、大床に

鈴を投げたるに、獅子と化して吠え廻れりとあるは、疑問なき能はず、法義の論談決擇に非ずして、手品師の術くらべの如くなるは、徳學兼備の宗匠としてはあるべからざることなり。宮中に大波を起したりとて如何にしてか、唯識中道の眞理を示し得べき。大火殿中を焦せしが、何すれぞ八不中道の妙理を示し得んや。又金鈴が獅子に化して吼けり廻はりしが、重々無盡四無礙法界を如何に顯揚し得んや。又草木成佛が天台宗に限れるにもあらざれば、敢て手柄にもあらざるべく、不時に花が咲けばとて、法華の妙が顯はるゝにもあらざるべし。思ふて茲に至れば、頗る滑稽にして、ある傳記の如きは小説たるに過ぎざるなり。私に案ずるに、大師の顯密二教及十住心の判教に對しては、四家大乘の諸師難問を呈せしならんも、技倆くらべの如きことは斷じてなかりしならん。然るに眞寂親王の孔雀經音義の序、一度世上に出でしより、好事家が牽強附會の説を捏造して、八宗論の有様を、愚俗の目を喜ばしむる様、小説的に記せし者ならん歟。又ある傳記に、大師が一字頂輪王の三昧に住して、毘盧遮那身を現じ給ふ以前に、先づ字の觀に入りて、宮中に火焰を放ち、次に字の觀に入りて、殿内に大波を起すとあるは、大師の徳を大にせんとして、却

つて怪しき技倆くらべの窩中に投ぜしものにして、實に遺憾なり。又大師が遮那身を現じて、諸宗の碩徳を歸伏せしめたる三摩地は、五臟の三摩地にして、一門の一字頂輪王の三摩地にはあらざる也。

### 第八章 十大弟子

高祖弘法大師に隨つて、兩部灌頂を受けたる弟子は、數百人なりと雖も、中に於て實慧、眞雅、杲隣、眞濟、道雄、圓明、眞如、泰範、智泉、忠延の十名を以て十大弟子と尊稱す。大弟子と稱する所以は、兩部灌頂の極秘を傳へ、一多法界の玉璽を承けたるを以てなり、然るに眞濟等の八弟子の相承は、其嗣を絶して傳はらずと雖も、實慧の相承は、眞昭、宗叡と次第相承して、南池院源仁に傳はれり。眞雅の傳は、眞雅より直に源仁に傳はれり。故に實慧、眞雅、兩師の相承は、源仁の一身に歸せり。故に東密一多並稟の祖と尊稱す。

### 第九章 野澤十二流



後に、事相の下に、於て詳述すべければ、今略す。

## 第十章 古義新義の分流

此れも、後に野山根來分派の原因を述ぶる所に譲るべきも、今略言すれば、今を距ること、大凡六百年前、南山大傳法院學頭中性院頼瑜師、大日經教主加持身の新説を主張せしより、金剛峯寺方の説と會はず、終に南山の大小傳法院等を根來に移轉して、根本道場と爲し、高く加持身教主の法幢を樹てたり。茲に於て、金剛峯寺の學を古義と稱し、根來の學を新義と稱して、教相學に於て分派をなせり。爾來、氷炭相容れず、甲論乙駁して、星霜を重ねたり。然るに、天明年間、吾豊山智幢房法住僧正淵源を事相の祕密に探りて、新古の異義を調和會合して、祕密因縁管絃相成義二卷を著せり。是に於て新古の會合成立し、積年の議論は昨夢の如くなりぬ。

## 第二編 密教の教相

### 第一章 顯教と密教 附顯密二教の起因

顯は顯露の義にして、顯はれたるものは奥深からざるが故に、又淺近の意あり、又顯略の義にして、深玄幽邃の眞理は之を省略して説かず、只淺く顯はしたる法を説くを謂ふなり。何を以て然るかと云ふに、其所被の機の宜さに随つて説く所の、隨他意の法門なるを以てなり。而して此法門に於ては、常に機に投じて説くが故に、無明緣起なり。伽耶成道の釋尊が、一代所説の華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の五時の教化は即ち是なり。

密は祕奥妙密の義にして、即ち奥深く隠れたるの意なり。佛教の眞髓は、奥妙にして幽遠なるを以て、祕密と名く。然る所以は法身如來内所證の法門にして、實行の機は、等覺の菩薩と雖も、測知すること能はず、唯佛與佛乃能知之にして、隨自意の法なるを以てなり。是れ則ち摩訶毗盧遮那如來所説の大日經、金剛頂經等の事理

俱密教なり。隨他意の教にあらざる故に、法界緣起の法門にして、無明緣起にあらざるなり。之に就いて、弘法大師は二教論に於て、衆生秘密と如來秘密との二種を釋せり。

衆生秘密とは、一切衆生の身心の實相は、則ち摩訶毗盧遮那と平等にして差異あることなく、世間、出世間の一切功德を成就具足して、萬有の主宰者なりと雖も、無明妄想の爲に、功德は蔽はれ、智眼は盲られて、本自の光明を發現すること能はず、衆生自ら其功德を覆蔽するが故に、衆生秘密とは云ふなり。他より之を障蔽するにあらず、衆生自ら秘密にするものなり。然るに如來秘密に於ては、衆生の身心即ち毗盧遮那如來と同等なりと説く。法教は本甚深にして、不可思議なるを以て、短淺の機の能く信じ得るものにあらず。否却つて誹謗して罪惡を犯すの怖れあるが故に、機を選んで之を授く。苟も其機にあらざれば、佛之を秘密にして授け給はざる故に、如來秘密とは云ふなり。干將莫耶の名劍なりとも、又は愛兒の爲には、敢て惜むにあらずと雖も、運用の方便を知らざれば、却つて自身を傷くる怖れある故に、之を與へざるが如し。又天台安然阿闍梨の教時間答第四には、大日經義釋の説を綜合

して、諸佛所秘、衆生所秘、言語隱密、法體秘密の四種を辨ぜり。初めの二は弘法大師の所説に同じ、言語隱密とは、密教は諸佛の密語にして、文外に深義あり。若し單に文のまゝに義を解して止まば、佛意を失ふを云ふなり。法體秘密とは、此教の法體は、唯佛與佛の境界にして、佛の加持を離るれば、十地の菩薩と雖も、之を知ること能はずと説くもの是れなり。

按ずるに、隱密語とは、經に、男女交會成五塵、大佛事と説くが如き是れなり、男女とは慧と定との秘密語なり。薄伽梵を女人と云ふが如きも、亦此例なり。法體秘密とは、密教は一切諸法の元則たる、本有性徳の六大を以て實體とする故に、秘密なり。秘密と云ふと雖も、其實は公然にして、眞理は宇宙に彌滿せり。天台所立の秘密教とは同じからず。何となれば、彼は同聽異聞にして、又互相不知なるを以て秘密と云ふも、此教は同聽同聞にして、又互相知なりと雖も、只所説の法門に就いて秘密と稱するのみなればなり。

密教の教主イデマエは本地法身なり。顯教の教主イデマエは變化身に於て垂迹なり。故に義門の上に於ては、大日と釋迦と全く別佛の如くに見て研究す

と雖も、其實際を論ずれば、同體にして一佛なり。論じて茲に至れば、顯密共に一佛の所説なり。中に於て、顯教は伽耶成道の釋迦を本とし、其上に毗盧遮那を立つるが故に、釋迦身に具する所の眞如實相の理を、法身毘盧遮那と云ふ。密教にては、一切法の根元たる毘盧遮那を以て本とし、之れが衆生の機に隨つて應現變化したる身を釋迦と立つ。故に毘盧遮那は本地法身にして、釋迦は外迹の身なり。此れを顯密二教の異點となす。

今且く見易きに就いて、釋迦一化の上に於いて、顯密二教の起因を論ぜんに、釋迦佛成道の後、第一の七日を以て、顯教に於ては思惟行と云へり。其の意自内證の法を説かんか、縱令之を説くと雖も、衆生は無明妄想の爲に、智眼を害せられて、理解すること能はざるにてはなきか。果して然らば法輪を轉ぜずして、即日淫弊すべきか、然れども若し之を説いて授けざれば、遂に衆生界を救度すること能はず、衆生界を救度せざれば、因位の本願に違ひ、佛の大悲に戻るべし、故に斷じて、之を説かざる可からず。若し之を説かんとせば如何なる方便を以て説くべきか、如何なる方法で説くべきか、如何なる時と處とに於て説くべきか、等種々熟考の時間を要

するを以て、未だ説法し給はずと立つ。

然るに密教に於ては、彼の顯教の機類が、思惟行と認むる成道後、最初の一週間、本地毗盧遮那理法身を以て、金剛法界宮に、金剛薩埵等、久已通達の聖衆を會し、之を眷屬とし、證明として、大悲胎藏曼荼羅を流現し、自受法樂の故に、自内證の法門を説き給ふ、是れ即大日經王なり。金剛薩埵此祕密の法を相承し、其の所説の法を結集して十萬頌となせり。即善無畏三藏、唐の開元十三年に翻譯する所の、大毗盧遮那成佛神變加持經は、此れが略本を翻譯せしものなり。又其住處を法界宮と云ふと雖も、如來有應之處無非此宮の故に、法身如來の住する處、何れも法身の淨土ならざるなし。故に菩提樹下を動せずして、即ち法界宮なり。又此大日經は、凡夫の位にありて、最初發心の時に密教を聽いて、直に發心して眞言門に入り、深く之れを信じて修行する機の爲に説く所なり。此機根を直往の機と云ふ。然るに顯教の機は、未だ密教を聽くに堪へざるが故に、自ら視聽を隔て、無説法思惟行と認むるものなり。是れ盲者は日月の光を見ず、聾者は雷霆の響を聞かざるに似たり。然るに法身大日如來は、本有の大悲の爲に催ふせられて、劣機の密教を聽くこと能はざるを

憐み給ひ、丈六の釋迦身と變化し、印度に於て、八相成道を化現し、華嚴阿含等の隨他意方便の教を説き、五時を経て、其機根を訓練し、機已に熟して密教を聽くに堪ふるを待ち、顯教の機類が、五十年間の説法、究竟して、機縁已に盡き、旂檀一片の烟と化し給へりと認むる間に於て、色究竟天宮等の淨土に、既熟の機の爲に、本地毗盧遮那の身を以て其身とし、四佛、四波羅密、十六大菩薩、八供養菩薩、四攝智菩薩等を以て眷屬として、金剛界五解脱輪の曼荼羅を流現して説き給ふ所の密教は、即ち金剛頂經なり。金剛手亦此法を相承し、此經を結集して十萬頌となせり、金剛智三藏の譯する所の金剛頂略出經は、此本の略出にして、不空三藏譯の三卷の教王經は、此れが略本を翻譯せしものなり。故に金剛頂經は、顯教に於て機根を訓練して密教に入るを示すもの、即ち從顯入密の機の爲に説く所のものなり。此機は顯教を経て迂回して密教に入る機なるが故に、前の直往の機に相對して迂回の機と云ふ。既に上に演ぶるが如く、兩部大經の教體は、共に一切法の元則たる法性の六大を以て教體とする故に、同一なりと雖も、其說相に於ては、自ら差別なきを得ざるなり。又法身毗盧遮那如來は、周遍法界無所不至の故に、三世を超脱して變易あることなきを以て

の故に、其説法も恒恒常説なり。六塵教體の故に、一衆生として、此説法を見聞觸知せざる者なし。故に特に説時の論ずべきものなしと雖も、然れども、今其説時を論ずるは、帶迷の機に對するを以てなり。

以上は東密の所傳なり。若し夫れ台密の傳に依らんか、智證大師の大日經指歸に曰く、大日如來は、衆生の機に投じ、釋迦身を變現して印度に降生し、八相成道の化儀を示して、華嚴等五時の説法を爲せしなり、かくて機根を訓練すること畢るや、變化身の化儀を納めて、毗盧遮那法身に歸し、法界宮に於て、大日經等の密教を説いて、一切衆生を平等に利益し、釋迦一代所説の顯教を開會して、祕密淨菩提心の上の因根究竟の三句に歸せしむと。

又顯密對辨惣相龜論の前には、密教は法身大日如來の説と云ふと雖ども、細論する時は、釋迦佛顯教を説き給ふ時に難へ説きたる密教あり、此を顯密雜部の密教と云ふ。即變化身の釋迦佛、五時の説法の中に於て、密教を説くべき時機來れば、内證をもらして之れを説き給ひたるものなり。即守護國界主陀羅尼經、心地觀經、陀羅尼集經等の諸部是なり。總て釋尊一代諸經の中に散説せる密教なり。大日如來

所説の兩部密教に對すれば不完全なるものなり。守護國界經の意に依るに、釋迦所説の密教は、釋迦佛が法界宮の大日如來の説會に列し、密教を傳承して閻浮提に來つて説くと、故に、釋迦傳説の密教と云ふ、但し此は教道門の説なり。

大日如來所説の密教に於ては、單に胎藏部なるものと、單に金剛頂部なるものと、兩部複雑なるものとの三あり。所謂眞言の五部の祕經中、大日經と金剛頂經とは各單説なり。蘇悉地經と瑜祇經とは兩部複説なり。又法華觀智の軌の如きは、複説なり。兩部複説なる密教を兩部雜部と云ふ。文に臨んで之れを知るべし。

大日經文底の深旨は、一切衆生の本有の淨菩提心に具する所の無盡莊嚴藏、即本有本覺の曼荼羅を説くを以て旨とす。故に本性清淨の蓮花即ち平等の眞理を以て體となす。胎藏曼荼羅の中臺八葉は、専ら此眞理を顯す。即ち、若據本有俱時圓滿なり。然るに大日經一部の大綱を説示したる住心品の文相を見るに、初に淨菩提心の正助二觀を説き、次に八心三劫十地六無畏等と、豎次第に就いて、修生始覺の法門を説くは、本有平等の眞理を明すに、金剛頂宗の始覺修生の法門に寄齊して、之を明すを以てなり。何が故に寄齊して之を説くと云ふに、本有の法は、不二平等なる

を以て、修生差別の法に寄齊せざれば、平等上の差別を顯示すること難きを以てなり。故に、大日經の文相は、修生なれども、所詮文底の深義は本有にあるなり。

金剛頂經文底の深旨は、三密の加持に依つて、修生顯得する離垢清淨なる菩提心智の曼荼羅を明すを以て旨とす。故に離垢清淨の月輪即ち修生始覺の佛智を以て體となす。五相成身の觀及び五解脱輪の曼荼羅は、此深義を顯す。然るに經の説相の本有なるは、金剛界修生の法門を以て、胎藏界本有門の法相に寄齊して顯すを以てなり。蓋し金剛界修生始覺の法は、胎藏本有の法に離れて、外にあるにあらざることを顯示せんが爲なり。故に金剛頂經の文相は、本有なれども、其所詮は修生豎差別の法にあるなり。歸する所は修生の法即ち本有、本有の法即ち修生にして、本修不二の深義を開示せんが爲に外ならず。

## 第二章 教相と事相

大日經一部七卷三十六品の中に於て、眞言宗の教相を説示したるものは、入眞言門住心品なり。教相と云ふは、具緣品に「謂阿字門等是眞言教相」と説き、即ち能彼の

教の相狀なり、其相は徹頭徹尾阿字諸法本不生なり。此の本不生の上に於て、八心三劫十地、六無畏十喻を説く。其の八心三劫十地は、眞言行者の從淺至深次第修入、心品轉昇の階級の相なり。六無畏は、地前に於て、三劫を經過する間に、難處を越えて一休息する所を示す。十喻は、觀行中の離著の方便觀、即ち阿字淨菩提心觀の助觀を明す、是即ち眞言門の教相なり。又事相とは具緣品に、又此行者於此衆緣事相、皆以諦信行之と説き、教相に明す所の阿字本不生の眞理を修證するに就いて、實修實行すべき事作法を云ふ。即具緣品以下及金剛頂略出經等の明す所なり。事相は教相に説明したる所の教理を、因緣事相に託して實現せしめんと欲して行ふ所の作法なり。教相は事相に於て實修する所、即ち或は一指を擧て、兩手を縛する等に就いて、一に祕密の教理を説明せしものなり。故に教相の學と事相の實修とは、離る可からざるものなり。若し教相の學にして事相の實修を離れんか、空論にして所得なかるべし。如何に深く研究し造詣する所あるも、之を實行せずんば、隣の寶を算ふるが如くならん。又事相の行にして、教相の學を離れたらんか、無意味の動作なる故に、手を擧げ指を屈する、多くは兒戯に類せんのみ。興教大師曰く、事

相の行人は、教相顯露の難を加へ、教相の學者は、事相無智の難を致す。一偏は是れ邪執なり。二相必ず兼ぬべしと。

### 第三章 教相の二大學派

本有學派、修生學派を教相の二大學派となす。先づ本有學派の説の大意に曰く、『宇宙間に葦布する萬有諸法は素より、吾人の一舉一動は、其の善惡無記の何たるに論なく、悉く本不生際に住して本有常住なり、皆自心本具の功德なり。男女の戀愛も本有の具徳なり。貪欲嗔恚も本有の具徳なり。十善十惡、亦悉く本有具徳なるを以て、一も捨斷すべきものなし。執れをか取り執れをか捨てん。一切の諸法は、さながらに法界曼荼羅なり、一切衆生の一舉一動は、皆法身如來の三密なり。何をか修し何をか求めん。然りと雖も、吾人凡夫の境遇にありては、無始以來、妄念妄執の爲に染汚覆蔽せられて、本覺の光明を昧却し了し、曼荼羅の徳相を開顯すること能はざるを以て、自心本具の曼荼羅の莊嚴も、遂には生死屋裡の閑家具と爲り果つるなり。さればこそ吾人衆生は、業煩惱の羅刹の爲に追はれては、生死の大海に漂

流し、三途の窮路に踰越しては、無有出離之縁に闡提必死の人と成る。故に、吾人衆生が、發心修行して、本有の徳相本覺の曼荼羅を修顯し開發せざる間は、吾人凡夫の罪惡の三業を以て、直に功德なり捨斷すべからずと云ふことを得ざるのみならず、寧ろ惡不善の法は捨斷せざるべからず。若し夫れ機縁一度熟して、毗盧遮那の加持力に由つて、無明の妄執を除遣し、自心本具の曼荼羅を開顯し、法身の三密に於て自在を得るに至れば、男女の情愛は金剛薩埵五祕密の曼荼羅と現れ、嗔恚は大聖不動の曼荼羅と顯れ、貪慾は愛染明王曼荼羅と現れて、法界に周遍し、廣く衆生を利益す。」と、是則ち密教本覺門の宗義を、露骨に披瀝して餘す所なきものにして、野山の道範、東寺の三寶、勸修寺の道實等は、皆此の學派の人なり。

按ずるに、此學派は、宗の實義に就いて、本有を表面として解釋するが故に、頗る高尚なりと雖も、其裏面には、嚴然と修生を具有して、轉迷開悟の觀行を實踐せしむるを以て眞意となす。然れども本有を學ぶ者、若し誤つて一步を蹉過すれば、忽ち邪路に墮落するが故に、微細に研究して誤解を生ぜざる様注意せざるべからず。彼の醍醐の文觀の如き、持戒堅固の律僧にして、後醍醐帝の御歸依淺から

ず、東寺の長者に補せらるゝに至りしかども、本有の宗義を誤解して、邪義を構成し、邪流に沒落せり。現時又其覆轍を踏むものなきに非ず、嗚呼。

次に修生學派の所説に曰く、「萬有諸法及び吾人の一舉手一投足に至る迄、悉く皆本有の具徳にして、曼荼羅の莊嚴たるは、敢て間然する所なしと雖も、本有の本有は唯理具にして、毫も功德發現せず、隨つて益する所なき故に、生死流轉の凡夫なり。是の故に、深く法身如來の三密の加持力を信じて、轉迷開悟の觀行を實踐し、本有の功德を修養し、速疾に顯現せしむるに盡すべし。故に住心品には三劫十地の修行證入の階位を説き、金剛頂經には十六大菩薩の位を説きたり。又具緣品以下及略出經等には、詳かに實修の作法を明かにす。要するに本有に誇つて修生を忽にす可からず。」と謂ふなり。

按ずるに、此學派は、實行の機に就いては、修生を表面として宗義の教相を解釋し、行者の實修に重きを置くものなりと雖も、本有は依然として其の裏面に必附せり。敢て本有を忘れたるには、あらざるなり。根來の賴瑜聖憲及び南山の宥快上人等、古義新義の學者は、皆此學派なり。此學派は、邪路に墮落するの怖れは

勢しと雖も、一步を誤れば、遂に顯教に落在するを以て、學者の宜しく精細なる研究を遂ぐると共に、此點に關して、周到なる注意を拂ふべきなり。但し此二學派は、其の本とし表とする所に別あるのみにして、内蘊は素より一致したるものなり。故に若し本有の表徳に誇つて修生を怠らんか、成佛の期遂になかるべし。又若し修生無所得に泥んで、本有を忘れむか、萬行も、畢竟徒勞に屬すべきなり。

### 第四章 兩部大經の大意

#### 一、大日經大意

大日經の大意を説くに先んじて、同經に三本の別あることを辨ずべし。

一、法爾常恒本。大日如來の正説にして、結集の本にあらず。毗盧遮那如來は、法身の故に法界に周遍して、無所不至、三世を超脱して、無有變易なるを以て、其説法も恒恒常説にして説かざる時處なく、随つて衆生の之を聞かざる日なし。六塵教體の故に、見聞覺知の境界皆法身の説法を聞くと云ふべし。夕の嵐も、朝の雪も、法身の説法ならざるはなし。吾等常に之を聞けども、知らずして理解し得ざるは、迷

を帶する故なり。前に釋迦の説法に對して、説明の前後を論ずるは、帶迷の機に對するを以てなり。故に法身の説法は常恒なりと云ふ。

二、分流廣本。金剛薩埵の親しく毗盧遮那佛の説法を聞けるを結集して、十萬頌と爲し、南天鐵塔中に安置せしものなり。印度の法三十二字を以て一頌とすと傳ふ。

三、分流略本。龍猛菩薩南天の鐵塔に入つて、金剛薩埵に隨つて、十萬頌の廣本を傳へて人間に流布すと雖も、或は劣機の堪へざらんことを鑑知して、其要を採つて、三千五百頌となせしもの、即ち無畏譯の七卷の經是なり。

但し世上流布の諸儀軌中に、胎藏法に屬するものは、廣本中より抜粹翻譯せしものなり。廣本は支那に未渡なり。

次に略して大日經の大意を演ぶれば、毗盧遮那佛自性法身を以て、法界宮の一處に於て、一會に之れを説き給ふとなす。其の説く所廣博なりと雖も、之れを概括すれば、眞字本不生の眞理なる、一切衆生本有の曼荼羅を開示するものなり。そもく有情非情の一切諸法は、本有の性徳にして、今新に生ずる者にもあらず。



亦滅する者にもあらず。豎に三世に結通し、横に十方を該羅して、面目堂々たり。彼れ此れを礙へず、此れ彼れを礙へず。千燈の相互に映して、涉入無礙なる如く、融會自在にして變易あることなきを、本不生の眞理と云ふ。此の眞理は即ち本有本覺の胎藏界の毗盧遮那如來にして、十界輪圓の曼荼羅なり。而して此の眞理を代表し詮顯するものを孔字となす。孔は一切音の最初にして、一切音に周遍するを以てなり。或は問ふて云はん、一切法本來常住にして不生不滅ならば、人は常に人にして畜は常に畜たるべし。外道の常見に同じく、佛教の流轉説に違するにあらずや。答へて云く、本不生の眞理を飽食する故に僻見を生ずるなり。夫れ一切法、本來不生不滅、融會無礙なるが故に、一切法悉く皆互に具通し、此の一法に彼の一切法を具して毫も缺くることなく、彼の一法に此の一切法を具して微塵も缺くるとなし。かく擧一全收して輪圓具足するを曼荼羅と稱す。一切法個々輪圓具足の曼荼羅なるを以て、例へば今生に人と生るゝは、曼荼羅の中に於て、或る事情の縁に感じて人の法顯れたる者なり。又來生に馬牛と生るゝは、曼荼羅の中に於て、或る事情の縁に感じて、馬牛の法顯はるゝ者なり。輪圓具足の法に於て、各々の事情の

縁に感じて作用に隱顯ありと雖も、其法體は不生不滅なり。若し法體本有にあらざれば、六道輪廻轉生の義成ぜざるべし。煩惱も菩提も生死も涅槃も、本來各別に於て、本有の性徳なる故に、煩惱は菩提を障へず、菩提は煩惱を斷ぜず、融會無礙なり。生死涅槃も亦然り、故に流轉する時は、菩提は煩惱に隨つて流轉すれども、敢て菩提の本性を改めず、還滅する時は、煩惱は菩提に隨つて正覺を成ずれども、敢て其面目を改めず、貪は大貪の本性を顯はして、周遍法界の徳相たる愛染明王と成りて、廣く衆生を愛して差別なし。嗔は周遍法界の本有の性徳を顯して、大聖不動明王と示現して、一切の惡不善を降伏し、一子の慈悲を垂れて、一切衆生を利益す。曼荼羅會中の明王金剛天等にして、忿怒卑劣の形を現はせる尊は、皆煩惱の菩提を成じたる姿なり。佛菩薩は實に此本有の菩提がそれ自らの徳相を現はしたるものに外ならず、毒は毒の性を改めずして徳相なり。藥は藥の性さながらに徳相なり。故に一切法は本有にして、一も捨つべき者なし。即ち面前の當相を改めずして、法界曼荼羅なり。斯の如き眞理を菩提と名く。

然るに吾人衆生は、無明妄想の爲に覆はれて、此眞理を知らず、又之を解すと雖も、

證すること能はざるが故に、現前の境遇の爲に纏綿せられて、融會無礙の徳を顯すこと能はざるなり。周遍法界無礙の徳を覆ひ隠す私欲の無明を斷破して、眞理を證せんと修行すれども、未だ眞理に接せざる間も、亦一切法本有性徳の故に、之を凡夫の菩薩と云ふ。少しく進んで一分の眞理に接したる位を聖位の菩薩と云ひ、眞理を全證して、これと不二なる位を、佛陀と稱す。故に佛陀は即ち眞理なり。眞理は即ち佛陀なり。しかも斯の如き、功德圓滿の佛陀は、他に求むべきにあらず。自心即ち佛陀なり。故に大日經に、云何菩提謂如實知自心と云へり。

二、金剛頂經大意

次に金剛頂大教王經の大意を演ぶれば、先づ金剛頂經に三本の不同あることは、大日經の如し。不空三藏譯の三卷の教王經は、三千五百頌の略本を翻譯せしものなり。又略出經及蓮華部心軌等は、廣本より抄出して翻せしものなり。毗盧遮那佛、自受用智身を以て、普く天上人間に、十八會、十四處を以て、此經を説き給ふ。其大意は、一字一切法自性言說不可得の實相の理を修證する、上轉始覺の智差別の曼荼羅を開示するを宗とす。胎藏曼荼羅の一切法本有不生の徳を開示するに對して、

此眞理を修證顯得する智の差別を示すは、金剛界の曼荼羅なり。理は平等なるが故に、若據本有俱時圓滿なれども、智は差別のものなるが故に、若約次第有出現の故に、十六大菩薩の漸次の階位を修證するを、晦日の後夜より、第十五日の夜に至る月の明昧を以て、之れに喩ふるなり。而して能證の智には五智あり、中央、法界體性智、東方、大圓鏡智、南方、平等性智、西方、妙觀察智、北方、成所作智と云ふ、これ自然の道理なり。かくて各の一智に自ら四方ある故に、五智と成り、五智に五智を具し、復五智に五智を具して、遂に無量の智と成る。何故に無量の智を立つと云は、所證の眞理、既に已に一切法にして無量なるが故に、能證の智も亦無量ならざるべからざるなり。斯の如く、智々無邊なれども、煩惱の結縛を解脱して、圓明無礙なるを示したるは、即ち金剛界の曼荼羅なり。如是の理、如是の智、契證冥會して、理即智、智即理なる境界は、冷煖自知にして、言語を以て説いて他に示すべきにあらざること、手中菓物の他に轉授し得るが如きものにあらざる故に、一切法自性言說不可得と云ふ。自性は即ち眞理なり。悉曇の<sup>マ</sup>字の<sup>マ</sup>の字體は、言說を相とす、頭上の圓點は、大空の摩多なる故に、言說を空とす。即ち言說不可得なり。是れ則ち修生顯得の金剛

界の毗盧遮那如來なり。其字は眞理に契證する極位に於て、言説不可得なる義を詮表する故に、此位の代表者として、其字一切法自性言説不可得を宗とすと云ふ。其の二字は、次の如く胎藏金剛の曼荼羅の大宗なり。以上を金剛頂經の大意とす。

### 第五章 兩部大經の教主身土と野山根來分派の源因

保延六年極月初八日、金剛峯寺の衆徒中の惡僧輩、興教大師の徳高く學深うして、鳥羽上皇の御歸依殊に篤く、傳法院の勢望日に月に盛なるに反し、金剛峯寺衆徒は、大師の御隱遁處の僧なるを以て、僧位僧官を得ず、唯大傳法院の衆徒のみ、位官を有して色衣を著用する等、見るに付け、聞くに付け、嫉妬の念に堪へずして、大小傳法院及密嚴院等の諸堂伽藍を燒き討ちし、興教大師を山上より追ひ下せり。大師は徐に免れて根來寺に移住して、難を避け給ふ。傳法院の衆徒は、一旦南山を離散して、或は京洛に落ち、或は根來に移れり。永治元年三月、鳥羽上皇、勅して南山歸住の宜命ありと雖も、上人は堅く辭して、再び上山し給はざりしが、衆徒は南山に歸住して、

春秋二期の修學會と練行會とを、上人在住當時の如く修行せり。其後金剛峯寺の衆徒と、大傳法院の衆徒との間に於て、數回の騷動ありしが、何れも卑しむべき俗情の衝突より起りしものにして、法義の異論よりするものにてはあらざりき。是れ傳法院方の學説が、金剛峯寺方の學説と大差なかりし所以なり。然るに文永三年、根來中性院の開祖賴瑜法印、大傳法院第八世の學頭職に補せられ、新案の大日經教主身土加持門の義を主唱せられしに由つて、始めて法義上の異論起り、金剛峯寺所傳の教主身土本地説の義に違ふを以て、異論者として種々の危害を加へられたるを以て、南山の傳法院は、到底新案の加持身教主の法幢を樹つべき好處に非ずとなし、時の傳法院座主たる東寺長者仁和寺勝實院道耀大僧正に計り、仁和法王の威力を假りて、正應元年南山の大小傳法院及密嚴院等の諸堂宇を、根來の一乘山圓明寺に移し、大日經教主加持身説の根本道場となせり。故に覺鑊上人、先きに根來寺の頽廢を再興して、一乘山圓明寺を建立し給ひしが故に、一乘山の開山と稱し奉り、賴瑜僧正を以て、加持門説勅興の祖と爲すことは、智豐兩山相傳の眞説なり。又金剛峯寺方より、賴瑜の加持身教主の説を、新義と呼びし故に、金剛峯寺方の本地身教主

の説を古義と呼ぶに至れり。但し古義眞言宗新義眞言宗と公稱するに至りしは、徳川幕府以後のことなり。之れ新古分派の原因の大略なり。

今試に古義と新義との大日經教主に就いて、異論の大意を演れば、先づ古義即ち高野山金剛峯寺の學説は、應永年間、同山實性院門主宥快上人が、高野明神の加護に由つて大成したる本地身説にして、その大意は無畏三藏大日經疏に大日經の教主成就の薄伽梵の句を釋して、即ち毘盧遮那本地法身と判し、大師は二教論に於て、三身四身を分別して、密教の教主を自性身と判し、自受法樂各説三密と釋し給へり。  
(以上教證)又毘盧遮那成佛の自證の極位、化他門に向かはざる位に於て、兼相用の三大、歴然として存在せざれば、顯教の遮情無相の一片の空理に落在して、遂に表徳の實義を亡了すべし。故に自證の極位に於て、六(大躰大)四(曼相大)三(密用大)完具せざる可からず。果して然らば、用大中の語密即如義眞實語の説法にあらずして何ぞや。又既に色身ありと許す、何に依てか説法なからん。若極位に説法なくんば、三密不齊の難あり。但し本地極位の説法は、自受法樂の故に、機の爲に説くにあらずと雖も、之れを聞いて、發心修行することを得るを以て、密教の機とする故に、此の本

地自證の位に因人有りて之れを聞くことを得と立つ。委しくは宥快の宗義決擇第九大日經教主の一段を披見して知るべし。又經に機の爲に説く趣きある所は、皆加持世界に就いて云ふと會せり。

次に新義即ち根來相承にして、大傳法院第十五世の學頭中性院聖憲師の大成せられたる、加持身教主の大意は、密教の法門に於て、大分遮情表徳の二重あり。其表徳に於て、不思議法師の大日經第七供養法疏の孔字三重の祕釋深祕釋と祕中祕と祕々中極祕に准じて三重に分てり。謂はく、有相之有相即ち具緣品所説の擇地造壇眞言手印等の法門にして、有相劣慧の機に對する能被の教なり。謂はく、無相之有相、即ち舉手動足皆成密印等の無相三密の法門にして、無相勝慧の機に對する能被の教なり。謂はく、無相之無相、即ち本地自證の極位なり。此位は冷煖自知にして、他の機縁を絶離して、機の領解の相なき故に無相と云ふ。(古義の、自證會に因人有りと立つとは、天殊地別なり)又此位に相用なきには非ざれども、體に入りて法界寂然たり。故に疏に此位を、說者無言觀者無見と釋せり。乃ち本地極位には説法あることなきなり。又遮情も、顯實の遮情にして、表徳を離れざるが故に、大に顯

教の遺迷一片の遮情に異れり。然れども淺略なるを以て、有相之無相と云ふ。之れを以て、新義所立の四重の秘釋と稱す。夫れ然り、大凡說法は、其の本意他の衆生を利益せんが爲なり。然るに自證本地の位は、唯獨自明了にして、機根及ばず。說法何の用ぞや。且つ本地極位に在りて、本有の大悲と因位の悲願力とに催され、本地自證の身を改めずして、加持門の外朝に出居し、遠く未來機に對して、之れを益せんが爲に大日經を宣說し給ふ。敢て本地法身を改むるにあらざるが故に、疏に本地法身と釋せり。然れども遠く未來機に對するを以て、自ら加持身と成る能住の身、加持身と成る。故に所住の土、敢て本地の位を轉ずるにはあらざれども、自ら加持門となる也。此加持の身土は、本地の身土に即する故に、即質加持と云ふ。金剛頂瑜祇經には、我本無有言、但爲利益說とあり、又具緣品には、於當來世時劣慧諸衆生乃至爲度彼等故隨此說是法と。又大師は、五居足斷十慮手亡と釋し給ふ。又般若寺觀賢僧正は、大師五世の法孫にして、延喜帝の詔を奉し、南山の祖廟を開扉して、親く大師を拜し、髮を剃り、衣を替へ奉りて、大師の口訣を受けたる祖師なり。然るに大日經疏鈔に教主を釋するや、加持身者曼荼羅中臺佛也と、又云く、從此自性身後

起、加持身云云意、加持身者、是曼荼羅中臺大日尊等也と釋せり。此れ正しき依憑なり。委しきことは、聖憲師自證說法十八段の草子、及無相至極の草子等を閱すべし。按ずるに、新義の所立は、本地自性會には、現座に、實類の機根及ばずと。加持門は、本地に即して之を改めざる故に、現座に、機根あるにあらざれば、遠く未來機に對すと云ふ。未來と云ふと雖も、三世相推の未來にあらざり、自性會の現座に及ばざることを、未來の言を假りて示すのみ也。

又新古兩義共に、加持世界とは迷を帯びたる因位の機根の、親く見聞し得る位を云ふ。故に新古共に上轉二重なれども、下轉化他の時に於て、古義は自證と加持世界との二重、新義は自證と加持門と加持世界との三重なり。此の兩派の説を、會合家の見解を以て之を評すれば、古義の説は、其實際に就いて論じ、新義の説は、義門に依つて立す。即ち次の如く、多法界一法界の別なり。一多法界は一法の上の兩義なる故に、各據一義並不相違なり。委しくは、豊山法住師の祕密因緣管絃相成義を見るべし。

教相談義の上に於ては、古義新義氷炭相容れざるが如くに論ずれども、即身成

佛の大事に於ては、更に遠論なし。只是れ學解上の異見なるを知るべき也。彼の淨土宗、鎮西西山、真宗、各々其安心を異にして、往生の得不を論ずるが如きものにあらざるなり。

新義派所立の四重、左の如し。

有相之無相	遮情淺略
有相之有相	有相劣慧の機に對する法門
無相之有相	無相勝慧の機に對する法門
無相之無相	自證極位

表徳三重深祕

### 第六章 横豎の判教

#### 一、横の判教

横の判教は、金剛頂五祕密經、金剛頂瑜祇經、金剛頂分別聖位修證法門、大日經、金剛頂教王經十卷、楞伽經及び菩提心論、釋摩訶衍論、智度論の三論を以て正しき依憑とし、横に顯密二教の淺深優劣を論じて、嚴然と顯密對辨を試み、辨顯密二教論上下二

卷を著はして、天台華嚴の兩一乘と雖も、判じて顯教の分齊と爲し、彼の顯教諸宗の言語道斷、絶對の極位と爲す處を以て、眞言密教なりとの斷案を下せり。然るに傳教大師の如く、南都諸宗の猛烈なる反感を買ひ、難論を受けざりしは、弘法大師の徳高く、學深かりしとや云はん。開宗の手段、其宜きを得たりとや云はん。實に大師の幸福と云はざるべからず。後に法相宗の人、藥波の徳一、深く眞言宗を疑難したれども、幾もなく入密して、大に眞言宗を稱讚せり。嗚呼何ぞ夫れ密教の高尙にして又深遠なるや。又大師開宗の當時、盛に世に弘通せし宗旨は、法相、三論、華嚴、天台の四宗なるを以て、之れを擧げて所對としたれども、大師入寂後に弘通せし禪淨土等の宗門と雖も、一括して顯教に判屬せざる可からず。何となれば、伽耶成道の釋迦所說の經に依て、開宗する所なれば也。而して横と云ふことは、所對の顯教中に於て、巨細に論ずれば、勝劣淺深なきにあらざれども、横に一括して顯教と爲して、之れを論ぜざる故に、横の判教と云ふ。印度に於て、法華、華嚴等の經はありと雖も、支那の如く天台、華嚴の兩一乘教あることなき故に、無畏、金剛智等の三藏は、密教の本經儀軌に説く所の顯教を以て、三乘教と爲し、支那に於ては既に已に華嚴天台の兩

一乘は開宗せられたれども、之を以て顯教の分齊なりと斷案を下せし密教の祖師なく、又學者なし、然るに我大師は、釋摩訶衍論所説の五種の本覺、及得不攝不の問答に根據し、且つ兩一乘は即身成佛を談ずれども、三生可遂なるを以て顯教なりと判せり。是れ大師特得の手腕にして、前代の祖師の敢て爲し得ざりし所なり。

二、堅の判教

次に堅の判教とは、大日經住心品、菩提心論、釋摩訶衍論に依憑して、堅に十箇の住心を建立して優劣淺深を判せり。其十住心とは、

第一、異生羝羊心

六趣四生、異にして生を受くる故に異生と云ふ。猶群生と云が如し。「一向行惡行、不修微少善」の惡凡夫にして、更に吾非を知らず。故に改むるに由なし。只管に經事と食事とを念として、東奔西走、羝羊の如くなる故に、喩に従つて羝羊と云ふ。故行誠上人の歌に、

父母の名をたも知らぬみの虫の身の行末は如何とすらん

此心、其非を知つて改むる心起れば第二心なり、即第二愚童持齋心の起因と成る。

故に十住心の第一位に置くなり。

第二、愚童持齋心

「秃樹非定秃、遇春則榮花」ありとかや。げに羝羊常に羝羊にあらず。本覺の佛性内薫し、他の増上縁、外より催して、節食と持齋との徳を知つて之れを行じ、其餘裕を以つて父母に孝養し、親族に施し、乃至廣く非親識及高德の人に施す等、所有人道を以て本とする教は、悉皆此心に攝す。敢て洋の東西と、人種の如何とを問はざる也。又孔子所説の忠孝仁義、佛敎所説の五戒十善等、亦皆此心の所攝なり。然れども眞の解脱を知らざる故に、愚童と云ふ。即密教に説く三種薩埵中の愚童薩埵なり。

第三、嬰童無畏心

總じて生天を教ふる所の宗教は、擧げて此心に攝す。従つて人間の煩擾を厭ひ天界の福音を聞いて、天に生ぜむと願ふは、皆此心の分齊なり。印度の外道の教、又キリスト教等、此心に攝してあますことなし。梵天那羅延等の、上界の天を以て、母の如く信賴する故に嬰童と云ふ。天に生じて暫く人界煩擾の畏を免るゝ故に、無畏と云ふ。曼荼羅の外金剛部は此三心の能化なり。以上を世間三箇住心と云ふ。

未だ生死の苦を解脱せざるを以てなり。

第四、唯蘊無我心

小乗教中の聲聞乘なり。即苦集滅道の四諦の理を觀じて、見惑修惑の煩惱を斷じて、小涅槃を期する心なり。又三世實有、法體恒有、作用無常なりと雖も、此一切法の和合したる上に現はれたる人類動物に於ては、外道の執するが如き實我たる主宰者なしと立つ。蘊とは法なり。一切諸法は、自心に離れ外に有つて眞實なりと執して、法執を斷せざる故に、唯蘊と云ふ。然れども、一分人無我の眞理を證して、我見を斷ずる故に、唯蘊無我と名く。法のみありて我はなしと云ふ意なり。印度流布二十部の小乗は、皆此心に攝す。俱舍宗、成實宗、亦此心の分齊なり。

第五、拔業因種心

小乗教中の緣覺乘なり。即ち無佛世界に出世して、佛の説法を聽かず。山林溪谷に居して、無言三昧に住し、飛花落葉を見て十二因緣を觀し、無我の眞理を證して、小涅槃を期す。此れに二類あり。部行は多人共住し、麟角は麟の一角の如く、大千界に唯一人出世す。又聲聞に對すれば、總じて緣覺は利根なる故に、見惑修惑の正

使を斷ずるのみならず、更に少分の習氣を斷ず。即ち業と煩惱と無明との習氣なり。故に拔業因種と名く。種とは即習氣なり。以上の二は小乗教なるを以て、但知六識の分齊なり。胎藏曼荼羅の釋迦院眷屬の聲聞と、僻支佛とは此心の能化なり。

第六、他緣大乘心

眞如平等の理を證するを以て、他の一切衆生を緣じ取ること、自身と等同なる同體の大悲心を發して、一切の衆生を救濟して憊むことを知らず。衆生を載せて大覺位に運び、自らも大覺位に登らんと期するを、他緣大乘と云ふ。故に惣じて諸大乘教は、悉く他緣大乘なれども、今は大乘の初門たるに約して、總即別して法相宗に名く。故に此心は法相宗なり。唐の遍覺三藏入竺して、那蘭陀寺の戒賢論師に從つて此宗を傳へ、三藏は慈恩大師に授け、基公は淄州惠沼に授け、惠沼は樸揚の智周に授く。日本の玄昉僧正入唐して、智周に從つて此宗を傳へ、歸朝して興福寺を以て根本道場として、此宗を弘む、此を北寺傳と云ふ。之れより先き道證法師は入唐して、親たり玄奘三藏に逢ひて、此宗を傳へ、歸朝して元興寺に於て、此宗を弘む。



此れを南寺の傳と云ふ。胎藏曼荼羅會中大眷屬の中の彌勒菩薩は、此心の能化の主なり。瑜伽唯識等の諸論は此宗所依の論なり。又釋論の五種本覺の中の染淨本覺なり。

第七覺心不生心

心の不生を覺ると訓ずべし。自心の實相は、不生不滅不斷不常不一不異不來不去世の八不中道なるを覺悟して、成佛すと立つる故に、覺心不生心と云ふ。支那嘉祥寺、吉藏法師、中論、百論、十二門論に依つて立つる所なる故に、三論宗と名く。南都東大寺に此宗を傳へたり。即ち上生院は三論の讀師なり。胎藏曼荼羅の中の第二重大眷屬中の文殊菩薩は、此心の能化の主なり。以上の二心は、大乘中の三乗教にして、次の如く那蘭陀寺有空の兩宗に當れり。又此心は釋論の清淨本覺に當る。

第八一道無爲心

隋の智者大師、法華、智度、中論を以て所依として立つる所の天台宗なり。此宗は「智即境境即智にして心境を亡泯し、無爲無相なるを極位とす。此を一道清淨と云ひ又は一道無爲と名く。是を又如實知自心と名く。一如本淨の心の實相を知る

を以てなり。又空性無境と名く。大日經に此心を空性無境と説くを以て、空性とは自心の實相ならざるべからず。此位は境なければ智もなし。境智俱融して不二無相の故なり。胎藏曼荼羅第二重の大眷屬中の觀世音菩薩は、此心の能化の主なり。即傳教大師所傳の法華一乘にして釋論に所謂一法界心本覺なり。

第九極無自性心

此心に淺略と深祕との二趣ありて、淺略は即ち唐の賢首大師の立つる所の華嚴宗なり。此宗は始を尋ね、終りを求むるに、眞如法界不守自性隨緣の義を出でざるが故に、極無自性心と名く。若し深祕に依らば、此心密佛の驚覺を蒙つて、入密して成佛する故に、極無自性と名く。金剛頂經、守護國界經等の五處驚覺の文は、即ち此心の位なり。胎藏曼荼羅第二重内眷屬中の普賢菩薩は、此心の能化の主にして、又釋論に所謂三自一心本覺なり。

この二心は、支那立教の宗にして、一乘教なるを以て、頗る第十住心に接近すれども、唯遮情の空理のみを證して、未だ心内の金剛寶藏を開かざる故に、尙顯教に屬する也。以上四家大乘の法門は、内證に就いて論すれば次の如く、彌勒、文殊、觀音、普賢

の三摩地なり。而して九心の名は、大日經住心品の、八心三劫の兩段に由つて立つるもの也。

第十、秘密莊嚴心

これ即ち弘法大師立教の眞言宗なり。衆生秘密、如來秘密の故に秘密と云ふ。其秘密と稱する所の、自心の金剛寶藏無盡莊嚴の曼荼羅を開顯し已つて、還て之を以て、一切衆生の平等心地の曼荼羅を開顯する故に、秘密莊嚴と云ふ。此心は釋論の不二摩訶衍本覺にして、華嚴の果分不可説の境界なり。此を九顯一密の堅の判教と云ふ。是れ則ち秘藏寶鑰の法相なり。若し十住心論に依れば、九顯十密の法相なり。其別推して知るべし云々。

三、十住心と諸宗

此十住心の判教に就いて、天台の智證、安然諸師は、天台を以て第八とし、華嚴を以て第九と爲して、淺深を判じたるを以て、頗る論難を加へたり。天台宗の立場としては、實に然るべしと雖も、大師は賢首、華嚴宗の意に依つて、法華を以て同教一乘と見給ふ故に、以上の如く次第し給ひしなり。

又大師入滅後開宗せし、禪淨土等の諸宗も、十住心に攝せざる可からず。然らざれば攝教不盡の失ある故に、先づ禪より之を論ずべし。禪宗に二の別あり。一は三乗教の分齊なるもの、即ち賢首大師の五教判釋中の頓教に當るもの也。清涼の澄觀は、演義鈔に「正是斯教之旨」と釋して、頓教の義を示し、圭峰宗密は、圓覺經抄に釋して曰く、「南北宗禪不出頓教」と。頓教は三乗教なる故に、禪亦三乗教なること明かなり。二は一乗教の分齊に屬する禪、即ち大師法華開顯の一如本覺に當る禪なり。法華開題に、釋論の五種本覺の三自本覺華嚴と、不二本覺眞言との中間に於て、一如本覺を開立して、六種本覺と爲し給へり。其一如本覺は、即ち禪宗なりと傳ふ。然るに已に顯密の中際に於て、之れを開き給ふを以て見れば、華嚴以上の圓頓一乘の禪にして眞言の初地に對して、わづかに薄紙一枚を隔つるものなること明かなり。故に禪に於ては頓なりと雖も、一相孤門にして圓にあらざるものあり。又頓にして舉一全收の圓なる禪あることを知るべし。智覺禪師の宗鏡錄第九十二に云く、理無偏圓約見不同略分五教、此宗即圓教所攝と。取意

按ずるに十住心中禪を論じ給はざるを以て、大師は禪を傳へずと云ふ人あり。

然るに傳教大師已に禪を傳へ給ふより推し測るに、其當時禪は支那に大に行はれたりしことは明なり。然らば大師何ぞ之れを傳へ給はざらんや。之を傳へ給ふ故に、殊更に一如本覺を開立し給ふなり。然るに立教開宗の時代に、本朝には未だ禪宗興らざる故に、十住心に於て之れを判じ給はざりし也。然れども三乘禪は、第七住心に攝し、一乘禪は第九住心に攝すべし。今之れを以て、日本現流の宗に配すれば、臨濟黃檗及曹洞宗中、彼の天桂一派の如きは、三乘禪と判ぜざるを得ず。何となれば、其話頭頗る高尚に、極めて幽妙なりと雖も、其結歸する無一物の空理なる故に、即ち智度論の「說眞諦中、無佛無衆生なるもの也。又却來の上、無盡を談ぜざるには非ざれども、一相の無盡にして重々帝網に非ざる故に、又承陽大師の太白如淨禪師に投じて相承し給ふ所の禪は、圓頓一乘中、最頂の禪にして、天台華嚴を慕過せりと稱すべし。無盡法界圓頓の旨は、正法眼藏を正法眼藏の如く拜讀する人始めて得べし。歸する所、永平の禪は智論の「說眞諦中有佛有衆生」なり。是れ則ち如淨禪師己心中の法門なり。然れども澆末の劣機には、臨濟の禪は惡辣ながらも入り易し。曹洞の禪は柔和なれども入り難し。又臨

濟は、公案の爲に工夫に失するの嫌あり。之に反して、曹洞は氣息の故に、幽邃に失するの恐れあり。眞言祕密の法界體性三昧咒字不生の觀の工夫に失する嫌ひなく、又幽微に失するの恐れなきには如かざる也。

神秀禪師悟道の偈に曰く、

「菩提本是樹、明鏡亦臺也。時々勤拂拭、莫令染塵埃。」

慧能禪師悟道の偈に曰く、

「菩提本無樹、明鏡亦非臺。本來無一物、何處有塵埃。」

神秀の見處は、煩惱と菩提と二者ありと認め、煩惱を斷じて菩提を證するの意なる故に、漸次修證にして、天台の別教華嚴の終教の分齊なり。又慧能の見處は、本來無一物、畢竟空の理を以て極致とする故に、華嚴の頓教に同じ。然れども更に圓理の認むべきなし。又文字を遮斷して、聲字即ち實相の眞理を談ぜざるを以て、南北兩禪共に三乘教の分齊なり。印度に於ては、顯教は唯三乘教のみにして、一乘教あることなければ、達磨相傳の禪の三乘教の分齊なるは、怪むに足らざることなり。然るに承陽大師が、太白如淨禪師より相傳し來りて指導する所の

禪は、圓理を談ずるに至つては、天台華嚴の兩一乘に譲らざるのみならず、尙秘密曼荼羅の法門をも開示せり。正法眼藏の梅花の卷は、密教の三昧耶曼荼羅にあらずして何ぞや。現成公案の卷の如きは、密教の表徳實相の法門を演るものなり。之れに就て余更に案ずるに、達磨相承の禪は、三乗教なりと雖も、支那に入りて自然に天台華嚴兩一乘と密教との間接なる化を感じて、自ら圓理に接し、密理に接して、圓理と密理とを談ずるに至りしものならん。學者虚心を以つて研究すべし。

次に融通念佛宗は、大原の聖應大師良忍上人、永久五年世壽四十六歳五月十五日正午、阿彌陀如來降臨して、親たり上人に授け給ふ。法文に曰く、

「二人一切人一切人一人一行一切行一切行一行是名他力往生以上は長行十界一念融通念佛、億百萬遍功德圓滿」(以上は偈文)

以上の長行偈頌は、阿彌陀佛直授の文なり。

諸法實相無能念無所念、如如融通、是名他力往生之願、生佛宛然如如融通、是名他力往生之行、億百萬遍非多非少、是名事理不二不可思議功德、往生日課、一念懈怠、寶池

蓮萎、億百萬遍功德損減、一念精進、寶池蓮開、億百萬遍功德成就」(以上は良忍上人の釋なり)

此宗は華嚴の事々無礙の法門を以て、稱名念佛を解釋せしものにして、他の事法界の一切人の念佛稱名が、自身の稱名念佛に融通して、己を助けて往生の業を成就せしむるを他力往生と云ふ。故に彌陀本願の他力にあらずして、自身より外の餘の一切人の他力なり。是の故に、生佛宛然如々融通、是名他力往生之行と釋せり。本宗に天得の如來と稱する、良忍上人感得の十一尊來迎の圖像は、十界一念を轉載するものなり。十界一念を談ずるは、天台に似たりと雖も、自他融通無礙を以て、本旨とする故に、第九の住心に攝すべし。此宗の他力を解釋的に云へば、融通無量力と云ふべし。他人の念佛が、己の念佛に融通無礙にして、自己の往生の業を成辨すること、水を水に投ずるが如くなるを以てなり。自己の念佛が、他人の念佛に融通して、他人を助くるも亦准じて知るべし。豈に管に、念佛のみならんや。世間出世間の一切の事業、他人の助くる力に依らざれば、成功すること能はざるなり。新羅の元曉法師は、此眞理を、雖無他作自受之理、有緣起難思

之力と讚歎せり。佛は此の眞理を思に寄せて衆生の恩と説き給へり。法性縁起の道理として、事々物々は、本來法爾として、無礙融會なり。眞理は自ら行はる、然りと雖も、衆生は、無明の爲に智眼を盲ひられて、此理を知ること能はざりし也。大念佛宗の他力は、他力の根本を演じたるものなり。彌陀の他力は此無礙力を本として、更に此れが上に本願を發したるものなりと云ふべし。他力と云ふと雖も、其實は生佛互融なり。高田專修寺派の學將、惠雲法師の著したる教行信證十五卷鈔に曰く、感應道交、生佛互融なれども、己れを忘れて佛願に歸するは、此宗出離の故實なりと。千古の格言と云ふべし。

淨土宗は、厭離穢土欣求淨土と教示するを以て、或は淨土宗を以て、厭世教なりと云ひ、又之よりして推して、總じて佛教は厭世教なりと速斷する輩往々之れありと雖も、是れ佛教の眞意を知らざる、誤解より起る妄見なり。小乗教は、釋迦佛厭世を以て理想とする、二乗の劣機に對して、引接の方便止むことを得ずして、其の機に隨つて説き給ふ故に、其の表面より云へば、厭世教ならざるに非ずと雖も、佛の内意は、邪路に墮落せんとするを、方便引接して、遂には厭世的小涅槃を救濟

して、菩薩の大悲を得せしめ、成佛せしめんとするにあり。又小乘二十部は皆厭世的宗教にあらざるなしと雖も、佛教は大乘を以て、眞實の教と爲す。大乘教は、三乘一乘に論なく、顯教、密教を問はず、大慈、大悲、大喜、大捨の四無量心を以て、本旨として、精神上に大慈、大悲の甲冑を著し、大喜、大捨の弓箭を帶して、常に五濁雜亂の世間に處し、罪惡の爲に、煩惱せられ、苦められつゝある一切衆生を救濟して、清淨にして光明ある理性に歸著せしむるを以て本旨と爲す。故に厭世教にあらざることを明かなり。故に大乘の菩薩は、二乗地即ち小乘に墮在するを以て、菩薩の死と名けて深く之れを厭へり。龍樹菩薩十住毘婆娑に曰く、

若墮聲聞地	及辟支佛地	是名菩薩死	若墮於地獄
不生如是畏	若墮二乘地	即爲大怖畏	墮於地獄中
畢竟得至佛	若墮二乘地	畢竟遮佛道	佛自於經中
解說如是事	如入貪壽者	斬首則大畏	菩薩亦如是
若於聲聞地	及辟支佛地	應生大怖畏	

と、又法華經に、教主釋尊宣言し給はく、

我常在此娑婆世界 說法教化無數億衆生

と。然り而して濁濁暗黒の世を厭ひ、清淨光明の國を欣ぶは、人たる道の普通なり、故に厭離穢土欣求淨土を以て、一概に厭世と速斷すべからず。語を換て之れを云へば、罪惡充滿の國土をして、清淨光明の國土と爲さんと云ふの意なり。何となれば、穢土の外に淨土の體あるにあらざればなり。大日經疏に曰く、「如來有應之處無非此宮不獨在三界之表也」と、仁王般若經に曰く、「三界之外更有國土是外道大有經說」と。以て知るべし。

法然上人開宗の淨土門は、旗幟鮮明なるに依て、聖淨二門の判教を用ゆと雖も、正依善導なるは論なし。然るに善導は、吉藏法師の三論に同く、二藏(聲聞藏菩薩藏)二教の判教なり。(二教とは菩薩藏の中に於て、頓漸の二教を分つを云ふ。又傳通院聖闍師は、頓教の中に於て、更に性頓相頓を分つて、華嚴法華等を以て性頓とし、念佛門を以て相頓となせり。)又三大僧祇を経て成佛すと云ひ、又十地の菩薩に變易身を立てたり。又一切法の緣起を論ずるに、眞如法性を以て所依とすと雖も、性具にあらず、又性起にあらざるを以て、三乗教の分齊を超出せず。曇鸞

道綽亦然なり。此等の邊より論ずれば、第七の住心に屬するに於て、敢て疚しき所あるに非ずと雖も、概論し難きものあり。謂く即ち阿彌陀佛報身凡夫報土得生の法門なり。又源空上人は、止觀遮那の蘊奧を究め、造詣甚深しと雖ども、時機に感ずる所ありて、止觀遮那の觀行を捨て、專修念佛の世捨て人と爲り、善導流の念佛の弘通に生涯を委ねたり。然れども、萬有諸法の緣起攝歸を論ずるに於て、一乘圓教の法門を捨て、三乘權門に依り給ふの理あらんや。又天台に於ては、圓教の初住、別教の初地に入るにあらざれば、報身如來を拜すること能はずと立つ。此れ智者大師が、阿彌陀佛の身土を以て、化と立つる所以なり。況や三乘權教に於てをや。然るに善導の阿彌陀は報身、安養界は報土と判じ、而して薄地の凡夫の得生を論ずるは、眞に超絶の法門にして、眞言密教の法門に即通せり。そも、西方安養界の化主、阿彌陀佛を以て報身と立つるは、密教の所説なり。

金剛界禮懺經不空譯に曰く、「南無受用智慧身阿彌陀佛」と。

土も隨て報土なるは論なし。而して但信行淺の薄地の凡夫、口密の一行に依つて、順次に報土の往生を得るは、密教不共の教力勝の法門なり。又十念往生は、密

教相承の大事なり。然れども源空上人は、阿彌陀佛に即身成佛と順次往生との二種の法門ある中に於て、順次往生の法に依ると宣言し給ふ故に、密教に屬すべきにあらず。是を以て顯教の最頂たる第九の住心に攝すべし。何となれば、彼の天台を超て、密教に即通する邊あるを以て也。豊山法住僧正は、大日經疏玉振鈔に於て、淨土門は顯の一乘に超出する所あるも、降らざる旨を論ぜられたり。

現今流布の淨土四宗（鎮西、西山、真宗、時宗）中に於て、時宗は西山の分派と見るも敢て誣るにあらざるべし。西山と真宗とは酷似する所あり。一類往生を論じ、報謝念佛を談ずるが如き其一斑なり。但し西山の特色とする所は、傍正開會にあり。此れ餘の淨土門と全く色彩を異にする所なり。而して真宗は、重きを他力の信心に置けり。又鎮西は真宗と大に其色彩を異にして、二類往生を談じ、重きを稱名の行に置けり。即稱名正因なり。又西山鎮西は、聖淨兩實と立て、真宗は聖權淨實と立てたり。

余は鎮西白旗流の法義は、故行誠上人に相承し、又真宗の法義は、專修寺派の碩徳尾州知多郡常滑眞福寺主貞諒上人に隨つて、見眞大師面授の三傑の隨一たる、

伊東顯智房の流義を相承せり。此以前、寄縁に誘はれて、豊後南溪師の、信行不離一念義を傳へたり。故に更に巨細に論究すべき義なきにはあれざれども、暫く之を謂はざるべし。

專修寺派の連枝三州桑子明元寺某上人云く、同一の酒に酔うて、喜び笑ふあり、快く眠るあり、悲しみ泣くあり。其人に依つて別ありと雖も、同一の酒に酔ひたる結果なるに於て別なきが如く、淨土の法門亦然り。真宗が佛恩を喜んで、報謝念佛を稱ふるは、猶ほ彼の笑ひ上戸の如し。西山が十劫正覺の昔に、既に已に往生することを信知して、眠るが如くに稱名するは、彼の眠上戸の如し。鎮西が最後臨終の一念を期待して、念死稱名するは、彼の泣き上戸の如し。機に依つて別なきにあらざれども、共に念佛の功德中に棲息する故に、報土得生に差別なしと云云。何ぞ夫れ佛法の實體を得ることの深きや。

最後に云ふべきあり。謂く、顯教の聖道一家は、宗の何たるを問ふことなく、一心の利刀を弄する故に、法門の相承は惣して以心傳心なり。豈に獨り禪宗のみならんや。又淨土の一流は、稱名念佛を以て稱名念佛に傳ふる故に、法門の相承

は、以聲傳聲なり。故に觀無量壽經下品下生の段に云く、

「善友告言汝若不能念者、應稱無量壽佛、如是至心、令聲不絕、具足十念、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故」云云。

又同經流通分の附屬念佛の段に云く、

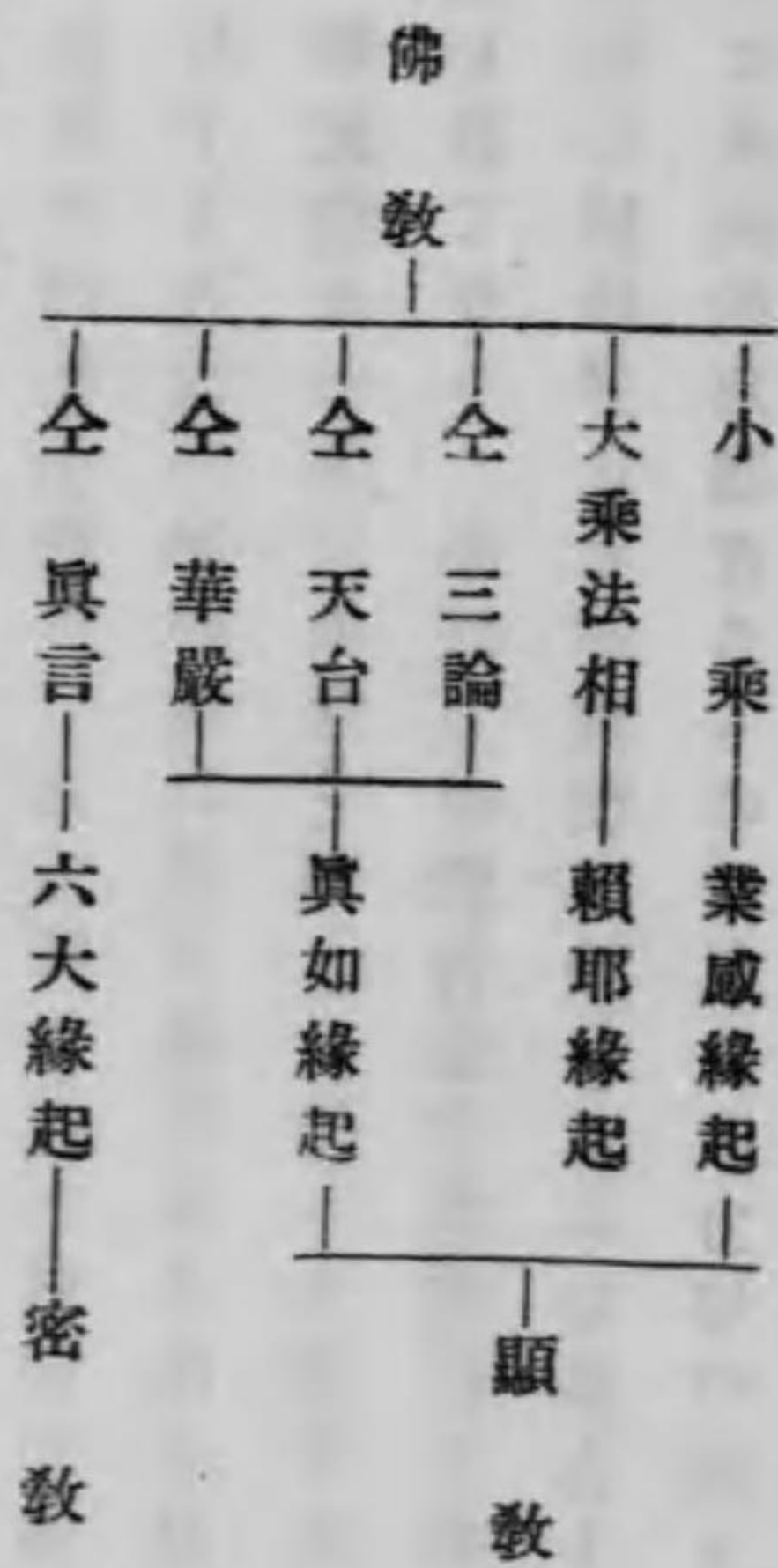
「佛告阿難、汝好持是語、持是語者、即是持無量壽佛名」と。

眞言密教は、三密の金剛を修するが故に、以心傳心なるあり、以身傳身なるあり、又以聲傳聲なるあり。又或は一密を以て成佛するあり、或は二密を行じて成佛するあり。以て顯密の差別を知るべし。

又日蓮宗には、一致勝劣等の諸派ありて、教義に異同あるを以て概論し難く、又骨子は密教に取りたるの觀あれども、大體に就ては、天台の新派とも云ふべき宗なる故に、第八の住心に攝すべし。然れども、其内容は、大に眞言に同じきものを認むるなり。

### 第七章 顯密の諸法緣起の不同

佛教に於て、一切諸法が緣に隨て現起するに就いて、其所談を綜合し該括するに、大凡そ四種に過ぎざるなり。



小乗教は、其機根極めて劣鈍にして、自ら己れに於ては、佛の大覺を證して成佛するの分なしと信ずる者の教門なり。故に小乗とは、二乗の小覺を求めて、斷じて成佛の念なき劣機の爲に説く所の、淺近の法門を云ふなり。此劣機を載せて、二乗の小覺に運ぶ所の教なる故に小乗と稱す。即ち釋迦佛、鹿野園に於て説く所の四阿舍經是なり。印度の廿部の小乗は、此經に依つて開きたる宗なり。其所説同じからずと雖も、概括して之を論ずれば、有爲法の緣起を説かんには、六因四緣を以て因



縁として、一切法生起すと説く。其因縁を會遇せしむる者は、亦二三にあらずと雖も、庵に論ずれば、吾人の造る所の善と惡と相在との業力が、助縁と成つて、色心等の諸法を感起せしむと云ふ。故に業感縁起なり。然るに過現未三世の諸法は、心外に在りて實有なり。法體は恒有なりと雖も、作用は無常なりと云ふ。故に生滅は作用の上において、法體の上にあるにあらざれば、業感縁起は作用の上にて云ふと知るべし。

大乘教は、機根稍勝れて、自ら釋迦佛と同等なる佛の大覺を證して、成佛する分ありと信ずる菩薩の機爲に、其大覺を得る道を説く教なり。故に小乘教に對すれば、一層深遠なる故に、大乘と稱す。即ち大覺を求むる人を載せて、佛の大覺の位に運ぶを以てなり。華嚴、方等、般若、法華、涅槃は大乗教なり、中に於て法相宗の意は、一切衆生の精神界に、本來阿頼耶識と云ふ心法ありて、一切諸法の種子を含藏せり。然るに此阿頼耶識なるもの、善惡の業力等の種々の縁に擊發せられて、其種子より一切法の現行を生ずと立つ。解深密經、瑜伽論等に依つて説く所なり。頼耶を以て縁起の根本と立つる故に、頼耶縁起説と云ふ。即縁起の根原は、唯心法のみなり。

物質的の色法は、頼耶の所變なるを以て枝末なり。眞如は凝然常住なるを以て縁起せずと雖も、識を離れざる故に縁起の所依となるなり。

三論宗、天台宗、華嚴宗の三宗は、其所説自ら淺深なきには非ざれども、概して之を云へば、一切法の眞理を以て眞如と稱す。即眞は眞實の義、如は一如平等の義にして、従つて眞如の理は實在にして、一切諸法に周遍して至らざる所なしと雖も、一味平等にして無相なるを以て、迷を帯びたる人の見聞覺知に落ちざる故に眞如と稱す。換言すれば、絶對の空理なり。之を喩ふれば、平湛澄淨なる水の如し。然るに此眞如の理に伴うて、無始の無明と云ふものあり。其從來する所を知らざれども、忽然として起つて眞如の理を薰ず。之を喩ふれば、風の如し。平湛なる眞如の水も、無明の風に扇がれて、一切諸法の千波萬浪を現起す。此波浪の相は、本來平湛の水に在るにあらず。無明の風に扇がれて始めて現ずる故に、波浪は即ち風の相なり。一切法は即ち無明の相なり。故に行者進修の行力に由つて無明を斷滅すれば、一切法の相も亦消滅して、眞如の空理に皈するを以つて、眞如獨存となる。猶風止めば波浪の相亦滅して、平湛水に歸するが如し。眞如の理、無明の縁に隨つて

一切法の相を現はすと雖も、此相は本無今有なり。無而忽有なるが故に、現象界の一切法は、其實は空なりと云ふ。されば法の根本は唯心にして、理の一邊のみなり。此を眞如縁起と云ふ。天台が性具の三千を談ずるも理具なり。華嚴が性起を談ずるも理具なり。天台宗は眞如即萬法、萬法即眞如なるを以て、法性に三千の諸法を具せりと論じて、性具の三千を立つと雖も、もと是理具なるを以て、法性の位に色の諸法、事々物々、相相歷然として存在するにあらず。何となれば法身如來に、色身說法ありと許さざるを以てなり。又華嚴宗に於て、法性がありのままに縁起したる光景が、即ち一切法なるを以て、現象界の諸法は即ち性起なりと論じて、事事物物相互に融會無礙なりと云ふと雖も、性の位は眞如の一理にして、事々物物に差別の相を存するにあらず。又理無礙の故を以て、事無礙の義を立つれども、理の故を假らずして事無礙なるに非ず。是故に縁起の根本は、眞如の一理に歸し、隨つて一切法は縁起の枝末たらざるを得ず。故に尙眞如縁起の分齊に攝すべきなり。

眞言密教は、六大を以つて縁起の根本となす。故に一切法の本源には、事理併存して、現象界の一切法は、其まま阿字本不生際に住するなれば、現象界の萬法は即ち

實在界の六大にして、本來不生不滅なり。此を顯密の諸法縁起の差別と爲す。彼此對照せば、其淺深勝劣は、火を見るが如くならん。

### 第八章 六大四曼三密

眞言密教は、常途顯教に異なり、地水火風空識の六箇の事物を以つて、一切法の能造縁起の根本とす。十法界の一切諸法は、此法爾の六大が、法爾の縁に隨つて流現するものなるが故に、六大の外に諸法なく、諸法即ち六大なり。六大は、其數無量にして、大小の差ありと雖も、一切法の實體にして、法界に周遍する故に體大と云ふ。顯教にては、地水火風の四大と、八識心王心所とは、有爲生滅の法と立つれども、密教に於ては、六大は即ち本地法身摩阿毘盧遮那如來なり。斯の如く法性の六大は、相互に涉入して圓融無礙なる故に、六大無礙常瑜伽と云ふ。敢て、理平等の故を假らずして事々無礙なり。且く前五大を色と云ひ、第六を心と名くと雖も、其實際は五大即ち五智輪にして、無礙なる故に、色と云へば惣じて色ならざるなく、心と云へば惣じて心ならざるなし。而も斯の如くなりと雖も、又六大差別の相を亡泯するに

あらず。故に密教は顯教の大乗の如く、一心緣起の法門にあらず、心本色末の宗義にあらざるなり。又色法は無量なれども、之を概括するに五根五境を超えず。心法亦無量なれども、之を概括すれば、九識心王及び五十一の心所法と成る。然るに六大を建立するに、色法を開いて地水火風空の五と爲し、心法を合して唯一の識大と爲すは、色は差別を義とし、質礙を本とする故に、開いて五と爲し、心は平等を義とし、靈妙を體とする故に、合して一とす。義別を顯さんが爲に開合不同なり。小乗と權大乘等に於て建立する所の五蘊十二處等も、亦色心の二を出でずと雖も、因縁に作られたる法なる故に、生滅無常にして、虛假不實なり。今論ずる所の六大は、一切法の實際なる故に、因縁造作を離れて法爾法然なり。常位不變なり。混同すること勿れ。然りと雖も、彼の小乗等に於て、因縁に作られたる物にして、生滅無常なりと見る所の法を以て、三密の智眼を開いて之を見れば、即事而眞の故に、法法塵塵悉く自性會の法にして、法性の具徳にあらざるはなきなり。

又能造の六大は、融會無礙にして、水を水に投するが如くなることは敢へて論なしと雖も、此無礙を分類するに、同類無礙と異類無礙との二あり、同種類のもの相互

に礙へざるを同類無礙と云ふ。即ち彼の地大と此の地大と相礙へず、乃至彼の識大と此識大と相礙へざるが如き是なり。異種類のもの相互に礙へざるを異類無礙と云ふ。即ち地大と水大と相礙へず、水大と火大と相礙へざる等の如き是なり。世間現に見る所にては、水火相反して相融せざるに似たれども、相の差別を以て性の無礙を疑ふべきにあらず。又若し水火融せざれば、火に依つて冷水を沸騰せしむること能はざるべし。又自身の六大と、他身の六大と融會無礙し、衆生の六大と佛の六大と融會無礙する等、皆此二類無礙を出でざるなり。我等凡夫が此肉身を以つて成佛することを得るも、佛が淨土の法樂を捨てて、分段同居の穢土に出世して衆生を度するも、乃至密教の行者の一座行法も、死亡者を加持して成佛せしむるも、皆斯の二類無礙の力用を超えざるなり。

此六大を解釋するに兩傳あり。一傳は六大に於て法爾と隨縁との不同ありて、隨縁の六大は所造の四曼相大の中に攝し、法爾の六大は萬有能生の元則なりとす。此位は唯堅、濕、煖、動、無礙、了知の法性の六徳のみにして、自餘の色形等の諸法は、悉く所造の四曼の所攝とす。其憑證は、高祖の無盡莊嚴藏次第に曰く、法性内五大是堅

濕煖動無礙性」と此を一具の六大と云ふなり。又一傳にては、六大體大の位に於て、四曼三世間等即法界の一切法を圓滿に具有して、一も缺くることなしとす。且く其一相に就いて示さば、

六大	種子	字義	顯色	形色	法性	業用
地	孔	本不生	黃	方	堅	持
水	𠄎	離言說	白	圓	濕	攝
火	𠄎	無垢染	赤	三角	煖	熟
風	𠄎	離因緣	黑	半月	動	長
空	𠄎	等虛空	青	圓	無礙	不障
識	𠄎	了別	白或雜	圓或雜	了知	決斷

斯の如く、六大體大の位に於て、一切法を具足するなり、即ち興教大師の法界曼茶羅は此位なり。其憑證は、高祖の二教論等枚擧に違あらざるなり、此を多具の六大と云ふ。一具は義門に就き、多具は實體に依る。次第の如く新古兩派の根據なり。六大に法爾と隨緣との二位ありて、本有法然として諸法能造の實體に居する位

を法爾と云ふ。其六大が法界法爾の緣に隨つて、十法界の萬有と顯はれたる位を隨緣と云ふ。この六大緣起して、一切法と成つて宇宙に散在する現象を分類して、大三法羯の四種曼茶羅と爲す。抑も地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六凡と云ひ、聲聞緣覺菩薩佛を四聖と云ふ。之を合して十法界となす。此十法界の中の有情を惣じて大曼茶羅と云ふ。六大の所成なること顯了なる故に、特に大の名を與ふ。十法界中の山河草木、國土、器具等の非情の法を惣じて、三昧耶曼茶羅と云ふ。三昧耶は平等の義なり。非情の事々、物々、相々、各別なれども、其性融會無礙なる義を示して、平等曼茶羅と云ふ。十界の有情非情の音聲言語風林河等の聲及色塵の文字は、無論六塵教體の故に、六塵の上にある所の詮表を總じて法曼茶羅と云ふ。法とは其物の義理を詮顯表章して、知覺を生ぜしむるが故なり。此十法界の、大三法の三曼茶羅の上にある取捨屈伸等の動作を惣じて、羯磨曼茶羅と云ふ。羯磨は動作の義なり。此四種を曼茶羅と云ふは、四種の箇々の法、圓かに無盡法界を具足して、毫も缺けたることなく、融會する故なり。曼茶羅は即ち輪圓具足の義なり。故に「四種曼茶各不離」と云ふ。四曼は顯著にして、法界に周遍する故に相大と云ふ。且

く大曼荼羅に就いて、輪圓具足の義を示せば、佛界に他の九界を圓かに具して、毫も缺けたることなく、乃至地獄界に、他の九界を具して、毫も缺けたることなきの義なり。現流の四曼は、佛界に他九界を具することを、丹青の功を假りて、書き顯はしたるものなるが故に、佛界の曼荼羅なり。小野仁海僧正の餓鬼曼荼羅は、餓鬼界の曼荼羅なり。又中臺に唯座位のみ書いて、本尊を書かざる曼荼羅あり、更に問へ。此四曼は、其體性たる六大より見れば、常に平等にして、差別相あることなき故に、隨緣常同の六大と云ふ。然れども、四曼別相の上より見れば、平等の六大も常に別なる故に、隨緣常別の六大と云ふ。

四曼の諸法の上に於て、各々に身口意の三業ありて、缺けたることなし。且く一箇の水瓶に就いて之を云へば、色質ありて水を盛り得るは身業なり。詮表する所ありて、此は瓶なりと云ふ知覺を生ぜしむるは語業なり。既に身語の二業あり、何ぞ意業なからんや。斯等の三業は、其物の作用にして、實際は六大に同く法界に周遍する故に、用大と云ふ。又大には方所を絶し、細には無間に入りて、等覺以還の人の測知する所に非ず。唯佛與佛乃能知之の故に三密と云ふ。又法身如來の身密

は、即ち印なり、印とは印契なり。故に之を以て行者の身を加持し、印すれば、自身即ち本尊の身と成るなり。顯教には如來の印契を説かず、顯密の淺深以て知るべし。以上の六大四曼三密を、法身毗盧遮那如來の體相用の三大と云ふ。上の如く次第して論ずると雖も、實際は三大同時に具足し、同一に緣起して前後することなく、不生而生、生而不生、不同而同、同而不同にして、條然として秩序を紊することなく、實に不可思議なり。弘法大師曰く、雖有能所二生都絕、能所法爾道理有、何造作」と。

### 第九章 一法界多法界

法界に、事法界と理法界との二あり。現象界の萬有諸法を、事法界と云ふ。其事々物々の諸法の元則たる、即ち能造能生の法にして、所造の萬有に周遍したる實在の地水火風空識の六大を以て、理法界と云ふ。此六大が其自性を改むることなく、自然に緣起して一切諸法と成る故に、一切法即ち六大にして、六大の外に諸法はなきなり。然るに其能生の六大の位にありては、諸法の事々物々、差別の相を亡泯して、唯、堅濕煖動無礙了知の法性の六德のみありて、無相平等なりと云ふを一法界と

名く。一は平等無差別の義なり。是れ則ち大日經の法相なり。故に同疏に曰く、  
「金剛手觀知如來獨一法界加持之相」と又云く、如是自證之境、說者無言、觀者無見」と。  
即ち第一義諦無相の意なり。是れ新義眞言の依る所なり。

多法界とは一切法の根源にして、能造たる六大の位に於て、事々物々差別の相、歴然として存在せり。若し能造の六大の位に、一切諸法歴々として存在せざれば、十法界の一切法は、本無今有にして、終に空に歸すべし。一切法本來阿字本不生際に住して、本有なりと立つる眞言密教の意ならんや。是れ則ち金剛頂經の法相なり。金剛頂瑜祇經に曰く、金剛界遍照如來、以五智所成四種法身、於本有金剛界光明心殿中、與自性所成眷屬乃至微細法身秘密心地、超過十地、身語心金剛等」と。又金剛頂分別聖位經に云く、自受用佛從心流出無量菩薩皆同一性、謂金剛性、如是諸佛菩薩自受法樂、故各說三密門」と、即ち第一義諦有相の意なり。是れ古義眞言の依る所なり。一多法界は一法界の故に、多法界成立し、多法界即ち一法界にして、其實は融會無礙なりと雖も、一法界は義門に就いて之を論じ、多法界は實體に就て立つるなり。此多法界を、或は多具の六大と云ひ、一法界を、或は一具の六大と云ふ。又法界の法は

所流現の萬有諸法なり。界とは體性の義なり。六大は一切法の體性なる故に、法界と云ふ。亦六大を法身とも云ふ。身には體性の義と、所依の義と、聚集の義とあり。六大は能造なる故に、一切法の所依にして、亦六大隨緣して諸法と成る。故に諸法の體性なり。又一切法は、悉く六大に聚集して具足する故に、聚集の義なり。約言すれば、法界と云ひ法身と云ふは、即ち體大の位にある六大を云ふものなり。

### 第十章 心法色形

顯教に於ては、諸法の緣起を談ずるに、或は阿頼耶識を以て本として、色法は識所變の影像にして相分なりと云ひ、或は眞如を本として、色法は緣起の枝末と爲す。故に色心を差別して、其本たる心法は無形なり。唯其末たる色法にのみ、顯形表の三を存せりと立つ。此れ他にあらず、緣起の本元を唯心と爲すに由つてなり。然るに眞言宗にありては、色心の實體は本不生際に住して、二而不二、圓融無礙なり。故に色法に形質あらば、心法にも亦有るべし。心法無形ならば、色法に形質ある可からず。心は形質の緣慮なり、色は緣慮の形質なり。故に心法に必ず色形ありと

論ず。此れ密教不共の談なり。此心の色形に就いて古來兩傳あり。一傳は白色と圓形とを心の色形と爲す。白は本性清淨の義、圓は功德圓滿の義なり。菩提心論の、我見自心形如月輪の釋を以つて、依憑とす。一傳は識大即ち心法は、有情非情の一切法に周遍するを以て、彼の一切法の種々の色形は、即ち悉く心の色形なり。無畏三藏の尊勝軌の五大、即ち五智輪の釋は此意なりと。

### 第十一章 繪木法然

佛教中、小乗教にありては、繪木の佛像等を祭るや否やは、未だ明了ならず。若し之を祭らば、教祖恩師等に對する信仰報恩の對象として祭るのみにして、其實は偶像なるを以て、其像に何等の功德力用あることを認めざるべし。大乘中の三乗教にありては、繪木の佛像は、信仰の對象として、能く衆生の信心を發起せしむる力用ある故に、佛像等を建立するは、功德廣大なりと云ふと雖も、色法は心の所變にして、妄緣起の未なる故に、繪畫木像等には、何たる功德あることなしと説く故に、繪木の佛像等に、不可思議の活用を現ずることあるは、自心の所變にして、尙是れ妄想の夢

となすなり。天台華嚴の一乗教にありては、天台は萬法即ち眞如、眞如即ち萬法と談ずる故に、木像畫像等は、さながらに眞如法身なるを以て、無量の功德を具して眞佛と異なるとなしと立つべし。又華嚴は、萬有諸法は悉く眞如法性より緣起すと談じて、無明緣起にあらざる故に、繪木の佛像眞佛と異ることなかるべし。然れども兩一乗共に、眞如實相の一理を本とするを以て、法の本源に色法あるにあらざれば、色法は緣起の未なり。故に極位に到達して、一如本覺に歸する時は、色法は空なり。是を以て實理を究むれば、繪畫彫刻の像等は、遂に空に歸せざるを得ざるなり。然るに眞言密教の意は、萬有諸法の元則たる、地水火風空識の六大は、即ち毗盧遮那の本地法身なり。故に一切諸法は、六大の隨緣顯現なるを以て、法々塵々事々物々六大ならざるなし。故に繪木の佛像等は、畫師彫刻師の緣力に由ると雖も、六大法身の隨緣顯現なるを以て、佛菩薩等の眞身と無二無別なり。語を替へて云へば、即ち眞身なり。木偶畫草紙と同一視す可からず。然るに迷情は即無明にして、一切法の實際に暗きのみならず、之を隔つるより我等凡夫は、繪木の形像は偶像にして、眞身と別なりと誤認す。之が爲に其迷執を遮遣せん爲に、開光點眼の作法を行

じて、本有の功德を發現するに擬するなり。深く其實際を論ずれば、繪木の佛像其儘六大法身なり。繪木の佛像等の縁に觸れて、不可思議の活作用を現することあるは此故なり。此義に依れば、佛教の偶像教にあらざるは明かなり。

### 第十一章 所化機類

衆生無邊なれば、所化の機類萬差なりと雖も、之を概括するに、結縁機と正機との二類を出でず。中に於て、結縁機とは、阿闍梨に従つて、一印一眞言を受持する等、乃至一見曼荼羅疑勝の逆縁に至る迄皆此機に攝す。此等の人は、密教に値偶して因縁を結ぶと雖も、如説に三密の修行を爲さず。一生即身に成佛すること能はざれば、亦傍機とも云ふなり。正機とは即ち眞言密教正所被の機にして、深く即身成佛の教理を信じ、阿闍梨の指導に従つて、灌頂曼荼羅に入り、三密の教法を傳授相承し、如説に修行し、以我功德力如來加持力及以法界力の三力加持の故に、觀行成就して父母所生の肉身を以て、一生に成佛する機類を云ふなり。此正機に迂回と直往との二類あり。從顯入密の機を迂回の機と云ふ。顯教に於て發心して、迂回し來つ

て密教に入るを以てなり。又最初發心より、直に密教を信じて發心し、成佛の彼岸に往詣するを、直往の機と云ふ。此に又大小の二機あり。大機は最初發心より、深く大日如來を信じ、法界體性三昧を修して、大日普門の果を證する者を云ふ。此に亦利鈍の二機ありて、利利鈍の五字を觀じて法界體性三昧を修する時に、先づ利利字一切法本不生の眞理を證すると同時に、横平等に利利鈍の眞理を證して、發心修行、菩提涅槃、方便具足の五轉頓發して、毘盧遮那法身を顯得して成佛するを大機の利根と云ふ。又先利字一切法本不生の眞理を觀じて之を證し、次に利字一切法離言説の眞理を觀して之を證し、次に利字一切法離塵垢の眞理を觀じて之を證し、次に利字一切法因縁不可得の眞理を觀じて之を證し、最後に利字一切法等虚空の眞理を觀じて之を證して、次第に展轉して修觀し、五轉漸發して本有の菩提心即ち自心の實相を開悟し、毘盧遮那法身を顯得して、成佛するを大機の鈍根と云ふ。斯の如く利鈍頓漸の別あれども、共に心王毘盧遮那を信ずる機なり。又小機とは、心王大日如來の差別智印より現はれたる、一門別徳の心數の諸尊の中に於て、一尊を選んで、信仰の對象と爲し、其尊の三密を行じて、成佛する者を云ふ。此に亦利鈍



の二機ありて、且く不動明王の行者に就いて之を釋すれば、火生三昧に住して、因業不可得なる故に、果位亦不可得なり。因果共に不可得なる故に、生死涅槃無二無別にして、自身即本尊なりと觀じて、此眞理を證し、地位の漸階を経ずして成佛するを小機の利根と云ふ。又本尊の三昧に住して、發心修行菩提涅槃の四轉を漸く修し、菩薩の階位を経て、最後に成佛するを、小機の鈍根と云ふ。一門の本尊を信修して、一門の果を證する時に、果體融合するが爲、諸尊即ち大日なるによりて、普門大日の果を證するなり。以上は普門と一門との決定姓の機に就いて釋す。若不定姓の機に就けば、最初は一門の尊を信じて發心し、其尊三密を修すと雖も、未だ果を證せざる中間に於て、普門に轉根して、法界體性三昧を修して、大日普門の果を證する者なり。迂回の機亦之に准じて釋すべし。又大日經疏には、頓漸超の三類の機を明し、禪林寺靜遍和尚は、地前實證、地上教道、地前教道、地上實證、地前地上共實證、地前地上共教道、の四機を立てたり、委くは傳法記第一第二に之れを出せり。披見すべし。

### 第十三章 即身成佛

密教の正機に、大機小機等の別ありと雖も、皆父母所生の肉身を以て、一生即身に成佛す。此の即身成佛に就いて、理具と加持と顯得との三種あり。理具の成佛とは、六趣に輪廻しつゝある我等一切衆生の身心の上に、從本以來理として具足しある所の本覺の菩提を云ふ。理具の故に過恒沙の功德未だ顯現せざれども、一點の功德も欠けたることなきなり。天台の理即佛の如し。加持の成佛とは、地前地上に通じて、因行の間、如說修行の三密の加持力に由て、能令三業同於本尊の觀行成就して、行者の身即ち本尊の身と成る位を云ふ。初心の間は、出觀すれば、行者身と爲ると雖も、觀行圓熟して、行住坐臥に本尊の三摩地に住する者は、常に本尊の身を現するものなり。顯得の成佛とは、十地の位に於て、分々に心内の曼荼羅即ち理具の成佛の功德を開顯する故に、一分の顯得成佛に就いて云へば、十地に通ぜざるにあらずれども、所見圓極して全く、心内本有理具の曼荼羅を開顯し得るは、第十一地佛果の位にあるなり。天台の究竟即の如し。一切衆生は、理具本成の本佛を有するを以て、之が爲に冥に内に薰ぜられて、無明の暗、自然に薄らぎ、解脫門の善知識に値遇することを得て、眞言密教を聽聞し、三密の加持力に依るを以て、理具本有の佛を

顯得して成佛す。故に之を理具加持顯得の次第と云ふ。

#### 第十四章 往生淨土

密教の意にては、往生淨土に現身往生と順次往生との二あり。大日經の疏に釋する所の第一密嚴佛國、第二十方淨土、第三諸天修羅宮等の三種の悉地宮は、現身往生なり。第一は普門の大機、第二第三は、一門の機にして、何れも共に正機の即身成佛の上にある差別なり。故に即身成佛とは、正報に就て云ひ、往生淨土とは依報に就いて云ふ迄の別にして、其實は異なることなきなり。又或は安養淨土、或は都史天、或は無勝清泰等、其機欲に隨つて、所詣の淨土には異なることあるべきなれども、此土に於て即身成佛すること能はず、彼佛の本願に信賴して、次の生に往生して成佛せんと期するは、順次往生なり。隔生成佛の故に、結緣機の分齊と爲す。阿闍梨に投じて三密の法を修すと雖も、如説に修行すること能はざる者より、乃至一見曼荼羅に至る迄、悉く結緣機に攝するを以て、結緣機は頗る廣し。斯の如きの劣機に對して、即身成佛を教示するは、方木圓孔に入らざるの憾あらん。故に宗旨の本意にあ

らずと雖も、止むことを得ず、方便の手を垂れて、方便引進するなり。興教大師密教に於て特に順次往生の一門を開き給ふ御意之にあり。如説に三密修行すること能はざる者は、仰ぐべし、憑むべし。順次往生は、彼の顯教に異なる所なきに似たりと雖も、密教結緣に由つて往生する者は、淨土に於て亦密教の教示を被るべき故に、成佛の速かなること、彼の顯教に由つて往生する人と同日の論にあらざるなり。興教大師の密嚴淨土の略觀に曰く、又願行淺弱機緣未熟、且安應化淨土、次迎法性妙國、應時超九界迷因、即身開三密之佛果、と以て知るべし。

#### 第十五章 非情成佛

小乗の非情成佛を談ぜざること論なし。法相宗は、有情に於てすら、決定性の無性有情あり。決定性の二乘ありて、成佛することを得ずと立つ。故に非情成佛は談ぜざるなり。三論宗は、一性皆成を旨とする故に、隨つて非情成佛を談ずれども、本覺の理は有情非情平等なるに由つて、有情成佛すれば非情も亦成佛する義ありと立つるものにして、草木瓦石が、自ら發心修行すとは立てず。天台華嚴兩一乘

は、理秘密を説くこと、一分密教に同ずる故に、山河草木等の非情發心成佛の義ありと談ずれども、眞如の一理を本とする故に、歸する所理談にして、事の實行明了ならず。又顯の兩一乘に於て、草木山河等に心識ありと云ふこと、道理明了ならず。

密教は、六大は一切法の元則なる故に、能く有情非情の諸法を造りて、而して其一切法に遍せざる所なし。故に山河草木瓦石瓶盆等の非情の法も、自ら識心を有するを以て、敢て遠く有情と異る者に非ず。非情の草木等に、造業感果の義ありと立つ故に草木等にも生死輪廻の義あり。之に對して草木等自ら發心修行して、成佛する義ありと云ふ。草木山河等の非情に對する能化の善知識は、佛界の三昧耶曼荼羅身是なり。安養界の池水は、佛名を奏し、淨土の劫樹は、時を報ずる等、以て知るべし。又櫻梅桃李等非情の成佛せし形相は、即ち三昧耶曼荼羅なり。然るに同く六大の所造なる中に於て、有情非情の區別あるは、草木等は五大の色法を表として緣起し、人類動物は、識大の心法を表として、緣起するを以て、且く緣起の表面に就いて之を區別する迄にして、其の實際を論ずれば、平等無差別なり。(謠曲の八橋の燕子花、又は義太夫の三十三間堂の柳等佛涅槃の日、菩提樹葉をしぼめて涙を浮ぶる

こと、朝露の如しと傳ふ。

因に變成男子成佛に就て、小乗教の女人は、五障を具する故に、女身を以て成佛すること能はずと立つるは論なし。又三乗教は、權方便の教にして、多く小乘に隨轉する故に、女人は變成男子して成佛すと立つ。故に、此れ亦女身を以て成佛するを許さず。阿彌陀佛の四十八願の第三十五の願に、變成男子の願を立て、果上の安養界に女人を置かざるは、三乗教に由つて本願を立てたる所以なるべし。蓋し、他に深旨ある歟。一乗教に於ても、天台は既に法華の提婆品に、八才の龍女變成男子して、南方無垢世界に於て、正覺を成ずと説く故に、女身の成佛を許さざること、經文顯著なり。或は法華一乘に、女身成佛を立せんと企圖して、種々解釋を爲すと雖も、私見の曲解に過ぎざるなり。華嚴經は明了にあらざれども、女身を以て成佛すと説かず。此れ顯教が隨機隨他意の説法にして、如來隨自意の説法にあらざるを以て、佛教の眞髓を盡すこと能はざる所以なり。

密教は佛、自内證の法を隨、自意説き給ふ故に、對機の説法にあらざるを以て、佛教の眞髓即ち一切法の眞理を、露骨に説き顯はすものなり。夫れ法性緣起して、天と

成り地と成らざれば止みなん、縁起して既に天と成つて覆ひ、地と成つて載する上は、其中間に位する人類動物に於て、男女雌雄あるは、法性縁起自然の法理なり。而して男子と女子と共に六大所成なり。故に男子の身を以て成佛することを得ば、女身を以て亦成佛することを得べし。同く六大の所成にして、六大は即ち本有本覺の毘盧遮那身なるを以ての故に、何ぞ變成男子を要せん。男女は法性の眞理に具する所の功德なり。何れをか取り何れをか捨てん。故に毘盧遮那如來の密嚴淨土には、四波羅蜜の定妃、内外八供養の天女使、又鈎索鑲鈴の四攝の天女菩薩を眷屬として之を列せり。是れ男子女人を問はず、父母所生の肉身を以て成佛し得る旨を示すものなり。斯の如く説き來れば、眞に男女平等の宗旨は密教なりと稱すべし。平等法上に於て、且く世諦に隨順して、行持に於ては男女の差別を嚴にするなり。同一六大所成の法に於て、嚴しく男女の別を見るは、衆生の妄見なり。其妄見に隨順して、説て方便引接するを隨他意の説法と云ふ。即ち顯教なり。余は世界縁起の最初より男女ありと信ず。印度古代の神話に、住劫最初は男女の別なしと雖も、後に食物を食つて多食する故に、情欲起り、隨て男女の別を生ぜりと云ふ説

は、信ずること能はざるなり。

### 第十六章 三句、八心、三劫、十地

#### 一、三句

大日經住心品に云く、佛言、菩提心爲因、大悲爲根本、方便爲究竟。此を因根究竟の三句と云ふ。即ち大日經の大宗なり。菩提を求むる心は、成佛の種子親因縁なる故に、菩提心爲因と云ふ。此菩提心に、本有の菩提心と、修生の菩提心との二あり。本有の心は體なり、修生の心は用なり。體用の異なきに非ざれども、共に菩提心なる故に、綜合して因の句とす。此の菩提心に於て大悲を起し、大悲に依つて三密の妙行を修するを、大悲爲根と云ふ。即ち菩提心の芽の爲に、大悲根と爲つて、彼草木等の根の地下に深く入つて、幹を動搖せしめざるが如くなる意なり。又大悲は萬行の爲に根と爲り、萬行は、方便爲究竟の爲に、根と爲るなり。此大悲爲根に、大悲即根と大悲生根との異説あれども、大日經疏の釋を綜合すれば、大悲と萬行とを合して、根とするを正義とす。菩提心を親因縁とし、大悲萬行を増上縁として、自利々他

の方便満足して、萬行圓極無可復増の佛果圓滿するを、方便爲究竟と云ふ。此の三句の法門を以て、十方三世の一切の諸佛所説の聖教を、統攝して漏らすことなき故に、大日經疏に、横統一切佛教と釋せり。又此三句を以て、佛蓮金の三部に配釋すれば、菩提心堅固不動にして、金剛の如くなるを金剛部と云ふ。故に因の句を以て、金剛部に配す。一切衆生本有の本性清淨の理、自他平等一如にして、蓮華の淤泥より出でて、淤泥に染せざるが如くなる眞理を證して、同體の大悲を起して衆生を救済するを、蓮華部と云ふ。故に根の句を以て蓮華部に配す。自利々他圓滿し、理智平等なるを佛部と云ふ。故に究竟の句を以て佛部に配す。又十地に配すれば、初地は因の句、第二地より佛果の無間道の法明道除蓋障三昧の位に至る迄は根の句、第十一地佛果の位は究竟の句なり。之れに準ずるに、地前にも亦三句の配當あるべし。最初發心の位を因とし、三妄執を斷ずる位を惣じて根とし、初地を以て究竟の句となす。此を兩重の三句と云ふ。

## 二、八心

第一種子心、八心は大日經住心品の所説にして、心續生の相を明したるものな

り。羝羊の水草と姪事との外には知ることなく、爲すことなきが如く、愚にして、因果の理を知らざる不修微少善の凡夫が、久遠より以來、展轉相承して善法の名字あるを聞いて、達理の心を以て、之を求めんと務むれども得ること能はず、然るに自己本有の菩提心内薫の力と、外の善法の名言薫習の力とに由て、忽然として節食と持齋との念生ずることありて之を持す、平素の食物の分量を好き程に節して、飽食せざるを節食と云ひ、一日不食を持齋と云ふ。是れ從來世間に傳ふる所の善法にして、未だ佛法の八關戒にはあらず。彼人節食持齋は、身を資くる緣務減少し、食物足り易く、之を求むるの勞苦なく、聊か安穩なることを知て、屢之を修するなり。此を第一の種子心と云ふ。

第二牙種心、已に或は持齋し、或は節食するを以て、財物に餘りある故に、之を以て毎月八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日の六齋日に於て、父母等の六親に施與するを牙種心と云ふ。節食持齋の善法、一層増長して、種より芽を生ずるが如くなるを以てなり。又六齋日は、往古より、善根を修して、惡鬼の災難を免かるゝことを得る日と傳へられたり。

第三疱種心 前に持齋及び節食施行を、數々修習するを以て、善心轉、漸く增長して、非親識の人にも施與す。芽莖の滋く盛なれども、未だ葉を生ぜざる時の如くなる故に、一に之を疱種と云ふ。疱は、もがさと訓ず。

第四葉種心 自他平等親疎一如に惠施を行するに由て、其疎き他人の中に於て、德行高勝の人を擇んで、特に親近し供養す。卽是れ智慧の性漸く開けて、善知識に値遇することを得るの由來なり。莖より葉を生ずるが如くなる故に、葉種と云ふ。

第五敷華心 已に德行高勝の人に親近し、供養するに由つて、智慧の性尙一層開けて、施物の上に於て、恠惜する所なく、追悔する所なく、歡喜して衆人の爲に利益を與ふる行動ある者に對して、其功を賞して之を施し、或は歡喜して世人の師範とする所の尊宿に施與す。華の開けたるが如くなる故に、敷華と云ふ。已上の五を皆種と云ふことは、第六成果に對望して云ふなり。

第六成果心 已に歡喜して尊行の人に施を行ぜしに由るが故に、人道を聞くことを得て、親愛の心を以て供養せらる。此心は人乘の至極なる故に、草木の菓實に喩へて、成果心と云ふ。以上の六心を一括して、之を云へば、第一は節食持齋し、第二

は六齋日に於て、父母等の六親に對して施を行じ、第三は親族にあらざる他人に對して施を行じ、第四は他人の中に於て、有徳の人に親近し、供養し、第五は智慧開けて、施の功德を歡喜して、衆人に利益を與ふる者と、尊宿とに施し、第六は、更に親愛の心を以て、尊行の人に供養す。以上は人乘の心なり。

第七受用種子心 已に齋施の利益を見て、惡業は惡趣を感ずる因縁なりと知り、十善戒を持して、天に生ぜんことを期す。第六心の成果は重ねて種子と成る。此心は其果實を受用して起る心なる故に、受用種子と云ふ。

第八嬰童心 已に尊行の人に親近し、供養すべきことを知り、亦持戒の功德を生ずるを見て、漸く因果の理を知るに由て、復善知識の大神あり、虔誠に供養すれば、所願皆滿つと云ふを聞いて、歸依の心を起して、彼の生天の行因を修して、大神の果を得むと希望する心なり。彼天に隨順すること、嬰兒の母に隨ふが如くなる故に、嬰童心と云ふ。又經に無畏依と説くは、惡趣に墮在するは凡夫の最も畏るる所なり。然るに今生天の因行を修して、惡趣の苦を怖畏せざる故に、無畏と云ふ。其無畏の所依を依と云ふ。卽大神等なり。故に無畏依を得るの嬰童心なり。又第八心よ

り殊勝決定の二心を開く。前諸の大天の中に於て、殊勝なる者を選びて隨順し、修行するを殊勝の心と云ふ。又其修する所の因行成就して、任運に契證するを、決定心と云ふなり。是の如くの八心は、世間の心を明すと雖も、其實は眞言行者の發心修行、心品轉進の心續生の相を、世間に寄齊して明するものと知るべし。

## 三、三劫

劫とは梵語なり。具さには劫跋と云ふ。此に時分と妄執との二義ありて、時分の義に就いて云へば、三劫とは三阿僧祇劫なり。即顯教の三乗教の菩薩の經歷する所の因位修行の時間なり。妄執に約する義は、眞言密教不共の説にして、入法二執の上に於て、麤細極細の三重に分つて、一重の龜妄執を以て初劫とし、一重の細妄執を以て第二劫とし、一重の極細妄執を以て第三劫とす。眞言行者は、三密の加持力に依て、一生に此三忘執を度して、父母所生の身を以て、即身成佛する故に、時分の三劫を経ざるなり。此旨を大日經疏に、若一生度此三妄執、即一生成佛、何論時分耶」と釋せり。然るに大日經住心品には、眞言行者三妄執を斷じて心品轉昇し、次第勝進する斷惑證理の分齊差別を、初二劫は常途顯教に寄齊して之れを説けり。故に

顯教を所寄齊と云ひ、眞言行者を能寄齊と云ふ。眞言宗の教相は、顯教の地上二劫の法相と異なりて、三劫は地前に於て經歷すれども、發無漏智以上を以て、劫内に屬する故に、初劫は小乗教の見道以上に寄齊して明す。即聲聞の見修無學の三道と、緣覺と湛寂菩薩と、寂然界の菩薩とに寄齊して、其差別を明すなり。見道にては邪師、邪教、邪思惟の三縁に依つて生ずる所の、無我の眞理に迷ふ。分別起猛利の煩惱、即ち八十八支の見惑を斷じて、人空、不生の眞理を證す。預流、一來、不還の前三果の學人は、任運に有爲の事法に迷ふ。俱生起の煩惱、即ち八十一品の修惑を斷じて、人空、不生の眞理を證す。見惑は猛烈なれども、頓斷如破石の故に、入觀以後敢て休むことなく、十六心を経て、之を斷破し、修惑は優柔にして、漸斷如藕糸の故に、三果を立てて、休息して之を斷ず。聲聞の無學は、修惑の正使即現行の煩惱を斷盡して得る所の果にして、悲想地の第九品の難斷の惑を斷ずる故に、疏に、無學、聖人、所斷、最難斷處と釋す。即ち經の業と、煩惱と、無明となり。緣覺乘の所斷は、見惑修惑の正使を斷ずるは聲聞と異なることなし。其上に少分人執品の煩惱の習氣を侵すを以て異となす。經に株杭と説き、種子と説くは、即ち習氣を云ふなり。

大日經住心品の「拔業煩惱株杭無明種子」の文は、上の「解唯蘊無我等」の句に連續すれば、聲聞の阿羅漢の無間道の所斷と爲す。然る時は、株杭と云ひ、種子と云ふは非想の第九品の修惑を云ふなり。柔弱なると株杭の如く、味略なること種子の如くなる故に、株杭種子と云ふなり。又下に向つて、生十二因縁の句に連續して、縁覺の所斷を説く。然る時は株杭と種子とは、習氣と解すべきなり。一文兩向にして、文巧義妙なることを知るべし。

又湛寂菩薩は、二乗と同じく、人空不生の眞理の一法中に在りと雖も、此人空不生の湛寂の理を悟る時、菩提心の勢力の故に、上求菩提、下化衆生の願を以て自利利他の六度萬行を修す。然れども五蘊の法體、實有を執して、依他の如幻を知らざる故に、尙法執あり。寂然界の菩薩は、聚沫と、浮泡と、芭蕉と、陽炎と、幻との五喻を以て、五蘊等萬有諸法の無自性空を觀察して、諸法の即空に通達し、一重の法執を解脱するを以て、漸く二乗の境界を出過せり。然れども但知六識の分齊にして、七八二識を知らず、所證の眞理は、人空不生の理を超えざる故に、初劫に屬す。若し能寄齊の眞言行者に約すれば、一重の龜妄執を斷ずる位にして、即ち一阿僧祇劫を超ゆるなり。

寂然界を證する時に、漸く聲聞縁覺の二乗の境界を出過すと雖も、未だ因縁所成の諸法は、心の所變にして、如幻虛假なる理を知らざるに由つて、人空、法空俱に有を捨て、偏空の眞理を證する故に、尙初劫に合論するなり。

第二劫より以上は、大乘なり。第二劫に他縁乘と覺心乘との二心あり。先づ他縁乘とは、現流の宗に當つれば、即ち法相宗なり。此宗は阿頼耶識と、末那識と、第六意識と、眼耳鼻舌身の五識との八識を建立して、宇宙の萬有は、悉く第八阿頼耶識の所變と爲す。識變の一切法は、有に似て有にあらざり、因縁成の法は、無自性なる眞理を觀じて、第二重の人法二執を斷じて、人法二空の無我の眞理を證し、一切衆生を見ること自身を視るが如くなる、同體の大悲心に催せられて、大誓願を發起して、他の一切衆生を緣じて、或は折伏、或は攝受、利他方便の萬行を修して、平等に此の乘に入らしめんと期す。故に他縁乘と名く。又三界は唯心なり。心外に一法の縁ずべき物なしと觀察し、自利の行を圓滿して、大菩提を證する故に、無縁乘と名く。此心は、大乘の初門なる故に、三乗の定性と、三乘不定性と、無性有情との五性は、永く各別なりと立て、二乗の定性と、無性有情とは、永く成佛することを得ずと云ふ。又遍計



所執性と、依他起性と、圓成實性との三性を立つ。凡夫妄想の所見、即ち當情現の相（繩を蛇と見、枝垂れ柳を幽霊と見る等）を、遍計所執性と云ふ。是れ則ち空無を性とす。他の因縁に依て生起する有爲法を、依他起性と云ふ。是れ即ち如幻を性とす。謂く有に似て有にあらざるなり。凝然として常住不變なる眞如は、過恒沙の諸の功德を圓滿成就して、其體如幻虛假にあらざる故に、圓成實性と云ふ。此を三性と名く。此三性の上に於て、三無性を立つ。遍計は空無の故に、依他起性は、無自性の故に、圓成實性の眞如法性の上には、人法二執なきを以ての故に、又中道を説くに、依他と、圓成と、遍計と三性對望して、中道を立つ。謂く遍計は非有なり。依他圓成は非空なり。即ち三性對望して、非有非空の中道なり。此れを三法中道と云ふ。又三性各別にして、中道を説くことあり。此を一法中道と云ふ。又此心は第八阿頼耶識を以て、宇宙縁起の根本として、眞如縁起を許さざるなり。次に覺心乗とは、現流の宗旨に當つれば、即ち三論宗なり。此心は自心の本來不生不滅にして、前際もなく後際もなき旨を覺る故に、覺心不生と云ふ。心の不生不滅とは、即ち眞如實相なり。此心は本覺眞如が、無明の縁に隨つて、宇宙を生起する故に、宇宙間の萬有は、皆

無明の相なり。無明滅すれば、宇宙は空無相にして、唯眞如の理のみ獨存すと立つ。又眞如を以て、佛性眞識と立つる故に、一切衆生、眞如の周遍せざる所なき故に、且らく分位の五性を立てざるには、あらざれども、一性皆成を宗とす。以上の二心は、淺深異りと雖も、共に三大阿僧祇劫を経て、人法二執を斷じて、漸く成佛するを以て、三乗教の分齊を出でず。若し能寄齊の眞言行者に約すれば、一重の細妄執を離るゝを以て、第二劫と名くるなり。

第三劫は、大日經には能寄齊の眞言行者に就きて之を説く。故に初二劫とは、其趣を異にす。隨つて疏も亦眞言行者に約して釋す。此れ他に理由あるにあらず。印度に寄齊すべき顯教なきを以てなり。此劫に空性心と極無自性心との二心あり。先づ空性心とは、行者即今所縁の境に引かれて起る所の、刹那の妄心、即ち本不生際に住して、等虚空の性なりと觀する位なり。一念の妄心既に、本不生際に住する故に、宇宙の萬有も亦本不生際に住すと觀ず。此を皆入阿字門と云ふ。即ち心實相の智を以て、心實相の理を證するに、冥然として不二なる故に、經に無相無境界と云ふ。若し高祖の意に依て、現流の宗に寄齊して釋せば、即ち天台宗に寄齊して

説くことを得べし。又更に進んで、萬有諸法は、少分も因縁より生ぜざるものなし。因縁より生ずるものは、皆自然の性なし。其無自性の所即ち阿字本不生際にして、自心の實相なりと觀ずる位を極無自性心と云ふ。若し高祖の意に依て現流の宗に寄齊して釋せば、華嚴宗に寄齊して釋することを得べし、以上の二心は、第三の極細妄執能越の心なり。顯教は初劫人執、後二劫法執と立つれども、眞言宗にては、三妄執は、元來一惑の龜細なるを以て、人法二執は三妄に通涉すと立つ。又眞言行者は、最初發心より孔月の觀を修し、三密の行を行はずと雖も、三劫の位は地前にありて、相似比觀の故に、遮情の觀を本とすべし。又三妄に、同時斷異時斷等の法門あれども、後に釋すべし。

## 四、十地

十地とは歡喜地、離垢地、發光地、焰慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地なり。此十地に於て、密教に於ては、本有無垢の十地と修生顯得の十地とありて、其本有無垢の十地は、即ち一切衆生、本有の淨菩提心に具足する所の無量の功德を、十箇に分辨して、之を開示す。十は無盡の義を顯す。高祖の釋に、初地を釋して、初は

本初心は心地とあるは、即ち本有の十地の初地を釋し給ふなり。此十地は、本有の故に横平等にして、無高下なり。修生顯得の十地とは、眞言行者、三妄執を斷じて、後に三密の妙行に依つて、自心本有の十地の功德を修し顯すを云ふ。此修生顯得の十地に於て、有惑と無惑との二種の十地あり。無惑の十地とは、龜、細、極細の三妄執を以て、一切の惑品を攝し盡す義にして、十地に於ては、斷すべき惑品なき故に、無惑の十地と云ふ。然るに眞言行者、既に三妄を斷盡すと雖も、更に十地を修すること、は、初地に登つて自證圓極すと雖も、未だ化他の業を修習せざるを以て、十地は次第に分證して、之を修習す。故に十地は尙因位に屬す。此は大日經疏の法相なり。有惑の十地とは、三妄執の外に、微細妄執を立つる説にして、地前に於て三妄を斷じ、更に佛地の一障なる根本無明、即ち微細妄執の作用を十箇に分ち、十地に於て之を分斷し、佛果の金剛心に於て、其法體を斷じて、菩提を證する故に、十地に於て所斷の惑あり。之を有惑の十地と云ふ。即ち大日經住心品の、此四分之一度於信解の文を、此の四分が一を信解に度すと訓讀する義にして、即ち高祖の祕藏記の意なり。又三劫を超えて、正に初地に入らんとする入心の前半刹那を、初法明道と云ふ。曠

劫以來、初めて諸法の眞理なる菩提心を、明かに覺る智慧の道を得たる位なり。其後半刹那を除蓋障三昧と云ふ。既に眞淨の菩提の眞理を證知する故に、此智光に照されて、初地の入證を障礙する、一切の惑品を斷除するを云ふなり。明來暗去の理なる故に、其實は證理斷惑は同時なれども、且らく前後を分て其差別を知らしむ。

## 五、三劫と十地

三劫と十地との建立に就いて、三劫は顯密對辨して、能所寄齊を云ふ。之に正兼の二意あり。正しくは、眞言行者の漸機は、地前に最初發心してより、入壇灌頂等の三密の行を修し、三妄執を斷盡して、初地淨菩提心に證入す。此淨菩提心地前の最初發心より、初地に至るまで、次第に増明する様を、顯教の斷惑證理に寄せ齊めて之を顯す。眞言行者の淨菩提心に、遮情表徳の二ある中の、遮情の邊を寄齊して之を明す。兼ては三劫に於て、寄齊を論ずるは、迂回の機を攝せんが爲めに、從顯入密の義を示すにあり。然るに十地は對待を出過して、能所寄齊を離れて、表徳の實義を證する位なり。

## 六、十六大菩薩生

大日經宗は、地前に三劫の次位を建て、地上に十地の階位を立て、以て行者進趣の階級を示すことは、住心品に明す所の如し。然るに金剛頂宗は、直修直入直證直滿を旨とする故に、地前に次位を建てずと雖も、地上に十六大菩薩を立て、以て行者進趣の行位と爲して、其差降を示す。十六大菩薩生とは、東方發心門に、金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛喜の四菩薩あり。南方修行門に、金剛寶、金剛光、金剛幢、金剛笑の四菩薩あり。西方菩提門に、金剛法、金剛利、金剛因、金剛語の四菩薩あり。北方涅槃門に、金剛業、金剛護、金剛牙、金剛拳の四菩薩あり。行者此十六大菩薩の三摩地に住して、因行證入の四轉を修滿し、第五の方便究竟の果を證す。十地十六生の法相異なるに似たりと雖も、其實は開合の不同なり。之に就いて、古來二傳あり、一傳の意は、薩王愛喜の四菩薩を以て初地に配し、寶菩薩を第二離垢地に配す。寶明徹して微細の垢もなき故なり。光菩薩は第三發光地なることは知るべし。幢菩薩は第四焰慧地に配す、如意寶珠幢上に在て、殊に光を發する故なり。咲菩薩は第五難勝地に配す。眞俗の兩智行相の相違するを合して相應せしむる故に、笑ふなり。法利の二菩薩は、第六現前地に配す、最勝の般若を現前せしむる故なり。因語の二菩薩を、

第七遠行地に配す。遠く二乗の道を出過し、二乗の僻見を斷ずる故なり。業護の二菩薩は、第八不動地に配す、煩惱も動ずること能はざる故なり。牙菩薩は、第九善慧地に配す。四無礙辯は、牙齒に依るを以てなり。拳菩薩は、第十法雲地に配す。法身充滿して、如來の三密に持する故なり。以上は、興教大師の兩界愚案抄の説なりと傳ふ。又一傳の意は、初地は因の句にして、薩王愛喜の四菩薩に配す。金剛薩埵は、十界平等の菩提心、常住堅固にして、不退不動なる故なり。王菩薩は、菩提心は、衆生と佛と平等なる極際に住して、能く一切法に自在主となる故なり。愛菩薩は、一切衆生を視ること、己身の如く、一子の慈悲を垂れて衆生を憐む故なり。喜菩薩は、本有菩提心を開發して、大歡喜を生ずる故なり。又第二地、離垢地を寶菩薩に配す。寶體明淨にして無垢なる故に、第三地を發光と云ふ。故に光菩薩に配す。寶は淨菩提心の性に、萬徳を具する義なり。光は淨菩提心智の光明なり。第四を焰慧と云ふ。故に幢上の珠の光に配す。第五を難勝地と云ふ。三昧成就して、眞俗二諦の邊を超越するを以て、幢の高出に配す。第六地を現前地と云ふ。般若の智現前する故に、歡笑す。故に笑菩薩に配す。又第七地を遠行地と云ふ。方便満足して

二乗の空執を離れて、物を雨らして衆生を救濟するに、衆生も歡笑し、自らも亦笑ふ。故に六七の二地を以て、笑菩薩に配す。以上を以て根の句とす。第八地を不動地と云ふ。純無漏相續にして、煩惱の爲に、動搖せられざる爲め、文殊の利劍能く煩惱を斷ずる故に、利菩薩に配す。故に第八地は法利の二菩薩に配す。第九地には、心自在を得て、四無礙智を以て能く説法して、法輪を轉ずる故に、轉法輪智の因菩薩に配す。語菩薩は、外用の言語を主る故に、因菩薩は、内證、語菩薩は、外用なり。故に因菩薩を第九地に配す。第十法雲地は、業菩薩は、自利利他の事業を主り、護菩薩は、十力四無所畏の法を觀察す。無畏は、即ち護の義なり。牙菩薩は、大法を演説して、一切の魔障を摧伏す。拳菩薩は、拳は能く諸佛の智法海を執持する故に、北方の四菩薩を以て、第十地に配す。又八九十の三地を、方便究竟と爲す。

### 第十七章 過患斷と功德斷

顯教の斷惑を、過患斷と云ひ、之に對して、密教の斷惑を功德斷と云ふは、眞言一家の常談なり。顯教は一切の煩惱妄想を、情有の惑とす。情有とは、凡夫の迷情の上

に有りと認むる煩惱と云ふ意なり。故に顯教にては、兩一乘と雖も、過患と見て、始覺の智を以て、能對治の行を修して、離斷する故に、始覺門の斷にして、情有斷、過患斷なり。眞言宗は、一切の煩惱妄執を、理無の惑と立つ。理無とは本覺眞如の理の上には、煩惱と認むべきもの無き煩惱と云ふ意なり。本覺門の前には、惑智共に本不生際に住して無相なる故に、融會無礙にして其實は斷ぜらるべき煩惱もなく、亦能く斷ずる智もなく、平等にして、悉く本覺本有の菩提心の功德と照す。故に本覺門の斷にして、理無斷、功德斷なり。釋論第三に曰く、雖復名覺、即是不覺故、者、即是顯示、熏離俱相、所謂覺知滅相之法、實是過患、彼滅相品不作滅事故、言熏離、彼滅相品無始、已來體性清淨、實是德、不知不覺、故言熏俱、此釋を以て、功德斷は本覺智斷なることを知るべし。其本覺斷の相は、釋論第五に曰く、次說本覺對治次第門、謂本覺智、根本無明爲始、滅相爲終、如其次第、漸對治故、然此中斷不捨無明、以爲其斷、非以斷除而爲斷故、若爾、云何斷、義成耶、謂斷煩惱、心斷除不起、故是名本覺治道、次第と、大日經疏第一曰く、因淨菩提心、照明諸法、故小用功用、便得除蓋障三昧、見八萬四千煩惱、實相、成八萬四千寶聚門と、大師の梵網經開題に曰く、本淨、則心王、體性、塵垢、則心數、本名、三毒五慾、皆是

佛之密號名字、若能得此意、則不著染淨、不驚善惡、作五逆而忽入眞如、起大欲而乍得法身と。

### 第十八章 五智、四身

上に明す所の機類の發心修行に由つて、一生即身に得る所の果は、五智と四身となり。五智とは、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、法界體性智是なり。第八阿頼耶識は、因位にありては、染淨等の種子を含藏して、一切法の現行を生ずるを以て、果位に至つて、轉じて大圓鏡の如く、一切の諸法を照らして、其影像を現するの智と成る。故に喩に隨つて、大圓鏡智と名く。因位の第七末那識は、我癡、我見、我慢、我愛の四煩惱と相應して、任運に常に我他彼此の差別を執す。此執の爲めに、第八識も染汚せられ、前六識も染汚せらる。然るに果位に至つて、轉じて一切法の平等性即眞如實相を緣する智を得る故に、平等性智と云ふ。第六意識は、因位に在りては、有爲無爲等の一切法を緣じて觀察する故に、果位に至つて、轉じて妙觀察智と成つて、妙に所化の機類を觀察して、說法談義す。前五識は、因位に在つては、現量に五塵の

境界を縁取して所作を成ずる故に、果位に至りて、轉じて化他の所作、化他の事業を成辨する智と成る。故に、成所作智と云ふ。佛に配すれば、大圓鏡智は東方阿閼佛、三昧耶形は五鈷或は獨鈷種子なり。平等性智は、南方寶生佛、三昧耶形は三瓣寶珠、種子亦なり。妙觀察智は、西方阿彌陀佛、三昧耶形は開敷紅蓮華、種子亦なり。成所作智は、北方不空成就佛、三昧耶形は十字羯磨種子亦なり。第九識は、因位に在りては諸入識の總體なり。八識は、第九識が上の別作用なり。果位に至つて、轉じて世間出世間等の一切法の體性たる智となる。故に法界體性智と名く。佛に配すれば、中央大日如來、三昧耶形は五輪塔、種子亦なり。而して法界體性智は、四智四佛の總體なり。故に合すれば一の法界體性と成り、開けば即ち大圓鏡智等の四智となる。斯の如くの五智は、五智に亦五智を具し、其五智に復五智を具して、重々無盡無際なり。佛果の位に至つて、所見圓極して顯得する所の五智なるを以て、修生なりと雖も、吾人本有の菩提心の上に、自ら理智有つて、其五大が靈照を名けて五智と爲す。故に本有の修生にして、常途顯教に同じからざるなり。

四身とは自性身、受用身、變化身、等流身なり。十法界の萬有諸法の、自然體性たる

身なる故に、自性身と云ふ。即ち理法身なり。受用身には自受用身と、他受用身の二あり。自受用身とは、大悲を離れずと雖も、大智を本として、自ら過恒沙の萬德を受用し、自受法樂する身なり。他受用身とは、大智を離れずと雖も、大悲を本として、初地以上の菩薩の爲めに、色究竟天に俯同する、最高大身を現じて說法する身なり。他の機類の爲に受用せらるゝを以て、他受用身と云ふ。地前の菩薩、二乗等の爲めに、或は淨土に於て、分段同居土に於て、丈六等の小身を變現し、化作して、之を攝取するを變化身と云ふ。又菩薩、二乘、天龍八部等の九界に等流類なる身を現じて、應機攝物に障礙なきを等流身と云ふ。然るに此四種身、自性會曼荼羅に在る位は、未だ親しく機に對せざる故に、即ち四法身なり。故に瑜祇經に曰く、以五智所成四種法身於本有金剛界不壞金剛光明心殿と。是本有なりと雖も、五智共成の四種法身なる故に、即ち是行者修顯の體具の四身も亦爾なり。二教論に「横即自利」と判じ、金剛頂の開題に「四種法身共陳此道」と釋し給ふは是なり。此四身の中に於て、他受用變化等流の三身を加持世界に派して、三劫十地の機を益す。彼等は迷に隔てられて、加持世界の自心現の影像を拜して、直に自性會の尊を拜すること能はざる故に、

四種却て法身と稱す。

### 第十九章 教門と觀門

教門とは即ち教判門なり。姑らく遍計所執の捨と不捨とに就いて之を釋すれば、眞言宗は本覺門の宗旨なりと雖も、轉迷開悟の義を存する故に、開悟の日には、緣起の諸法の上に在る隔歴の迷相は捨斷すべきなり。然らざれば、何ぞ常没の凡夫と異ならむ。本有の淨菩提心に即する迷を無明と云ひ、心外の境を所執と云ふ。境の上の隔歴不融の相を、無始の間隔と云ふ。義門に約して、三の異なるに似たりと雖も、其法體は却つて一なり。迷時には、之に依て惡業を造つて身心を惱亂し、非愛の果を感じて大苦惱を受くと雖も、眞實の知見を得て、還て此隔歴不融の相を見れば、融通無礙にして、其體都無なれば、覺悟の前には自ら捨斷せらるゝなり。之を以て所執を捨すると判するなり。行者成佛の時は、所執自ら去る故に、所執は捨するものと教門を以て判決するを教門と云ふ。觀門とは行者、實修實行の觀心門なり。觀行門の前には、直に凡夫の煩惱具足の當體を拉して、毘盧遮那の己體と觀ず

る故に、強ひて所執を遮する觀相なし、故に所執不捨と云ふべし。然れども、覺悟を得るの曉には、所執存せざる故に、之を脇より見て、教判して捨と云ふなり。此を教觀二門の別とす。

### 第二十章 實證と教道と即順常途

且らく有相劣慧の機に就て釋せば、地前に於て相似比觀の日月の觀を信修して、龜、細、極細の三妄執を超度して、初地に入證するは、實證と云ふ、大日經疏に、第八地の三味道を以て、八地の沈空を驚覺すと釋するが如きは、教道門の釋なり。何となれば、密教の十地に於ては沈空の義なき故に、顯教の人を引攝する教道の方便に施設する故に、沈空を談ずるは、顯教に隨轉すと雖も、第八地の大空三味は密不共の故に、即順常途にあらざるなり。斯の如き等を教道門と云ふ。又經疏等に地上二劫を説くは、即順常途なり。又古來、教道門に實義の教道と、即順常途の教道とありと云々。

### 第二十一章 安心決定と教力殊勝

行者が阿闍梨の方便開示に依り、自ら深く自身即ち毗盧遮那の眞理を信じて、信心決定し、凡聖不二の本有の大菩提心に安住すること堅固不動にして、法則を虧がず、如説に修行し、三密加持に由つて悉地現前して、遂に成佛するを安心決定門と云ふ。又現世に四重、八重、五無間罪、毀謗三寶等の諸の罪を造つて、死して三惡趣に墮落し、斷じて出離の縁なき惡衆生は、受苦無量なる故に、三惡趣には、見佛聞法の縁なくして、自ら發心修行する事なしと雖も、或は光明眞言加持土砂散布の力に依り、或は隨求陀羅尼、寶篋印陀羅尼等の力に依つて、知らず／＼の間に惡趣を解脱して、淨土に超生する等は、教力殊勝門なり。宗家問答釋に云く、深祕門者、法力勝故、此生令得超昇佛位と。此、教力勝に悲門と智門との二あり。三途受苦衆生を救濟するは、悲門の教力勝なり、光明眞言加持土砂等の如し。二乘の既に無餘涅槃に入りたる既死の人、及び闍提必死の人を救度するは、智門の教力勝なり。其人證は、金剛頂大隨求陀羅尼經所説の俱縛婆羅門の因縁の如し。

### 第廿二章 三密具不具

眞言行者の大途に就いて云へば、身口意の三密具に之を行じて成佛すべしと雖も、機根萬差なれば、或は二密、或は一密を行じて成佛する機類なしと云ふ可からず。印契、眞言、亦斷惑證理の力用あるを以てなり。若し三密具に修するにあらざれば、成佛すること能はずと立つれば、萬機普益の金剛乘に、一密或は二密の機を漏らすの失あり、これを如何すべき。故に興教大師の五輪九字秘釋に曰く、凡即身證得大覺位處之行別略有四種、所謂深智相應印、明行、事觀相應結、誦行、唯信作印、誦明行、隨於一密至功行。第一行者、內證甚深智慧皆悉相應具足、能修行、印、明行、而即身成佛故。第二行、雖無深智觀慧、懇懃手結印、口誦明、於字印形三種之中、隨觀修一事、即身成佛故。第三行、雖無如上二種智觀、唯深信解、應結印、誦明自然、頓成佛故。第四行、設無餘二行及廣智、唯觀一義、解一法、至心修行、故即身成佛、故設且無一法智慧及餘二行、唯以信爲門、觀一字形成佛、觀一印形、三昧耶形成佛、觀一尊形相之一相、而成佛、及無餘行、唯誦一明一字成佛、并結印契、且無餘密行、唯相應、必定、即身成佛、故總云爾也。但し正しく成佛する一刹那は、前に一密二密等を修したる不思議の加持力に依つて、忽に餘の一密二密等を生じて、三密具足して成佛するなり。故に三密具不具は、佛果の金剛



心以前の因行に於て、談ずることなりと知るべし。

第廿三章 三妄執と四妄執

大日經住心品に云く、秘密主一二三四五再數凡百六十心と。疏に云く、由有無明生五根本煩惱」と根本煩惱とは、貪、嗔、痴、慢、疑なり。眞言の宗義は、五見は末惑にして根本にあらず、無明と五根本の惑とは、一拳五指の如くなれども、其位に由つて別を爲す。此五根本の惑を、五回再數すれば百六十心と成る、其百六十心の中に於て、最危なる者を以て、危妄執と立て、其百六十心の微細なる者を以つて細妄執と爲し、其百六十心の極めて微細なる者を極細妄執とす。其惑體は惣じて人法二執分別俱生に通じて簡ぶ所なし。常途の初劫人執後二劫法執に同じからざるなり。大日經疏の意は、三妄を以て一切の惑品を該攝する故に、此上に更に第四妄執を立てざるなり。故に疏の意は、十地は絶対無惑なり。宗家は極細妄執の中より、更に佛地の一障なる根本無明を開いて、第四の微細妄執と爲し、其用を十箇に分ちて十地に分斷し、其體を佛果の金剛心除蓋障三昧の位に之を斷盡して、成佛すと立て給ふ。

是れ宗家秘藏記の意なり。案ずるに、疏は初地即極の機を本として、三妄を以て盡し、宗家は地上分證の機に依つて、第四の微細妄執を建立し給ふなり。

### 第三編 密教の事相

#### 第一章 野澤十二流

南池院源仁阿闍梨に歸投して灌頂を受けたる弟子尠からずと雖も、中に於て益信聖寶の兩師を以て正嫡附法の資と爲す。兩師共に兩部灌頂の極秘を傳へ、一多法界の秘璽を承けて法源窮めざるなく、蘊奧徹せざるなしと雖も、時機に感ずる所ありて、益信は胎藏法を表とし、一法界を本として、初胎後金に灌頂を行じて廣澤方の祖と成る。聖寶は金剛界を表とし、多法界を本として、初金後胎に灌頂を行じて小野方の祖と成る。廣澤方は益信、寬平法皇光孝天皇第三王子(寬空、寬朝、廣澤遍照寺、濟信、性信親王)三條院第四王子大御室寬助と相承せり。仁和寺成就院寬助大僧正に從つて灌頂を受け、傳法せし資頗る多かりしと雖も、中に於て六人を以て上足と爲す。其六人を祖として廣澤六流は起るなり。

- 覺法親王 白河院御子……………仁和御流祖
- 聖慧親王 白河院御子……………華藏院流祖

#### 寬助

- 信證僧正……………西院流祖
- 寬遍僧都……………忍辱山流祖
- 永嚴僧都……………保壽院流祖
- 覺鑲上人……………傳法院流祖

此を廣澤六流と云ふ。中に於て傳法院流を除くの外は、共に一法界を以て極位とする故に、宗極に於ては、異義あるにあらざれども、行軌の作法に多少の相違あると、解釋に多少の異點あると、附法の資社を爲せしとを以て、流派を成立せしめたり。傳法院流は、多法界を以て宗極と爲せり。何を以て之を知るかと云はゞ、寬助大僧正より鑲上人に授けられたる灌頂五重の印信明かなるを以てなり。西院信證僧正所傳の五重と對照せば、思半に過ぐるならん。廣澤方の中に多法界を以て宗極とするは、唯傳法院のみなり。之れを以て案ずるに、澤方は、一法界を本とすと雖も、益信より寬助に至る迄、一多法界の密印併せ傳へしこと明なり。澤六流の支流は三十六流を成せりと傳ふ。又性信親王附法の寬意阿闍梨は、觀音院流を起し、南山常喜院の心覺阿闍梨は、天台より入密して此流を相承し、終に常喜院流を立てたり。

又野山持明院の眞譽阿闍梨は、寛助に従つて傳法し、持明院流を起せり。此等は澤六流の外にして、支流にはあらざるなり。斯の如く分派すれども、皆寛助大僧正の下に於て受法せし故に、聖教及び灌頂の式等は通用することを許せり。即ち七卷鈔、澤見、澤鈔、甲乙澤見、三卷式等の如きは是なり。小野方は聖寶、觀賢、淳祐シユンキョウ、元昊、仁海、小野曼茶羅寺の祖、成尊セイソンと次第相承し、成尊に出でたる二人の上足附法の資は、小野流と醍醐流との祖と成れり。



聖賢……………金剛王院流祖

以上を醍醐三流と云ふ。惣合して小野六流と稱す。小野三流は、祕密の極位に至つては、大同なりと雖も小異なきにあらず。又甲乙相互に傳へざる密印等あると、行軌の作法に不同あると、受法の資社を爲せしとに由つて三流に分れたり。又醍醐三流は、祕密の灌頂に於て、豎に三重を立て、第三重の大不二を以て宗極とするは同一なりと雖も、甲乙相互に傳へざる祕訣あると、行軌の作法の異點あると、附法の資社を爲せしとに由つて、遂に三流に分れたり。小野六流にも、支流は三十六流ありと傳ふ。又野山の明算メイサン上人、小野成尊に従つて傳法して、終に一流を起せり。此を中院流と云ふ。小野六流の外にして、支流にあらざるなり。

更に十二流の宗極を概括するに、  
 醍醐……………多法界  
 廣澤……………一法界  
 小野……………一多不二

澤六流は、胎藏の理を能入の門とし、金剛の智に達して、五智圓滿する義を示すも

の、初胎後金に灌頂を行ず。醍醐三流は、金剛界の智を能入の門とし、胎藏の理を修證し、本覺に會する義を示して、初金後胎に灌頂を行ず。小野は理智不二を宗とすれども、大師の大唐青龍寺に於ける六七兩月の灌頂を模範として、初胎後金に灌頂を行ずるなり。又廣澤の名は、寛朝僧正より起り、小野の稱は仁海僧正より起れり。斯の如く、事相の祕密に於て分派すと雖も、一塊の金の摧けたるが如く、一枚の錦の裂けたるが如くにして、何れか金にあらざる、何れか錦ならざらん。之に依て、如説に修行すれば、即身成佛疑なきものなり。又漸次に末に至つて分派するは、自然の勢の然らしむる所なりと雖も、亦時機に投ずる方便上、止むを得ざるに出でたるものなり。

因に云く、天台の密教に於て、初金後胎の灌頂なきにはあらざれども、其多くは初胎後金なるは、胎藏法を以て述門の曼荼羅とし、金剛界を以て本門の曼荼羅とする故に、述門より本門に歸入するの義を表して、初胎に行ずるなり。

第二章 十指異名

左手					右手				
大指	頭指	中指	無名指	小指	小指	無名指	中指	頭指	大指
空	風	火	水	地	地	水	火	風	空
眞	力	願	方	孔	孔	戒	忍	進	禪
智	定	念	進	慧	信	進	念	定	慧
慧	蓋	光	高	勝	勝	高	光	蓋	輪
禪	精	忍	戒	壇	壇	方	願	力	智
識	行	想	受	色	色	受	想	行	識

(不空傳)

(無畏、金剛智傳)

又左右の手を次の如く、乃ち金剛頂略出經には止觀と説き、大日經には定慧と説き、準提經には福智と説き、尊勝軌には權智と説き、槍尾口訣には智福と釋せり。又二手を二羽と云ひ、二翼と云ひ、日月と云ひ、掌中を月と云ひ、左右の十指を十度と云

ひ、十峯十輪等と云ふ。又五指を以て大指頭指等と名くるは、攝真實經及大日經疏等の説なり。地水等の五大に配するは、大日經疏及び無畏尊勝軌等の説なり。俱ろて我に配するは、攝大軌の説なり。十指を十波羅蜜に配するに就て、無畏、金剛智の傳は、略出經第一及び大日經疏第十三に出でたり。不空の傳は、蓮華部心軌及瑜伽護摩軌等に出でたり。信進等の五根に配するは、大日經并に阿闍軌に説けり。輪蓋等の五佛頂に配するは、奇特佛頂軌并に藥師儀軌に説けり。五蘊に配するは、毗沙門天王軌に説けり。又攝真實經には、大指を大指とも説けり。二頭指を、略出經には、金剛指とも説き、隋羅尼集經には、食指とも説けり。是れ十指の異名は、立印の大歸なり。須く之を知るべし。

### 第三章 十二合掌

第一、堅實合掌、掌を合せて中心堅く相著け、十指の頭を稍々相離して、少し計り之を開け。

第二、虛心合掌、十指齊等にして、指頭を相合せて、掌の中心を少しく相著けざるな

り。

第三、未敷蓮合掌、前の如くして、掌内を空にして、稍穹からしむべし。

第四、初割蓮合掌、二地二空並へて相著け、餘の六指散して開敷せしむるを云ふ。即ち八葉印の如し。

第五、顯露合掌、兩掌を仰ひけて相並べ、共に上に向くるを云ふ。

第六、持水合掌、兩掌並べ仰ひけ、十指の頭を相著け、稍屈して之を合せて、水を掬する状の如くすべし。飲食印に似たり。

第七、歸命合掌、掌を合せて十指の頭、右を以て左に加へて、相又へて金剛合掌の如くすべし。

第八、反又合掌、右を上にし、左を下にして、兩掌の背を合せて、十指の頭を以て、相絞ふ。亦右の指を以て左の指に加ふべし。

第九、反背互相著合掌、左手を覆せ、右手を仰ひけて、左手の上に置く、稍定印の相に似たり。

第十、横柱指合掌、兩掌を仰ひけ、二中指の頭相接して之を仰がしむ。

第十一、覆手向下合掌、兩掌を覆せて伸し、亦二中指を以て頭相接くるなり。  
第十二、覆手合掌、兩掌を並べ伸べ覆せ、二大指を以て、並べて相接け、十指の頭を外に向くるなり。

#### 第四章 四種拳

第一、拳を爲て、大指を外に出して、豎つるを、蓮華拳又胎拳と云ふ。  
第二、大指を以て、掌中に在て之を拳るを、金剛拳と云ふ。  
第三、二手又へ合せて、拳を作つて十指の頭を外に出し、現はすを、外縛拳と云ふ。  
第四、十指を以て相又へて、十指の頭を掌内に在らしむるを、内縛拳と云ふ。  
以上の十二合掌四種拳は、大日經疏第十三の説なり。

#### 第五章 灌頂儀式

且く醍醐傳に依れば、我高祖大師入唐歸朝の後、本朝に於て行ひ給ひし灌頂の儀式は、全く大唐青龍寺に於て入壇せし儀式作法に依つて修行し給へりとなせり。

是を以て、或は金剛界の一界を修して兩部の灌頂を授け、或は胎藏法の一法を行じて兩部の灌頂を授く。即ち是れ、兩部は本來不二にして、胎藏法曼荼羅に、全く金剛界の九會を融して、因果相即、理智不二なり。金剛界曼荼羅に全く胎藏法の十三大院を攝して、十界の當相を壞せずして一佛界に歸す。是故に、或は金、或は胎、一界を行して兩部の灌頂を授くるなり。此式、師資相承して、延命院元杲僧都に至れり。然るに元杲僧都世澆く機劣にして、唯一界のみを行じて兩部を具足するは、其堪ふる所にあらざるなき歎を鑑み、且つ庸流に對して、不二の深意を露骨にせんことを憚り、又末世の下機、其深意を知らざるに、一界を行じて兩部を授くるは、却つて疎略にして容易の事なりと誤解せんことを慮り、初めて從來の式を變じて、具支灌頂一夜の式を製作せり。兩部を分つと雖も、一夜の間に之を修して、初夜後夜を分たず、先づ金剛界を修して受者を引入し、投華灌頂して金の祕印明を授けて、後寶冠のまま壇の側に住して念誦せしめ、金の供養法畢つて中間呼摩を修し、次に胎藏法を修して後、内道場に於て、寶冠のまゝ覆面せしめ、投華灌頂金界の如くす。此を具支灌頂一夜の式と云ふ。爾來相承して、三寶院勝覺に至る。勝覺亦兩部を一時に行し

て不二の眞理を顯はにすることを憚り、更に其儀式を一變して、初夜、後夜と引き分け、兩回に供養法を修して、兩回に受者を引入し、兩回に灌頂を授くる事となせり。故に上古の儀式は、一部を行じて兩部を授け、中古の作法は一夜に行じて兩部別あり。末代の儀式は兩部を初後に分つて之を授くと雖も亦一夜の間なり。儀軌本經の説相に依れば、七日作壇の曼荼羅を起立し、第七日の夜に於て灌頂を行じ、明相の現ずるを期して破壇し、流水に投ずる儀式なる故に、一夜に兩部の灌頂を行じ、或は初後夜に兩部灌頂を行ずる等の式なし。然るに今の初後夜の式は、或は初胎後金、或は初金後胎等、廣澤、小野、醍醐各其趣きを異にすと雖も、傳法の阿闍梨、其時機に投ずる方便にして、共に不二の源底を披瀝するものなり。爾來野澤十二流、美を蘭菊に競ふと雖も、初後夜を一夜の間に行ずるを以て定式となせり。

又廣澤の傳に依れば、六帖重書の作者に就いて、相承の口傳ありと雖も、傳法灌頂初後の式を以て、弘法大師の御作とするを正傳と爲し、青龍寺の六七兩月の灌頂を以て、即ち傳法灌頂と傳ふ。故に傳法灌頂は、本來兩回に修法し、兩回に引入し灌頂するを以て、相承の實義と爲せり。是れ廣澤の所傳の、小野に異る所なり。

斯の如きの異ありと雖も、野澤諸流、何れも七日作壇の曼荼羅にあらざる故に、秘曼荼羅品所説の祕密壇の灌頂なることを知るべし。又灌頂入壇の前方便たる三摩耶戒の儀式に就て、小野醍醐の所傳の如くなれば、兩部灌頂に通涉して一回なるべきなれども、若廣澤の傳の如くならば、三摩耶戒は、胎金別々に行ずるを以て本儀となすべし。何となれば灌頂本來兩回なるが故なり。

因に台密灌頂の要略を述べれば、(三昧流)

第一日黄昏略壇を以て兩部許可灌頂を修す。(傳法灌頂以前に授くべき學法灌頂ならん歟)夜に入つて取水淨人、松火を振つて道を案内す。大阿闍梨、受者、職泉同行す。闍伽井に至つて阿闍梨取水の作法の間、職泉、諸天漢語讚を奏す。聲明の聲は、千年の檜杉の間を綴り、霧々たる夜氣と共に、殊勝の感、一層受者の胸に徹すべし。歸院後受者案内に引かれて戒場に入る。大阿闍梨、職泉等列坐す。是に於て、今日迄所犯の罪惡を露骨に懺悔逐一せしむ。最後懺悔の文を授く。第二日午前、三摩耶戒法要、午後胎藏傳法灌頂、第三日午前、金剛界傳法灌頂、以上兩部各壇而二の灌頂なり。同日午後、兩部合壇不二の灌頂、蘇悉地をなす。委細は口

授に譲るべし。

## 第六章 灌頂種類

抑々密教所傳の灌頂の作法規則は、曩昔印度に於て輪王太子の位に昇る時、四大海水を汲み取つて灌頂したりし風俗に由來す。此時未だ輪王の正位に昇り、四海を統御して、政令を布かざれども、其徳は既に内に成就したるが如く、凡夫の行人なりと雖も、此灌頂を受くる人は、未來に成佛して毘盧遮那法王の位を繼承すべきこと決定するものなり。即ち當來成佛の記勅を授くる作法と云ふべし。是れ則ち輪王太子灌頂の作法を應用して、此作法を行じ、以て世間の當相即ち菩提の道なるを示すなり。之を以て世間之淺名顯法性之深號と云ふなり。此灌頂の種類に就て興教大師孔界祕事に依るに、金剛界は五部を法相とするが故に、事業灌頂と、祕印灌頂と、心授灌頂と、光明灌頂と、甘露灌頂との五を説き、胎藏は三部を法相とするが故に、事業灌頂と、祕印灌頂と、心授灌頂との三を説くものなり。事業灌頂とは阿闍梨弟子の爲に、灌頂曼荼羅を起立するに就いて、衆多の事業を起して、緣壇所須の支分

悉く之を辨備し、廣大の供養を行じて、灌頂を授くるを云ふ。こは弟子の資力豊富なる者をして之を行ぜしむ。故に又具支灌頂とも云ふ。即ち現代の傳法灌頂是なり。祕印灌頂とは、弟子信心堅固にして、深く眞言行を樂欲すと雖も、資力乏くして具に緣壇の支分を辨ずること能はざる者の爲に、少供養を辨備せしめて、本尊の祕印を授け、以て灌頂を行ずる作法なり。故に又印法灌頂、手印灌頂とも云ふ。即ち現代の許可灌頂なり。心授灌頂とは、師資共に三昧耶成就の人の所作なり。故に弟子の淨菩提心の上に、曼荼羅を建立して灌頂を行ずるを以て、又以心灌頂、祕密灌頂、心想灌頂とも云ふ。此灌頂は事業灌頂等の如く、心外に曼荼羅を建立するに非ずして、心内の所作なる故に、特に、時方等を選ばざるなり。此を現代の瑜祇灌頂となす。光明灌頂とは、諸佛菩薩光明を放つて行者を加持し給ふを云ひ、甘露灌頂とは、部主の眞言を以て、香水を加持して灌灑するを云ふ。又事業灌頂の中に、結縁と學法と傳法との三別あり。結縁灌頂とは、金剛頂大教王經下卷の所説にして、是器非器を擇ばず、乃至強迫しても曼荼羅に引入投華せしめて、諸佛に因縁を結ばしむる作法なり。其投華の附著せし尊を以て、結縁の佛菩薩等となすなり。此れ毘



盧遮那如來大悲至極の法門なり。次に學法灌頂とは、深く密教を信ずる弟子の爲に、阿闍梨特に曼荼羅を起立して、引入投華せしめ、其所得の尊の三密を授與して、修學し修行せしむる作法なり。故に一に又受明灌頂とも云ふ。弟子位即密教を修學し實行することを許可する灌頂なり。次に傳法灌頂とは、阿闍梨其弟子が三密の法門に於て、修學修行して師位に堪能なるを鑒知して、阿闍梨の職位を許可せんが爲、特に曼荼羅を起立して、引入し投華せしめて師位を許可し、令法久住佛種不斷ならしむる作法なり。此中結縁と學法とは、道俗に通じ、傳法は僧に限るものなり。此外蘇悉地經第三には、本尊灌頂を説き、不空羂索經第九と、大日經疏第十六には、自作灌頂を説き、鬘醜經下には、除難と成就と増益と阿闍梨位との四種の灌頂を説く等、委くは余が灌頂種類義に説きしが如し。

### 第七章 四種法、五種法（金剛頂瑜伽護摩軌等説）

息災、増益、降伏、敬愛を四種法と云ふ。息災とは、梵に代（代）ふことと云ふ。大にしては、天變地異等、乃至小にしては、一己身の病難火難等、總べての災害を止息し消滅す

る法を云ふ。天地の變怪等の大難より、個人の上にある小難に至る迄、斷じて偶然に來るものにあらず、必種因あつて現行す。其種因は他にあらず、我等衆生の身口意の三業に造る所の罪惡の業因なり。業に二者ありて、一期自相續の身を感ずる業なり、此れは人々個々各別にして、我れ他の眼根を受用すること能はず、他我が眼根を受用すること能はず等の故に、不共業と云ふ。山河草木等を感ずる業を共業と云ふ。自他相互に受用することを得るは、自他の業力共合して感ずる所なるを以てなり。此の共不共の惡業を以て、災害を受くるの種因と爲す。而して法身如來寂靜、無爲の三密の加持力に由て、懺悔して此惡業を消滅する法を息災法と云ふ。災害の種因たる惡業消滅すれば、災害は自ら消滅するものなり。決定業は轉ず可からずと説くは、顯教權門の意なり。三密の加持力は、能く定業をも轉滅す。何故に然るとならば、法身毗盧遮那の三密は、常に「本不生際」に居す。之を以て彼の惡業を加持する時は、惡業は加持力に同化して、本不生際に歸する故に、罪惡は自ら轉じて、本不生際の功德と成るなり。蠅熱鐵を緣ずれば、熱鐵ならざるなきが如し。災害の滅する所即ち寂靜なる故に、水大の三昧耶なり。是故に、行法には、壇は水大の

形なる圓壇を用ひ、色法は總て水大の色なる白色を用ゆ。行者は北方に向ひ坐して修法し、又食時臥時等、總て北方に向ふ。北方は日已に没して、夜に入りて寂靜なるを以てなり。而して開白は初夜に於て之をなす。

増益とは、梵に *वृद्धि* と云ふ。大にしては國家の福利を増盛ならしめ、乃至小にして個人の位官等を増進せしめ、又幸福を得しむるの作法なり。國家にして福利に乏しく、個人にして幸福なきは、我等衆生、貧困無福の業力の感ずる所なり。然るに法身毗盧遮那の福德圓滿の三密を以て加持し、無福の業を資薰して、福利豐饒を得べき力用あらしむ。故に此法は地大の三昧耶なり。是故に行法には地大の形なる方壇を用ひ、色法は總て地大の色なる黄金色を用ゆ。又行者は東方に向つて修法し、食時臥時總て東方に向ふ。東方は日出の方なり。萬物は日光浴を受けて、増長する故なり。隨つて開白は晨朝なり。

降伏は、梵に *निर्वृत* と云ふ。大にしては國家の怨敵を降伏し、乃至小にしては個人の怨敵を降伏して、害惡の心を捨て、降服せしむ。若し彼れ強剛にして降伏せざれば、遂に命根を斷つて死滅せしむるの法、即ち降伏法なり。彼の怨敵たる

者、害惡の心を以て、敵對を爲すは、彼れが意識に伴ふ貪嗔痴等の煩惱が其原因をなすなり。故に法身如來の大忿嗔降伏の三密を以て、彼の怨敵者を加持して、彼が内心の煩惱を降伏し、斷滅せしめて、歸伏の心を發せしむ。故に此法は火大の三昧耶なり。是を以て行法には、火大の形なる三角の壇を用ひ、色は總て火大の色なる赤色を用ゆ。又行者は南方に向つて修法し、食時臥時總て南方に向ふ。日輪南中すれば日光猛烈にして、能く草木等を萎微枯死せしむるを以て、降伏相應の方位となすなり。隨て開白も日中にす。又降伏相應の色法に、黒色を用ゐるあり。黒は風大の色にして、風に摧破の力用あり。且黒は餘色を滅する力用あるを以て、降伏相應の色とすべし。或は青黒色を用ゐるあり。青は空大の色なり。風空相合して摧破無礙なる義を表す。

此降伏法を行するには、行者は内心無限の大慈大悲に住し、彼の惡逆の人を、其まゝに捨て置かば、惡業に惡業を重ね造りて、斷善闡提と成り、永く三途の苦海に沈淪せんことを憐愍し、外には大惡忿怒の相を現じて、彼が煩惱妄執を斷盡し、降伏せんと觀念して、彼が命根を斷ずべし。内心大慈悲に住する故に、殺生罪とは成らざる

なり。然れども此法は、深行の阿闍梨の所作なるを以て、愚法淺行の阿闍梨としては、最も慎しむべきことなり。故に卒爾に修すべからずとの祖師の嚴戒なり。

敬愛は梵に可(か)め(め)と云ふ。國王大臣等乃至庶人の尊敬愛護を得んが爲に此法を修す。大にしては國家經營の事業、小にしては個人計畫の事業も、惣じて他の敬愛を得るにあらざれば、成功すること能はざるを以てなり。故に此法は蓮華三昧なり。是を以て蓮華形の壇を用ひ、又色法は惣じて紅蓮華色を用ひ、又行者は西方に向つて修法し、食時臥時等惣て西方に向ふ。西方は蓮華部の方位なるを以てなり。開白は初夜を法とす。愛染明王は此法の本尊なり。以上を四種法と云ふ。之に鈎召法を加へて五種法と名く。

鈎召を亦攝召とも名く。法身毗盧遮那金剛鈎の契印を以て、一切人を攝召して己に歸伏せしむる法なり。即ち可(か)め(め)の分齊なり。半月形にして雜色の壇を用ひ、所向の方は、行者の意樂に隨つて、鈎召せんと欲する方に向ふべし。又開白は一切時を用ひ、次に增益法の中に延命法あり。法身如來の不生、不滅の三密を以て、自身或は他身を加持し、定業を轉じて壽命を延長ならしむる法なり。壇形、色

法惣て增益に准ず。普賢延命菩薩は此法の本尊なり。五種法に就いて、皆祕印祕明あり。息災には多く佛部の尊、增益には多く寶部の尊を、降伏には多く金剛部の尊を、敬愛には蓮華部の尊を、延命には普賢延命尊を本尊とするなり。是れ皆現世祈禱の法なり。

祈禱と云へば、世の多くの人は、現世浮雲の幸福或は無難を祈るものにして、出世間成佛の法にあらざるが如く、思惟すれども、是未だ祈禱の眞意を解せざるの誤なり。成佛せんと欲して佛道を修行するもの、是れ祈禱にあらざして何ぞや。未來淨土に往生せんと願して、禮讃念佛するもの、是れ祈禱にあらざして何ぞや。祈禱の言頗る寛し、一片に執す可からず。而して現世の祈願を成就せしめ、世間の利益を與ふるは佛の本意にあらざれども、劣機を引攝せんが爲めの權方便にして、止むことを得ざればなり。佛の本意は出世間成佛にありと云ふは、權教の所談にして、佛教の實義にあらず。其實際を論ずれば、吾人凡夫の色心を離れて外に佛身あるにあらざるなり。正報既に然り、從て此世間を離れて外に出世間あるにあらず。此現世を離れて外に佛界あるにあらざるの理明かなり。世間の外に出世間あり、

現世の外に微妙清淨の佛界ありと認むるは、帶迷の妄見なり。既に已に世間即出世間の故に、世間の祈禱即出世間の祈禱ならざる可からず。從て世間の悉地は即出世間の悉地成就ならざる可からず。生滅無常と見る所の現世、即常住不變の佛界なる故に、現世を祈禱するは即成佛の祈禱なり。從つて現世の所願成就は、成佛の所願満足ならざる可からず。眞言密教の當相即道の法門、即身成佛の觀行は、現世祈禱の外にあるにあらざるなり。若し世間の法を捨てて、出世間の法を求めば、當相即道にあらず。若し現世を捨て、佛界を求めば、即身成佛にあらず。祈禱最是の故に、四種法等の現世祈禱の法の外に、即身成佛の法を求む可からず。祈禱最終の回向大菩提の句、深く味ふべし。信せざる者は親しく修して知るべし。

又壇に就て云はんは、増益の壇は四方正等の壇なる故に、論なし。餘の息災等の壇は、四方正等の壇の上に、更に圓形等の壇を置くを以て習とす。方形は淨菩提心を表する故なり。然れども、又直に圓形或は三角等の壇を立つるは、決して違法にあらざるなり。

又祈禱に、大法、中法、小法の三別あり。

大法五壇。大壇、息災護摩壇、増益護摩壇、十二天壇、聖天壇、  
 中法三壇。大壇、護摩壇、十二天壇、  
 小法。大壇兼護摩、  
 是なり。

第八章 護摩(大日經及び金剛頂瑜伽護摩軌等の説)

護摩は、梵文の *マヒ* にして、此に焚燒と翻す。此法は法身大日如來、印度に住する一類の祠火の婆羅門を誘接して、外道の邪護摩を捨て、如來の正護摩に歸せしめんが爲に、此火法を説き給ひしなり。其法に内護摩と外護摩との二あり。行者の自身と、本尊の火天と、壇上の爐及び火と俱に、六大の所成にして、本不生際に住するを以て、三平等なりと觀じて、心佛衆生三無差別の觀に住して、此觀智の火を以て、隔歴不融を執する無明煩惱を燒き盡すを内護摩と云ふ。心内の觀にして、事作法に涉らざるを以てなり。又爐は不動不轉の故に法身なり。本尊は召請撥遣の作法ある故に報身なり。行者は護摩の事業をなす故に變化身なり。而して三身即一身

なり。不二平等の故に一身即三身なり。差別の相を壊せざる故に、此眞理を觀ずるを内護摩と云ひ、又一に理護摩とも名く。次に壇木、乳木等の種々の供物を辨備し、之を爐火の中に投じて火天に供養し、祭祠するを外護摩と云ふ。又一に事護摩とも名く。心外に事作法を行ずるを以てなり。其作法の概略は、祠火外道の所作と未だ甚懸かに絶せざるなり。是故に密教の行者は、護摩を修するに際して、必ず深く内觀を凝すべし。然らざれば、外道の火法と敢て簡ぶ所なからん。此護摩法は、廣く諸佛菩薩、金剛天等に通じ、又四種法、五種法に通じて之を行ず。然るに是に就いて總と別との觀あり。總じては行者火天の三昧に住して、自身即ち火天と成りて、應きに随つて曼荼羅海會の本尊を爐中に召請し、火天の三昧に住せしむるなり。是故に護摩の行法は、總じて火天の三昧なり。別しては先づ行者火天の三昧に住して、自身火天と成り、更に彼の本尊の三昧に入つて、自身即ち本尊と成り、他方界の本尊を勸請して護摩の供養を行ずるなり。且く不動明王に就いて之を云へば、行者の自身、不動三摩地に住して不動と成りつゝ、不動明王を供養する故に、能施所施不二なり。施物豈不二ならざらんや。既に三輪平等なるを以て、自他隔歴の

迷執自ら蕩盡するものなり。又護摩の供物に就いて、淺略には闍伽、塗香、花鬘、燒香、飲食、燈明の六種の供養なりと雖も、深秘には供物は悉皆、見惑、思惑等の煩惱妄執なり。即ち蘇油は根本無明を標し、百八乳木は百八煩惱を表し、散香は微細の煩惱、丸香は堅剛の煩惱、五穀は五趣の異熟因、飲食は五趣の異熟果を表する等、詳しくは、明法の阿闍梨に投じて傳ふべし。即ち阿字本不生の實相の智火を以て、生死流轉の煩惱業苦の三道を燒き亡ぼす秘密の作法なり。暗黒なる煩惱業苦の三道が、智火の爲に燒かれて光明と成るは、煩惱即菩提、生死即涅槃の眞理を現成するものなり。無明即明の理、燎然たるにあらずや。又護摩の供物は、即ち六波羅蜜の行なり。灑淨漱口の水は壇度、塗香は戒度、華鬘は忍辱度、散香丸香は精進度、飲食五穀は禪度、壇木、乳木、蘇油等は般若度なり、故に護摩は即ち六度行を修すと觀念すべきなり。尙詳密に之を知らんと欲するものは、阿闍梨に就いて問ふべきなり。

### 第九章 三種菩提心(菩提心論說)

勝義の菩提心は、眞言行者三劫十地を次第に經て、前々の劣を捨て、進んで後々の

勝れたる道理と境界とを取りて成佛せんと期する心なり。故に上轉進趣自利の心なり。勝義の義は道理と境界との二義あり。即ち勝義を取るの心なり。

行願の菩提心は、衆生無邊誓願度、福智無邊誓願集、法門無邊誓願覺、如來無邊誓願事、菩提無上誓願證の五大願を發起し、之を實行して、無盡無餘の一切衆生界を救ひ度せんと期する心なり。故に化他大悲の心なり。即ち願を行ずる心なり。

三摩地の菩提心は、五相三密等の秘密の觀行を修し、父母所生の即身に、心内の曼荼羅を開顯して成佛する心なり。大日如來の一門普門の三摩地を修する心なり。即ち本有之修生の菩提心なり、此心即ち所求の菩提なり。故に機に就いて云へば、菩提を求むる心なれども、實義を論ずれば菩提の所在は、自心の外にあるに非ざる故に菩提即心なり。此中勝義行願の心は、其名は顯教に共ずれども、行者の用心は不同なり。三摩地の心は全く密教不共の心なり。又三摩地の心は體なり。勝義行願は、是が上の自證化他の二用なり。密教不共の三摩耶戒は、即ち此三種の菩提心を以て體とするなり。又勝義の心は金剛部、行願の心は蓮華部、三摩地の心は佛部なり。

### 第十章 孔字月輪觀(大日經菩提心論等の説)

孔字觀、又は一體速疾力三昧と云ふ。即ち因果二位に通行して、觀行の骨子秘密の肝心なり。故に大日經住心品には、此正觀を示して、云何菩提謂如實知自心と説き、助觀を示して、心不在内不在外等と説き、又、非青非黃等と説けり。密教の觀行は廣にして、曼供灌頂四種五種の大法等略して別行十八道、七支、五支、草々念誦等數多なりと雖も、悉く皆孔字觀の上の廣略にして、一印一明として孔字の外に出でたるものなし。三劫十地の因位の行者は、此觀に由つて因行を圓滿し、果位の如來は此觀に由つて化他の事業を満足す。此觀に就いて、先づ孔蓮月を所觀の境とすることを釋せば、月輪は何ぞ心、即ち緣慮の心を表する故に智なり。月輪中の八葉蓮華は、空入心即ち肉團心を表する故に理なり。此上に金色の孔字を觀ずるは、孔字は吾人即ち行者の本有の菩提心なるが故に、孔字月輪觀は即菩提心觀なり。本有の菩提心は理智不二なる故に、此義を表して月蓮上に孔字を觀ずるなり。其實は孔蓮月は三即一なる故に、或は單に月輪を觀じ、或は單に蓮華を觀ずるも敢て違せず。

本有の菩提心即ち六大法性なり。六大法性は即ち毗盧遮那平等智身なり。故に孔を以て毗盧遮那佛の種子の字とし、又菩提心の種子の字となす。若し深祕の釋によれば、所觀の孔字は、能造の六大體大の位にある法界曼荼羅中の法曼荼羅の文字なる故に、孔字の當體即ち本有の菩提心なり。中に於て、特に孔を以て本性淨の菩提心の種子の字となすことは、孔は一切法本來不生を字義の實相となす。不生の故に不滅なり。不生不滅の故に無始無終にして、本有常住なり。菩提心は本來常住にして不生不滅なる故に、又孔の音は一切の言語の最初なる故に、孔字を以て菩提心の種子の字となすなり。孔字本有の菩提心は、即ち行者日用光中境界に觸れて轉々する心の外にあるにあらず。故に大日經に知自心と説けり。吾人平常の心は本來不生不滅にして、萬有諸法の能造なるを以て、無量無邊の功德を具足圓滿して毫も欠けたることなしと雖も、私慾即ち煩惱、即ち魔の爲に誑惑纏綿せられて、本有の功德を覆蔽しつゝある故に、此觀を修して私慾を捨て、煩惱を斷じ、惡魔を拂うて功德を顯現せしむるものなり。又淺略の釋には、孔字は所造の四曼の中の法曼荼羅色塵の文字なるを以て、孔字即菩提心なるにはあらず。然るに孔字は本

來不生不滅の義にして、菩提心の本有不變を詮顯する故に、孔字を菩提心の代表とし、公案として、之を觀ぜしむる者なり。何故に代表的文字を以て所觀の境となすかと云ふに、菩提心無相なるを以て、所因<sup>チカ</sup>なければ初心の行者之を觀ずること難し。故に孔字を以て其所因として、之を觀ぜしむるなり。若し觀行圓熟すれば言亡慮絶し、阿月の相亡泯して、無相虛空相なり。衆生虛妄の別相を離れたるが故に、無相なりと雖も、性徳自爾の三色は之を具するを以て、無相中に孔字の光明は朗然として白く耀けり。此を表徳の實義と云ふなり。次に修觀の作法を示さば、天井も四方も、あまり迫まらず、暗からず、明かならざる處を擇んで、修禪の室と爲すべし。天井四方迫れば、則氣籠もりて病を發することあり。又暗ければ、妄念起り、明かなれば心散亂す。夜は燈をほのかに挑げて火を後に置くべし。厚く座物を敷きて、其上に結跏趺坐或は半跏趺坐し、法界定印を結び、眼は開かず、閉らず、唯細く見て瞬かす、兩腫鼻端を守るべし。眼を開けば散動し、閉れば眠に沈む。舌は上の腭に付け、反らず伏せず、左右に傾かず、耳と肩と相對し、鼻と臍と相對し、唯端身正坐して脈道を助くべし。然らざれば或は病發り、或は心狂すべし。又面前四尺計り、輕霧の中

に一肘量即一尺六寸の月輪を掲げ、中に八葉の蓮華を畫き、其蓮華の上に金色の孔字を書きたる軸物を掛けて、所觀の境となすべし。又行者の座に對して、高からず低からざることを要すべし。面前の孔月に向つて觀する時に、入息或は出息、或は出入の息に孔字を唱へ合すべし。斯の如く修すれば、薰修の功積んで開目閉目に論なく、分明に孔月を見ることを得るに至るべし。此時面前の孔月を廻らし、己身中に引入して之を觀すべし。身外所觀の月影は、身内の月輪の影像なる故に、其法體は一なり。此觀成就すれば、煩惱菩提生死涅槃の差別の妄見は截斷せられて、當座に即身成佛することを得るなり。上根の人は晝夜不斷に之を修すべし。下根の人は我身に堪へたらん程、若くは二時間にて、若くは一時間にて、之を修すべし。たとへ下根の行者たりとも、信心決定して怠ることなく、觀修すれば、十二年を過ぎずして悉地成就すと經に説きたり。仰ぐべし、憑むべし。又行者孔字觀を修する時には、無始以來の煩惱業障、頻繁に起り來りて、三昧を犯さんとするも、之を遮斷せんと思ふ可からず。唯此煩惱妄想の中に處して、信心堅固にして、只管孔字を觀すべし。若し貪慾起らば、貪慾の心上に孔字を觀すべし。若し嗔恚起らば、忿嗔

の心上に孔字を觀すべし。餘は准じて知るべし。又無明煩惱あるに由つて觀を修することを得べし。故に所有煩惱は逆縁なれども、修觀の爲には有力なる増上縁なりと觀じて、毫も折伏對治の念を起す可からず。釋摩訶衍論に、根本無明を命じて、報恩無盡住地と名くるを思ふべし。貪嗔邪見等の大小の煩惱の上に孔字を觀すれば、彼の煩惱妄執、自然に本不生際に歸し、隔歷不融の迷執を脱して、本具の性徳を顯はし、一舉一動悉く無非佛事となる。是れを密教の功德斷と云ふ。顯教の過患斷と同日の論にあらざるなり。而も斯の如くなり、雖も、妄心若し起らば、知つて誘はるゝことなからんことを要すべし。明惠上人云く、修禪定有、三、大毒、一、睡眠、二、雜念、三、坐相不正云々。

因みに、余が青年時代、本山に修學せし時、一律僧あり。持戒堅固にして常に阿字觀を修せり。時に本山菩提院住職に北越の産大道房良正と云ふ學者あり。或る時、其律僧を訪問して、談阿字觀に及ぶや、良正師問うて云く、和尚は如何なる意旨を以て阿字觀を修せらるゝやと、彼れ答へて云く、生死流轉の凡夫なる故に、之を解脱せんと欲して修するなりと。良正師云く、阿字觀は諸佛の法なり。生



死の凡夫と思つて修するは大に違へり。故に自身即佛なりと觀じて修せらるべし。一念凡夫と思はば諸佛の怨なりと説けり、謹むべしと。彼の律僧之を聞いて大に慚愧せり。同く北越の産にして余の法類に白心院住職通同房快靜と云ふ學者あり。良正師より此事を聞いて、或る時彼の律師を訪問して彼れに問うて云く、和尚近年阿字觀を修せらるゝと、甚美望する所なり。而して如何なる意旨を以て修せらるゝやと。彼の律師居然として答へて云く、阿字觀は諸佛の法なるを以て自身即佛と觀じて修するなり。經に一念凡夫と思へば諸佛の怨なりと説けりと。通同云く、佛と衆生とは相對の法なり。阿字觀は衆生と佛と平等不二絶對の觀なり。自身を佛と觀じて修するは阿字觀の實相に契はざるべし。須く生佛の念慮を亡泯して修せらるべしと。是に於て律師大に感服せり。是れ教相學を修めざるの致す所にして、他日法門の一笑柄となれり。

### 第十一章 月輪觀の五種三昧

一、刹那心、初心の位に於て心月輪を見るに、一刹那相應して暫く現すと雖ども即

滅すること電光の如くなる位を云ふ。

二、流注心、念念に薰修の功力を加へて相續し、絶えざること水の流れ注ぐが如くなる位を云ふ。

三、甜美心、功を積んで己まざれば、虚然として身心輕安なるを得て、道を翫味する位を云ふ。道とは心月輪にして、自心の菩提なり。甜は音ヲンにして、アジハフと訓ず。其美味をアジハフの意なり。

四、摧散心、或は忽に精勵し、或は忽に休廢して、其心一定せず、動もすれば摧け散りて、道に違ふ心起る位を云ふ。

五、明鏡心、既に摧散心を離れて、心月圓明無著なる位を云ふ。

以上は無畏三藏の禪要に説く所の五種心の義なり。守護國界經第二には、刹那と微塵と漸現と起伏と安住とを説き、攝眞實經中には、刹那と微塵と白縷と隱顯と安住とを説く。其義は禪要に同じ。

### 第十一章 五相成身觀

夫れ五相成身の觀門は、即身成佛の要道にして、頓證菩提の祕術なり。故に諸佛は之を自性心殿に祕藏し、祖々は非器に授けずと雖も、今結縁の爲に之を講ずるものなり。三卷の金剛頂大教王經、金剛頂略出經及菩提心論、金剛頂十八會指歸等の所説なり。通達菩提心と、修菩提心と、成金剛心と、證金剛身と、佛身圓滿附諸佛加持とを以て五相の觀と云ふ。即ち金剛頂部の所行にして、迂回の機、即ち從顯入密の行者の修する所なり。故に本經儀軌には、最初に阿婆頌那伽三摩地觀を明す。是れ即無識心三昧なり。即一切法皆空の觀にして、身と心との相を見ず。眞如實際の空理に住して、自ら成佛せりと思へり。此を金剛頂蓮華部心軌には、住平等寂滅究竟眞實智と説き、又想身證十地住於如實際と説けり。是時に空中に油麻の如く遍滿し給へる諸佛如來彈指驚覺して、汝が所證の處は一道清淨なれども、金剛喻三昧と一切智々とを尙未だ證知すること能はざるを以て、無相の空理に保著して足りぬとすること勿れと警告し給ふ。彼の顯教の極理に安住する行者、之を聞いて、我是れ凡夫なり。未だ求むる所を知らず。願くば我に所行の處を示し給へと請求す。空中に遍滿する諸佛如來此請求に應じて、五相成身の觀を授けて入密し、即

身成佛せしめ給ふ。

第一、通達菩提心は、身中に、本有性徳の菩提心を具せりと通達し觀察するを云ふ。菩提心は即ち本有の菩提心なり。自心は輕霧の中に住する月輪の如しと觀ず。輕霧は無明に喩ふ、在纏本有を顯す。即表徳の觀なり。又月輪を觀するに就いて、圓盆を仰けたる如く觀ぜよと説くあり、或は圓盆を立てたるが如く觀ぜよと説くあり。又圓滿寶珠の如く觀ぜよと説くあり。其實際を云へば、圓滿なりと雖も、初心の行者は、圓盆を立てたるが如く觀する方觀じ易かるべき歟。但し行者の意樂に任すべし。

第二、修菩提心は、即ち前の在纏本有の菩提心を修顯するを云ふ。自心は清淨にして満月の如く、諸の煩惱の垢染、遍計所執等を離れたりと觀じて、本有の菩提心を修顯す。即出纏修生菩提心なり。又通達心の位は、本來淨、修菩提心の位は、離垢淨なり。此二心は、孔字の位、即ち菩提心の種子の位なり。又通達心の位の孔字は、本有の菩提心なる故に、黒色なるを本とすべし。修菩提心の孔字は、修生の菩提心なる故に、眞金色に觀ずべし。

第三、成金剛心は、前の修菩提心の位に觀ずる孔字、轉じて五鉞、或は蓮華、或は刀劍等の本尊の三昧耶身と成ると觀じ、自心即ち金剛蓮華等と成ると觀ずる故に、成金剛心と云ふ。此位に廣斂卷舒の觀あり。

廣金剛の觀は、自心の三昧耶身、漸く舒べ、漸く廣くして、終に法界に周遍せりと觀じて、自心をして法界に周遍せしむべし。是れ自心を會して萬物となすものなり、何となれば、自心萬物に一如して、萬物ならざる所なければなり。

斂金剛の觀は、斯の如く法界に周遍せしめたる自心を、漸く斂め、漸く卷きて、自身の方寸に收む、前には自心を法界に周遍せしむる故に、自心即ち萬法なり、今は其まゝ、縮め收めて方寸に歸する故に、萬物悉く自己の方寸に入る。即ち萬物を會して自心となすものなり。是れ即ち、入我々入の觀にして、廣金剛は我入なり、斂金剛は入我なり。即ち心佛衆生三平等なり。此廣斂卷舒の觀成就すれば、自心本具の無量の徳用を修顯し、萬有の主宰と成つて、萬境を使用するなど自由自在なり。何となれば、自心と萬有と融會して不二なる故に、十法界の出來事は座を起たずして、知ることを得るなり。何となれば、自心と十法界と不二平等なればなり。

第四、證金剛身は、行者の自身即ち本尊の三昧耶身と成ると觀ず。成金剛心と證金剛身との二心は、心と身との異ありと雖も、三昧耶身の位なり。心と身とは本來不二なり。故に第三心の位に、自心金剛蓮華等の三昧耶と成れば、自ら此身も亦三昧耶身と成る、今は此旨を觀じ顯はすものなり。此金剛蓮華等の三昧耶身を觀ずるに就いて色法あり、金剛杵は眞金色、蓮華は赤、或は青、或は白等、本尊に隨つて別あるべし。餘は准知すべし。

第五、佛身圓滿は、前の證金剛身の三昧耶身變じて、相好具足の本尊の羯磨身と成ると觀ずるなり。之に附帶して諸佛加持あり。行者自身本尊の羯磨身と成る故に、諸佛加持し圍繞して曼荼羅を成ずるなり。即ち新成の佛を、已成の佛が前後左右に圍繞し加持して、不二平等の義を示すものなり。從顯入密の正機は、此觀に依つて入密して、眞言の初地に證入するものなり。又直往の正機は、自證の爲にするにあらずと雖も、從顯入密の機を引接するの方便に供へんが爲に、之を行ずるなり。又此五相の觀は、胎藏の五字嚴身觀と同一なることを學ぶべし。此五相の觀心地觀經には、三相を説き、守護國界經には一相を説くは略説なり。按ずるに五相は

一も缺く可からざればなり。又寺門の智證大師は、廣斂卷舒の觀と、諸佛加持とを分開して八相となせり。

余謂く、教王經等に、遍空の諸佛の驚覺に由つて入密すと説くは、教道門の説なり。實證門には、自心佛の驚覺にして、其實は任運流入なり。又五相一一に印と眞言と加持あり。師に従つて傳ふべし。

### 第十三章 五字嚴身觀

阿縛羅賀法の五字を以て、行者の身の五處に布して其身を莊嚴し、本有法身を修顯する觀門なる故に、五字嚴身と云ふ。大毗盧遮那成佛經の所説にして、直往の機の即身頓成の觀門なり。先づ阿字を觀すべし。其色黄金色にして、其形四方正等なりと。之れを以つて臍輪以下兩足に布字して五鈷の印を結び、阿の眞言を誦して加持して金剛不壞の座となす。座の中に五鈷金剛を觀ずべし。光明一切衆生を照して、此金剛不壞の菩提心地に住せしむ。次に鑊字を觀して、白色圓明の月輪と爲し、之れを以て臍輪に布して、八葉の印を結び、鑊の眞言を誦し、加持して大悲水

と爲す。此加持力に由つて、大悲三昧を得。次に藍字を觀じて、赤色三角の火輪と爲し、之を以て心位に布して、三角火輪の印を結び、藍字を誦しつゝ、加持して實相の火輪と爲す。此加持に由つて諸の垢穢の障を除く。次に唵字を誦して、黑色半月形の風輪と爲し、之を以て眉間に布して、轉法輪の印を結び、唵字を誦して加持して、解脱の風輪となす。此加持に由つて能く衆の惡魔を摧く。次に欠字を觀じて、雜色圓形の空輪と爲し、之を以て頂上に布字して、尊勝空の印を結び、欠の眞言を誦し、加持して、周遍無障礙の大空輪と爲す。此加持に由つて、自身法界に等同なり。此の觀を修して、自身本有の六大法身を修顯して、自身即法身、大日如來となるなり。此の五字嚴身の觀若し、從顯入密の迂廻の機に對すれば、五相成身の觀となるなり。通達心の位は、本有の菩提心なる故に、阿字の位に當る。修菩提心の位は、離垢淨なる故に、縛字、大悲水の位に當る。成金剛心は、自心塵垢を離れて、三昧耶となる時の心なり。故に、藍字、智火の位に當る。證金剛身の位は、自身即三昧耶身と成つて、十方界に飄動し、能く衆魔を摧く故に、唵字、解脱の風輪の位に當る。佛身圓滿の位は、欠字の大空輪に當ると知るべし。故に、金剛界の五相成身は、即胎藏の五字嚴身なり。

### 第十四章 道場觀の廣中畧

廣觀は地結四方結を以て加持結界したる大地の上に於て、最下より次第に上に向つて空風火水地の五輪を觀じ、其地輪の上に大海を觀じ、其中に七金山を觀じ、又其山と山との間に入功德水を觀じて充滿せしめ、其七金山の中央の香水海中に金色の龜を觀じ、其背上に五鈷金剛杵を莖とする八葉蓮華を觀じて、蓮華藏世界と爲し、其上に八角にして四寶所成の須彌山王を觀ずるを器界觀と云ふ。其須彌山王の上に、八峯八柱或は五峯八柱の七寶を以つて莊嚴する寶樓閣を觀じ、四門開通し、其左右に吉祥幢あり。又四圍に寶樹行列せり。樓閣には寶蓋珠鬘等を交絡し、照すに摩尼燈を懸け、又寶樹には妙寶衣を垂れ懸けたりと觀ずるを樓閣觀と云ふ。即本尊の宮殿樓閣を觀ずるを以てなり。次に其樓閣の中に於て、白赤黃青黒の五色の界道を、白を内とし黒を最外として、内より外に出で、第一重の界道、第二重の界道、第三重の界道と三重に加持して圍繞せしむ。即曼茶羅の三重界道なり。次に樓閣の中央に、大蓮華王を觀じ、其上に月輪を觀じて本尊の種三尊轉成の觀を爲し、

眷屬前後左右に圍繞せりと觀ずるを、曼茶羅觀と云ふ。斯の如く、器界、樓閣、曼茶羅の三觀を併せ爲すを廣觀と云ふ。壇上に於て樓閣觀と曼茶羅觀とを爲すを中觀と云ふ。單に曼茶羅の觀のみを行ずるを畧觀と云ふ。又器界觀に風水金の三輪觀あり。界道に白青黒の三色界道あり。更に問ふべし。

### 第十五章 五種三味道

大日經第五秘密曼茶羅品第十一に、五種の三味耶を説く。密教が諸の機根を攝するの三味耶は、此五種を以て盡せり。第一の三味道は、壇外に於て、遙かに曼茶羅を見得し、以て禮拜散華して供養を行ずる位なり。一見曼茶羅の功德に由て、罪障消滅すれども、入壇せざる故に印明は授けざるなり。即ち現今の大曼茶羅供は此作法なり。第二の三味道は、曼茶羅壇中に引入して、投華得佛せしめ灌頂して某尊の印明を授く。こは親しく曼茶羅海會の諸尊を見ることを得る故に、現今の結縁灌頂なり。第三の三味道は、阿闍梨が弟子の爲に、特に曼茶羅を起立して引入し、灌頂投華せしめて、一一に諸尊の位等を告示し、又所得の尊の印明を授けて行法を教

ふ。是れ則ち現今の受明灌頂なり。第四の三昧道は、阿闍梨、其弟子が曼荼羅所有の法門に於て一一に通解し、具に縁壇所須の方便を知り師位に在るに堪ふるを知つて、爲に特に曼荼羅を起立し、入壇投華せしめ、灌頂して阿闍梨位の祕印明を授けて、阿闍梨職位を許可す。即現今の傳法灌頂なり。以上はたとひ、凡夫未見諦の阿闍梨と雖も、明法の分あらば、之を行ずることを得るなり。第五の三昧道は、師資共に見諦以上の人の所作にして、凡夫の師資の堪ふる所にあらず。即ち前の以心灌頂なり、經に曰く、當知異此者非名三昧耶と。即ち諸佛の三昧道に非ずとなり。

### 第十六章 理供養事供養

密教の三密加持の修法に、大法、中法、小法等の別ありと雖も、歸する所は、淺略には行者世間出世間の所願を成就せん爲に、已成佛の他方界の尊を奉請して、精神的の供養を捧げて加被護念を請求するの作法なり。深祕には、自身の本有本覺の如來を供養し、資薰して、其光明の發現を増長し、無明の暗を淺薄ならしめて、成佛を速疾ならしめんとする作法なり。故に本尊を供養するにも拘はらず、壇上の供物等を、

總て行者に向けて莊るは、密教不共の莊嚴にして、其實は自身佛に供養を行ずるの深意を表するものなり。宇多法皇曰く、自心佛に供養するの觀念なき時は、利益甚だ淺しと、貴むべし。此供養に就いて本經儀軌には、四種、五種、八種、十六供、十七供、二十供等種々の供養を説くと雖も、中に於て六種供養を以て至要となす。即ち闍伽塗香、華鬘、燒香、飲食、燈明の六種是れなり、何の故に此六種を以て至要とするかと云ふに、六種供養は即ち六波羅蜜の行なる故なり。闍伽は壇波羅蜜、塗香は戒波羅蜜、華鬘は忍辱波羅蜜、燒香は精進波羅蜜、飲食は禪波羅蜜、燈明は般若波羅蜜なり。又此供養に事と理との二ありて、壇上に六種の供養物を布置して、三密加持を以て供養するを、事供養と云ふ。三密の加持力に依るが故に、一滴の闍伽は、法界に周遍して、阿鼻焦熱の炎を鎮め、一盞の燈明は法界に周遍して、畜生愚癡の冥暗を照す等、何れも供養雲海を發して、十方三世の諸佛に、廣大無邊の供養をなすなり。又壇上に供養物を布置することなく、端身正坐、但に菩提心のみを觀じて供養を行ずるを、理供養と云ふ。此亦三密の加持力に依るが故に、印契より塗香菩薩華鬘菩薩等出現して、十法界に往返し、或は六道の衆生を救濟し、或は四聖の法樂を倍增する等、廣大

の佛事を行ず、此れを事理の供養と云ふ。顯の一乘に事供養の義なきにはあらざれども、理の周遍を本とする故に、密教の事物が、理の故を假らずして周遍するに同からず。又理供養は密教不共の法なり。

六種供養の

闍伽、餓鬼、飢渴の苦を脱す。塗香、諸地獄炎熱の苦を脱す。

華鬘、修羅鬪諍の苦を脱す。燒香、人界不如意の苦を脱す。

飲食、天界退没の苦を脱す。燈明、畜生愚癡の苦を脱す。

第十七章 兩部曼荼

一、曼荼羅の語義

曼荼羅は、舊譯の三藏は壇と譯す。即ち平坦の義を取る。十法界に周遍して平等なるの意なり。不空三藏等は輪圓具足と翻す。即ち輪の圓滿にして、輻と轂と輻と等しく具足するが如く、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天乘、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十法界の依報、正報、皆悉く圓滿に具備して、微塵許りも缺けたることなき義を示す。

又聚集と翻す。十法界、有情、非情等の一切法が聚集せる意なり。或は發生と譯す。佛自心の曼荼羅を開顯し畢つて、之れを以て、還つて一切衆生の本有心地の曼荼羅を開發し生起せしむるの意なり。此外無比、無過上味、道場莊嚴等の翻名あり。曼荼羅の一語に具する所の多義の中、一義々々を以て翻するものなる故に、皆義翻なり。此曼荼羅に就いて、普門の曼荼羅と、一門の曼荼羅とあり。金胎兩部の曼荼羅は、普門の總體たる毘盧遮那を以て中臺の主尊となす故に、即ち普門法界の曼荼羅なり。又彌陀曼荼羅、釋迦曼荼羅、不動曼荼羅、愛染曼荼羅等は、大日如來の無量の差別智印の中の一智より現はれて、大日如來の眷屬と成り、各々一門の徳を主り、一門の機を接する尊の曼荼羅なる故に、一門の曼荼羅と云ふ。又普門の曼荼羅は、普門の大機の爲に現ずる所、一門の曼荼羅は、一門の小機の爲に現ずる所なり。普門一門異りと雖も、各々大三法、羯の四曼を具して缺けたることなし。抑も曼荼羅は密教の眞髓、即ち地獄等の十法界に、各々十法界の一切法を圓かに具して、毫も缺けたることなき眞理を、丹青の功によりて畫き示したるものなり。されば宇宙の萬有が、事々物々相互に圓かに具有し、相互に主伴となり、其實は、融會無礙にして、各々

曼荼羅を形成することを示す。故に地獄界には地獄を主となす曼荼羅あり、此を地獄界の曼荼羅と云ふ。餓鬼界には餓鬼を主となす曼荼羅あり、此を餓鬼界の曼荼羅と云ふ。又花には花の曼荼羅あり。月には月の曼荼羅あり。我には我の曼荼羅あり。

彼には彼の曼荼羅あり。餘は推して知るべし。然るに今授くる所の曼荼羅は、毘盧遮那如來を以て中央主尊とする故に、佛界に餘の九界を圓滿具足する消息を示したるものなり。

二、現圖曼荼羅の作者と現圖の語義

附四面器等秘密道具の作者

古來、兩界共に龍猛菩薩の指授を受けて、龍智菩薩之れを圖すと云ひ、或は胎藏曼荼羅は無畏三藏、金粟王の塔下に於て、空中に感見せしを寫す所、金剛界曼荼羅は、金剛智三藏、空中に感見せしを寫す所と云ふ説あれども、其理分明ならず。又誠證なきを以て取る可からず。古傳に、惠果和尚、特に弘法大師の爲に、書工に命じて畫圖せしめたりと云ふ説あり。今は此説を取るべし。大師の御請來目錄に曰く、和尚

告曰、眞言秘藏經疏隱密、不假圖書不能相傳、則喚供奉丹青李真等十餘人、圖繪胎藏金剛界等大曼荼羅等一十鋪、兼集廿餘經生、書寫金剛頂等最上乘密藏經、又喚供奉鑄博士趙吳新造、道具一十五夏、寫像寫經、漸有次第、と此れ其誠證なり。而して惠果作の曼荼羅を現圖と云ふことは、大日經所説の曼荼羅と、大日經疏に出す所の阿闍梨所傳の曼荼羅とに對して、惠果和尚が李真等に命じて、現に畫圖せしめたるものなる故に、現圖と云ふなり。他に意味なし。又日本の台密東密に於て、大壇上に布列し莊嚴する所の闍伽、塗香、華鬘、燒香、飲食器、及灑水、塗香の二器等は、惠果和尚が、特に意匠を以て圖案して、斯に鑄造せしめて、弘法大師に授けたるものなることは、前に出す請來錄に明かなり。其以前は、水等を盛るには、瓦器を用ひ、食物、藥物等には、無毒の木の葉の大なるを用ひ、行法一回毎に捨てたるものにして、金屬の器物は無かりしものなり。

三、兩部曼荼羅惣體の上の差別

兩部とは胎藏界と金剛界とを云ふ。胎藏界は本有理平等を開示したる曼荼羅なる故に、本有と修生との中には、衆生本有性徳の曼荼羅、理智の中には、理界の曼荼羅

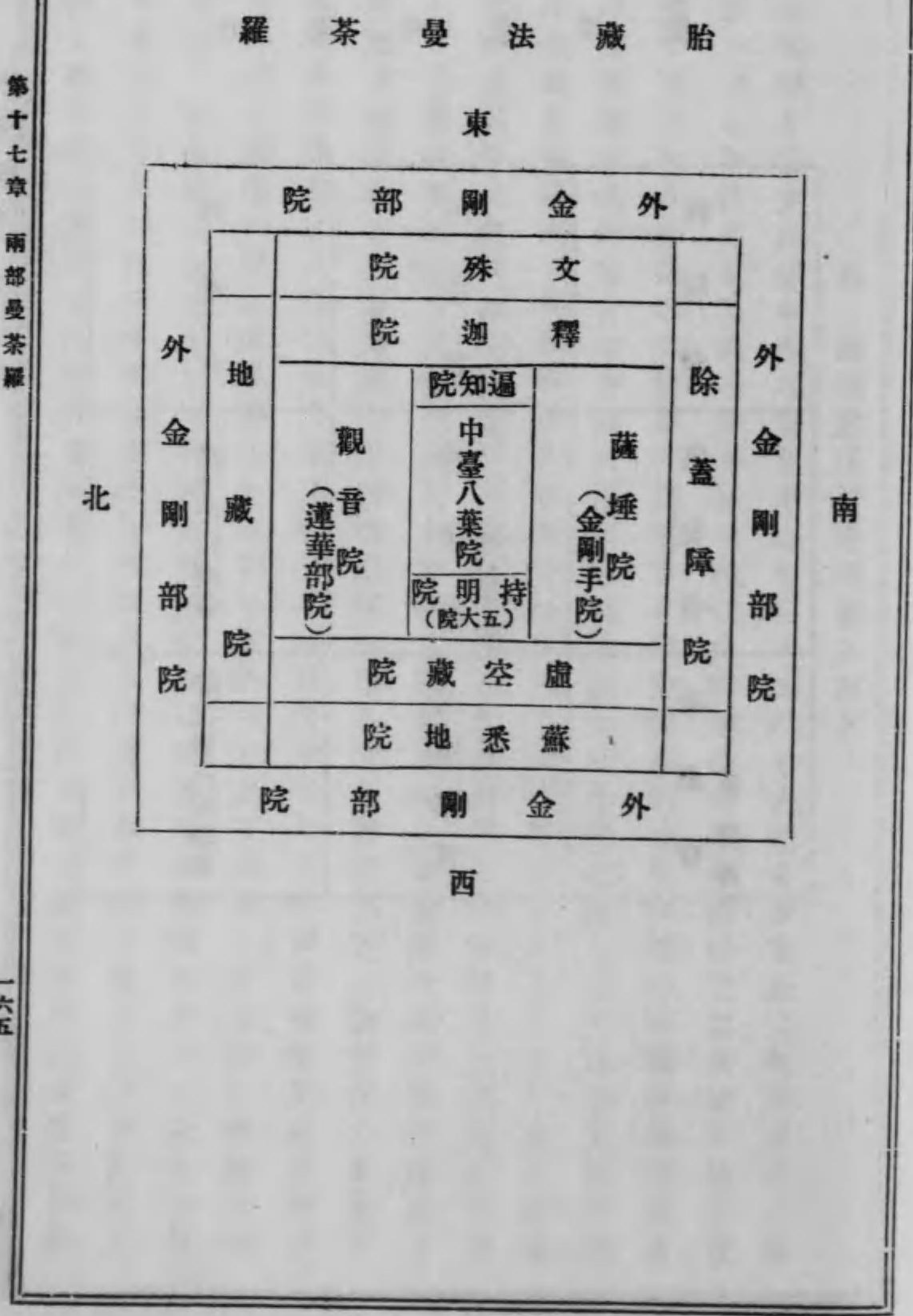


羅、六大の中には前五大の曼荼羅、色心の中には色法の曼荼羅あり。故に中臺八葉を以て一曼荼羅の惣體とす。即ち蓮華曼荼羅なり。此は且く其の表とする所に就いて云ふ。本有の裏面には修生必附せり。色法の裏面には心法必附せり。又胎藏は衆生本有の曼荼羅なる故に、因果の中には因曼荼羅あり。随つて方位は東曼荼羅なり。金剛界は修生顯得の智差別を顯示する曼荼羅なり。故に始覺修生の曼荼羅あり。理智の中には智曼荼羅、六大の中には識大の曼荼羅、色心の中には心法の曼荼羅あり。一大金剛輪を以て、一曼荼羅の惣體となす故に、金剛界曼荼羅と云ひ、又月輪を以て智を標幟する故に、月輪曼荼羅とも云ふ。又始覺修生の曼荼羅なる故に、因果の中には果曼荼羅、随つて方位は西曼荼羅なり。此は且く其の表面に就いて云ふ。修生の裏面には本有必附し、智の裏面には理必附せる故に、其實際を論ずれば、前に云ふ如く、胎藏の十三大會には、金剛界の九會を攝して洩すことなく、金剛界には、胎藏の十三大院を融して會せざるなく、本來不二平等なり。此を而二即不二と云ふ。台密の如く、而二の外に不二を求めざる眞理なり。又東曼荼羅西曼荼羅と云ふは、日出と日没とを以て、因果を標幟する詞なり。曼荼羅は、兩部

共に本來法界に周遍して、本來無東西なり、何ぞ法界を折半して東西と云ふべけん。且兩部曼荼羅は、本來不二なりと雖も、胎藏は理を表とする故に、胎藏の諸尊は蓮華上の月輪に住す。蓮華は本有の理にして、吾人の肉團心なり。月輪は修生の智にして、吾人の知覺心なり。蓮華上に月輪を置くは、胎藏の智佛が理佛の三昧に住する義を表するなり。金剛界は、之に反して智を表とする故に、その諸尊は、月輪上の蓮華に住して、理佛が智佛の三昧に住する義を示す。又胎藏は因曼荼羅なる故に、因位の九識を示し、中臺八葉を以て中心となす。金剛界は果曼荼羅なる故に、果位の五智を顯はし、五解脱輪を以て中心となす。又胎藏曼荼羅は、下轉化他の曼荼羅なる故に、從果向因の曼荼羅なり。大日如來本有の大悲と因位の悲願とに催されて、五智圓滿の中臺八葉自證の德より、外三重の曼荼羅を流現し、群機に俯應して攝化無限なり。故に大悲胎藏生曼荼羅と云ふ。金剛界は上轉修生の曼荼羅なる故に、從因向果の曼荼羅なり。行者三劫十地の因行を修して、捨劣得勝、上轉進趣し、發心修行、菩提涅槃の四轉を経過し、方便究竟して五智圓滿し、大日如來の身と成る儀相を示したるは、即ち自證圓極無行可増の曼荼羅なり。故に金剛界曼荼羅と云ふ。



に更に蓮花成の曼荼羅と、阿闍梨所傳の曼荼羅とを釋せり。蓮華成の曼荼羅は、四重曼荼羅を以て、一本の蓮華に就いて開示す。即ち毘盧遮那は臺實に配し、四佛四菩薩は衆實俱成に配し、第一重の執金剛は鬚髮に配し、第二重の菩薩は八葉の華藏に配し、第三重の三乘六道隨類の身は、根莖、條葉等相交るに配す。是れ則ち妙法蓮華曼荼羅の義なり。又四重の祕釋を以つて、上に擧ぐる所の曼荼羅の種類を釋せば、嘉會壇は淺略祕密曼荼羅品は深祕、蓮華成は祕中の祕、支分生は祕々中の極祕なり。又阿闍梨所傳の曼荼羅は、龍猛龍智の手に出でたる曼荼羅にして、即ち嘉會壇曼荼羅なり。阿闍梨所傳の曼荼羅の重數及諸尊坐位等を示したる略曼荼羅一軸は、東京帝國大學梵文學研究室に藏せり。



金剛界曼荼羅

四 印 會	一 印 會	理 趣 會
供 養 會	成 身 會 <small>(羯磨會)</small>	降三世羯磨會
羯 磨 會 <small>(微細會)</small>	三 昧 耶 會	降三世三昧耶會

五、胎藏界現圖曼荼羅の建立

其實際を論ずれば、中臺八葉を中心として、之れを圍繞する重數は、四方共に三重に書くべきなれども、現圖の作者惠果和尚は、釋迦は外金剛部の主なる故に第三重に書くべきを、具緣品の次往第二院東方、初門中書釋迦牟尼の經の文相に任せて、第一の遍知院と文殊院との中間に、更に一院を設立して釋迦院と爲したるを以て、東方は四重となれり。之に相對する西方三重にては、相對宜しからざるを以て、虛空藏院の眷屬たる蘇悉地を開き、更に一院と爲して其對等宜きを得せしめたるものなり。現圖は其の數十二院なれども、重位を論ずる時は、釋迦院は第三重の亂脱と見て、第三重に屬し、蘇悉地院は虛空藏に攝して、八葉の外は三重と爲すべきなり。又具緣品の疏の意は、經の次往第二院の文は隱密語にして、其の實は第三院なりと釋すれども、惠果和尚は、疏の釋に依らずして、經の顯文に依つて第二院に釋迦を書きたり。その故は文殊院の外に、釋迦を書く時は、佛菩薩の位階の上下を失するに似て宜しからず、又自性、受用、變化、等流の四身の次第を示す爲の故との二因を以て、釋迦を第二院に書けり。四身の配當にも種々あれども、一義に依れば、中臺八葉は

自性身遍知院は自受用身釋迦院は變化身文殊院及び外金剛部は等流身なり。又外金剛部は文殊の眷屬たる義あり。彼の宿曜經は、文殊の説なるを以て知るべし。今此十二大院を以て、三部に配釋すれば、上下の四重は佛部族、觀音院、地藏院、及び北方の外金剛部は蓮華部族、金剛手院、除蓋障院及び南方の外外部は金剛部族なり。四大護院は現圖曼荼羅に書くべき所なき故に之れを略せり。南方無堪忍大護、北方壞諸怖大護、東方無畏大護、西方難降大護にして、外三重各重の四方にあるべきなり。

又四方にある門を金剛門と云ふ。門上の忿怒形の面は、金剛の智を表す。胎藏の理に入るには、金剛界の智を門として證入する義を顯はすなり。四方の門は、下轉化他には布施、愛語、利行、同事の四攝の法を表し、上轉進趣には、發心、修行、菩提、涅槃の四轉を表す。八葉院の四隅及び文殊院等の四隅に四瓶あるは、淺略には供養の義なれども、深秘には大圓鏡智等の四智を表す。又最外縁に布置したる草を牡丹草と云ふ。福德圓滿の義を表す。

六、金剛界曼荼羅

梵名は $\text{Vajrasa}$ と云ふ。句義は $\text{Vajra}$ 金剛 $\text{sa}$ 界なる故に金剛界と云ふ。其意蓋し、始覺修生の毘盧遮那大智の利用が、煩惱業苦の三道を摧破して、自心本不生の眞理を修證すること猶ほ金剛寶石の自體不可破壞にして、能く一切の物を摧破してあますことなきに喩へたるなり。其體は即ち如來の一切智々なり。法界體性智等の五智なり。界とは體性の義なり。五智の金剛は、堅固不動の體性なる故に界と云ふ。金剛即ち界なり。

金剛界曼荼羅に就いて、十二處、十八會中に數種の曼荼羅を説けり。十八會の指歸に依るに、第一、色究竟天の一切如來眞實現證大教王會に四大品あり。

(一) 金剛界大品に六曼荼羅を説く。

- 一、金剛界大曼荼羅、五相成身觀を説く。
- 二、陀羅尼曼荼羅、三昧耶曼荼羅なり。
- 三、微細金剛曼荼羅、法曼荼羅なり。
- 四、一切如來廣大供養羯磨曼荼羅。
- 五、四印曼荼羅。

六、一印曼茶羅、

(二) 降三世大品に二あり。初に六曼茶羅を説く、

一、大曼茶羅、

二、祕密曼茶羅、

三、法曼茶羅、

四、羯磨曼茶羅、

五、四印曼茶羅、

六、一印曼茶羅、

後に外金剛部の爲に、四曼茶羅を説く、

一、教敎大曼茶羅、 二、教敎三昧耶曼茶羅、

三、教敎法曼茶羅、 四、教敎羯磨曼茶羅、

(三) 徧調伏大品に六曼茶羅を説く、

一、大曼茶羅、 二、三昧耶曼茶羅、 三、法曼茶羅、 四、羯磨曼茶羅、 五、蓮華部四印

曼茶羅、 六、蓮華部一印曼茶羅、

(四) 一切義成就大品に大、三、法、羯、四、印、一、印の六曼茶羅を説く、法曼茶羅の中に虚空藏求聞持法を説けり、

第二、色究竟天、一切如來祕密主瑜伽會に四大品あり。初會の如し、

第三、法界宮殿一切教集瑜伽會に、五部の大曼茶羅を説く。五部各々五部の曼茶羅

あり、總合して一大曼茶羅と成る。又一百三十五種の呼摩の爐を説けり、

第四、須彌山頂降三世金剛瑜伽會に、金剛藏等の八大菩薩各々四種曼茶羅を説く、

第五、波羅奈空界世間出世間金剛瑜伽會に三曼茶羅を説く。略して五佛の曼茶羅、

又略して諸菩薩の曼茶羅、又略して外金剛部の曼茶羅を説く、

第六、他化自在天宮大安樂不空三昧耶眞實瑜伽會に、三曼茶羅を説く。普賢曼茶羅、

大日曼茶羅、般若理趣曼茶羅、是なり、

第七、普賢菩薩宮殿普賢瑜伽會に、十六大菩薩及び外金剛部等、一一の尊各々に四種

曼茶羅を説く、

第八、普賢菩薩宮殿勝初瑜伽會、大略第七會に同じ、

第九、眞言宮殿一切佛集會拏吉尼戒網瑜伽會に、自身を立て、本尊の瑜伽となすこと

を説いて、身外に形像を立つる瑜伽者を訶し、又五部の歌讚及舞儀を説く。

第十、法界宮殿大三昧耶瑜伽會に、十六大菩薩各々四種曼茶羅を説く。

第十一、法界宮殿大乘現證瑜伽會に、實相の理心を以て、曼茶羅を建立する儀則等を説く。

第十二、空界菩提場三昧耶最勝瑜伽會に、自身の上に曼茶羅を建立し、自身を以て本尊とする瑜伽を説き、孔字門は染淨等の一切法に通過することを説く。

第十三、金剛界曼茶羅場大三昧耶眞實瑜伽會に、金剛薩埵は普賢十七字の眞言を説き、適悦不空十七尊の曼茶羅を説く。

第十四、金剛界曼茶羅場如來三昧耶眞實瑜伽會に、五部圓融、互相涉入して、本に於ては一體なる義を説き、普賢等の諸菩薩及び外金剛部各々に、本曼茶羅の印明を説く。

第十五、般若波羅蜜宮祕集會瑜伽會に、教法壇印契眞言を説くに、世間貪染相應の語に似たり。除蓋障菩薩、佛に白す、世尊、龜惡雜染の語を出し給ふ可からずと、佛の言く、清淨の語に何の相かありや。我の語は世間の文字を加持して、化縁

に應じて方便し、以て佛道に引入するのみ、又別に相なし。大利益を成す、疑を生ず可からずと。

第十六、法界宮殿無二平等瑜伽會に、大日尊及諸菩薩、外金剛等、各々四種曼茶羅を説く。生死涅槃等の一切法無二平等にして、眞如法界に同じき義を説く。

第十七、實際宮殿如虛空瑜伽會に、大日尊及び普賢、外金剛部一一に四種曼茶羅を説き、虛空三摩地を説く。

第十八、色界四靜慮、天金剛寶冠瑜伽會に、金剛薩埵、大梵天王の爲に、五部の瑜伽曼茶羅を説き、弟子の爲に、心念誦を説く。

以上十八會所説の數種の曼茶羅を以て、淺畧の曼茶羅とし、金剛頂瑜祇經所説の曼茶羅を以て、深祕の曼茶羅とす。何となれば、本有の曼茶羅なるを以てなり。

七、金剛界現圖曼茶羅の建立

九會の中に於て、初の六會は十八會の中の第一會の金剛界品所説の六曼茶羅なり。第七會は、十八會の中の第六他化自在天會所説の大安樂不空の曼茶羅にして、即ち理趣經所説の金剛薩埵十七尊の曼茶羅なり。第八降三世會と第九降三世三

味耶會とは、十八會の中の第一會の降三世品所説の十曼茶羅中第一第二の曼茶羅なり。現圖曼茶羅の作者は、十八會所説の曼茶羅の中に於て、特に此の九會を拔出して、現圖曼茶羅を建立せり。中央の會を成身會と名く。行者が、五相三密の觀行に依つて、成佛する所の相を示したるものなればなり。第二以下の諸會の惣體にして根本なる故に、又根本會とも名く。是れ則ち大曼茶羅なり。第二を三昧耶會と云ふ。成身會の諸佛菩薩等の内證本誓を、或は印契或は刀蓮等の標幟を以て示したるものにして、是れ則ち三昧耶曼茶羅なり。第三を羯磨會と云ふ。此の會の諸尊は皆三股金剛杵の中に入る。而して三股杵は業事成就の義を示すが故に、羯磨會とも云ふ。羯磨は、事業の義なり。其相微細なる故に、是れ則ち法茶曼茶羅なり。第四を供養會と云ふ。諸尊皆各自各自の三昧耶形を以て、心王大日に供養の儀式を示すより名つく。供養は事業なる故に、是れ則ち羯磨曼茶羅なり。以上の四會は、大、三、法、羯の四曼を各別に建立して示す故に、而二の法門なり。第五を四印會と云ふ。四尊は即ち大、三、法、羯の四智印なり。四智印は即ち四曼なり。四曼を一曼茶羅に會して、四種曼茶羅各々不離の義を示せり。四曼一處に會すと雖も、尙別體

あるを以て小不二なり。何となれば、不二中に而二を存するを以てなり。又第六を一印會と名く。四曼の別相皆悉く一實相の極理、六大の體性に歸して、融會無礙なる義を示す。故に唯一大法身の大日を書く。是れ則ち大不二なり。以上の六曼茶羅は皆大日を以て、中心とす。大日は萬有の自性本地の佛體なる故に、その六會は、自性輪身の曼茶羅なり。金剛薩埵は大日如來の示現する所の菩薩の身にして、大慈悲を本とし、如來の正法を以て、一切衆生を攝取する故に、正法輪身なり。是を以て、十八會の初會の第二品以下を超えて、理趣會の曼茶羅を取つて、第七會となすなり。然れども大自在天等の強剛難化の輩は、菩薩大悲の攝受門を以ては度し難き故に、金剛薩埵更に暴惡忿怒の身を示して、降三世明王と現はれ、教令を立て、之に違する者は必ず折伏治罰す。故に教令輪身と云ふ。此は是れ佛大悲至極の方便身なり。故に十八會の中の初會に立ち、還て第二品の降三世の曼茶羅を以て第八第九會となす。是れ則ち佛は自性輪身菩薩は正法輪身、明王は教令輪身なると、又其次第とを示さんが爲なり。九會は、毘盧遮那佛一身の上の三輪に就いて、一曼茶羅を建立するを以て、十八會の中に於て、逆順超越して、其の要處を採て作るものなり。



成身會の五解脱輪、即五の月輪の中央の輪の中尊は、金剛界大日なり。四方の尊は、東南西北の次第の如く、金寶法業の四波羅蜜菩薩也、即ち女身なり。東方の月輪の中央は阿闍佛、四方は前右左後と次第して、次の如く薩王、愛喜の四親近の菩薩なり。南方の月輪の中央は寶生佛、四方は前右左後と次第して、次の如く寶光、幢、唵の四親近なり。西方の月輪の中央は阿彌陀佛、四方は前右左後と次第して、法、利、因、語の四親近なり。北方の月輪の中央は、不空成就佛、四方は前右左後と次第して、次の如く業、護、牙、拳の四親近の菩薩なり。四親近は皆男身なり。此四方の四親近を慧門の十六大菩薩と云ふ。即眞言行者の上轉進趣の階位を示す菩薩なり。各月輪の四隅に畫きたる三瓣寶珠は供養の義を表す。深祕には行者の淨菩提心供養なりと云へり。大金輪内の四隅の尊は、東南の隅より起りて、次の如く嬉、鬘、歌、舞の内の四供養の菩薩天女使なり。阿闍等の四佛が大日を供養するなり。第一重に住する諸尊は、現在賢劫の一千佛なり。現在佛を擧げて、過去莊嚴劫の千佛、未來星宿劫の千佛を攝すと知るべし。此重の千佛の中の四隅に住するは、東南の隅より起つて、次の如く香、華、燈、塗の外の四供養の菩薩天女使なり。是れ則ち大日如來が、四

佛を供養し給ふなり。又此の重の四方の月輪に住するは、鈎索、鑼、鈴の四攝智菩薩天女使なり。即ち四方の門に居して一切衆生を引接するなり。又一大金剛輪と第一重との間に、四隅に大金輪を抱き、半身を現はすは、東南の隅より順次に廻轉して、次の如く火水風地の四天なり。金剛輪は空大を表するが故に、横平等の五輪塔婆なり。第二重の四方に位する各五尊は、外金剛部の二十天なり。其の中間にある四の三股杵は、十六大護を表す。又四隅にある忿怒三股即ち羯磨、鎮壇は、不動、降三世、軍荼利、大威徳の四大明王と傳ふ。又四波羅蜜八供四攝の天女を、定門の十六大菩薩と云ふ。此れに五佛を加へたるを三十七尊と云ふ。又三昧耶會等に、賢劫の千佛を列すべき重位に、十六菩薩を置くは、千佛を代表する菩薩なり。此れを賢劫の十六尊と云ふ。三卷の教王經等に説けり。又第一重にある四隅の蓮華座は、火水風地の四天の座なり。一印會等の外縁の四方に畫ける蓮華は、即ち門なり。金剛界の智に入るには、胎藏の理を以て能入の門となす義を示すに蓮華を以てす、此を蓮華門と云ふ。胎藏の金剛門に對照して知るべし。九會の前六會の壇にも、之を畫くべき理なれども、處挾き故に畧せしなり。又諸會の界道に金剛杵を置くは、

三股或は獨鈷金剛にして、金剛界の義を表す。一印會の大日の四隅にある瓶は、四智を表す。諸會にも之を具すべけれども、圖すべき所なき故に之を畧せしなり。又九會の最外の總縁に布ける草は、長壽草と云ふ。金剛不壞の義を表す。野山に繁茂する萬年草ならん歟。

第十八章 諸尊曼荼羅大例

心王大日如來の普門法界の曼荼羅に相對して、心數の諸尊各々の曼荼羅、即ち一門の曼荼羅の大例は、金剛界式に依るを以て法とす。其圖様は、



然れども、又、二重或は四重に圖することなきにあらざれば、概論す可からず。理趣釋經には、理趣經諸段の曼荼羅を説き、又勸修寺榮海の集めたる諸尊曼荼羅等あり。披見すべし。今は衆生界に縁厚きに就いて、阿彌陀と阿遮羅との兩曼荼羅を釋するに止め、餘は之れを畧すべし。

一 彌陀曼荼羅

(イ) 理趣釋經所説の圖



中央大月輪中に蓮臺を書き、其上に身白色にして五智の寶冠を著し、左手に初割蓮華を持し、右手は開敷の勢を爲せる阿彌陀を書き、四方の西方四親近は、法利因語の四菩薩を、前右左後の次第に列し、第二重の外の四供養は、三昧耶形を書き、諸尊皆月輪上の蓮華を座とす。又曼荼羅の中尊は、妙觀察の彌陀なり、其形相の觀音に同じきは、因果不二の深旨を示すものなり。又第二重の東方の天女は、貪、南方の地は嗔、西方の猪の首は癡を表し、北方の蓮華は涅槃を表す。即ち彌陀如來の一字心の飛字なり。何となれば飛字は<sup>ス</sup>又<sup>ツ</sup>又<sup>ツ</sup>又四字合成の字にして、<sup>ス</sup>又<sup>ツ</sup>又<sup>ツ</sup>又は次の如く貪嗔癡涅槃を表すればなり。古歌に云く。

<sup>ス</sup>又<sup>ツ</sup>又<sup>ツ</sup>又四字合成の風吹けば<sup>ス</sup>又<sup>ツ</sup>又<sup>ツ</sup>又も晴れて彌陀ぞあらはる

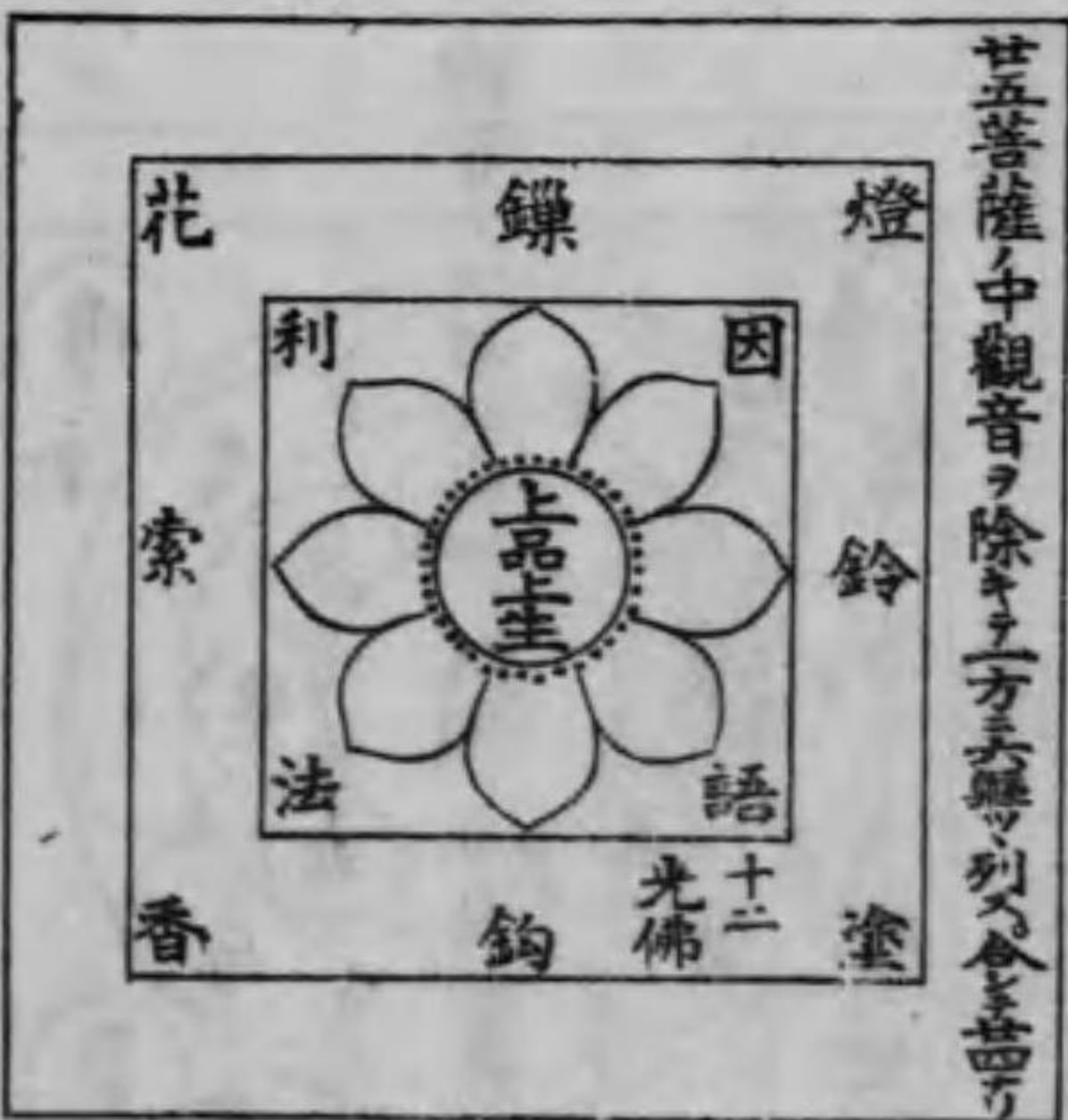
(四)、興教大師五輪九字秘釋の圖



惣して二重に作り、内院の中央に大月輪を安んじ、其中に入葉蓮華を置き、臺實の所に月輪を點じ、其上に又八葉蓮華を畫き、上には寶冠を被り、左手初割蓮、右手開敷の勢を爲せる阿彌陀を置き、凡て八葉に入葉の像を安んず。皆定印結跏なり。次の八葉に、東方より順次に廻轉して、觀音と慈氏と虚空藏と普賢と金剛手と文殊と

除蓋障と地藏とを置くべし。又圖の如く、梵字を布するも可なり。八葉界畔には、三鈷の首を畫くこと、胎藏八葉の如し。餘は圖の如し。又惣して界道には金剛杵を布置すべし。

(ハ)、惠雲法師請來九品曼荼羅



總じて三重に作り、第一重中央に入葉蓮華あり。臺上に上品上生の彌陀を安んじ、八葉に餘の入品の彌陀を安んず。内院の四隅に、法利因語の西方の四親近の菩

薩を安んじ、第二院には、四方に四攝、四隅に外四供を安んじ、其間に十二光佛を一方に三體づゝ置き、第三院には二十五菩薩の中、觀音を除きたる餘の廿四菩薩を、一方に六體づゝ置く。法菩薩の觀音を合して二十五なり。

(ニ)、二十五菩薩來迎の圖に就いて

密眼を以て之れを觀見すれば、即ち彌陀曼荼羅の來迎なり。何となれば西方の四親近の法(觀音)利(文殊)因(彌勒)語(普賢)の四菩薩は、即ち阿彌陀の四智なり。四智の總體は法界體性智にして、阿彌陀佛なり。此五智を具するの故に五々二十五なり。是れ則ち金剛界の彌陀曼荼羅なり。又良忍上人感得の十一尊來迎の圖は、彌陀一佛に十法界の一切法を具する故に、胎藏界の彌陀曼荼羅なるべし。

(ホ)、阿彌陀如來の形像

甲、經軌の異相

守護國界主陀羅尼經第二云く、結跏端身正坐、左手仰掌當於臍上、右手仰掌重左手。上以大姆指令頭相拄、此印名爲第一最勝三昧之印、即阿彌陀如來之印と。此印は、法界定印なり。攝眞實經中卷之れに同じ。大日彌陀平等不二を標幟す。